眼など、その姿などにつきましては、今更くだ〳〵しく申上げるまでもありますまい。日本では、千島と樺太を除く外は何處でも見られますし、殊に富士山の麓、裾野一帶は昔から有名な鶯の繁殖地であります。夏の中は、あの邊の濃木帶に棲んでゐますが、冬になると餌を求めて人里近くに出て來ます。梅の花の咲く頃は、殊にその姿を見ることが多いので、梅の花とは大の仲よしになつてしまつたのです。

あのホーホケキヨーと、美しい聲で啼くのは、三四月頃からで、これは申すまでもなく異性を誘ふ爲めで、いまチヽと鳴くのは地鳴きで、笹鳴きといひ、谷から谷へ響きわたるやうに鳴くのを谷渡りと呼んでゐます。ホーホケキヨーと啼く處から、經讀鳥などといふ異名がありますが、此の外に春告鳥だの、金衣公子だの、紅樹歌童などいろ〳〵の名がつけられてゐます。

そのウグヒスといふ名は、何處から來たかと申しますと、ウは生ふるといふこと、叢などをさしていひスは巣で、クヒは喰ひであり、卽ち叢のやうな處へ、巣を喰ふといふ意味であると、これは新井白石が『東雅』といふ書物の中に記してゐる處であります。

美しい聲で啼くといふ處から、此の鳥にはいろ〳〵の傳說が遺つてゐます。昔、神功皇后樣の御宇に、大和の國、三笠山のほとりに國栖の翁といふものが住んで居りました。鶯を飼ふことが大さう上手で、並ぶものなく、毎春、野から鶯を捕へて來ては、養ひ仕立てあげ、これに月、日、星と三光の啼き方を敎へ

多くの名鳥を世に出しました。數ある名鳥の中で、殊にその鳴き音の優れたのを選びこれを武內宿彌に贈りますと、宿彌は非常に喜び、更にこれを皇子明宮に獻上しました。この皇子が應神天皇樣であります。

紀貫之の女が、內裏から、紅梅を召されて『勅なればいともかしこし鶯のやどはととはばいかにこたへむ』と一首を詠じて上つたといふ鶯宿梅のお話は、あまりに有名であります。『雜和集』といふ書には、またあはれな物語を載せてゐます。孝謙天皇の御宇に、大和の高圓の寺の僧、最も可愛がつてゐた子に死別れましたので、明け暮れ悲嘆の涙にくれてゐました。ある朝のこと、庭の梅の木に、何處から來たか一羽の鶯が、頻りに美しい聲で鳴いてゐます。僧は不圖その鳴音を聞いて、何か意味のありさうな啼き方だと耳を澄ませ、筆を取つて、その啼く音を寫して見ますと、『初陽毎朝來、不相還本栖』となります、更に此の文字を三十一文字に綴つて見ますと

初春のあしたごとには來て見れどあはでぞかへるもとのすみかに

となりました。さては我が子の靈が、鶯となつて尋ねて來たのかと、一度は驚き、一度は歎き、それから持佛堂に入つて、ひたすらに我が亡き兒の靈を弔つたと申します。鶯が、人の靈となるといふことは『平家物語』でお馴染の瀧口入道が、無常を感じて高野山に入ると、橫笛の靈が鶯となつて訪れるといふ物語も傳へられて居ります。

諸國に傳へられる口碑の中にも、可憐な物語があります。昔近江の琵琶湖の畔に、一人の孝子がありました。母には先立たれ、父と二人暮しでありましたが、以前は家も富み榮え、その父も若いころは鶯が好きで、よく飼ひ慣らしてゐましたが、今は見るかげもなく零落し、鶯を飼ふ處でありませんので、時々鶯の啼く音を聞いて　心の鬱を散じてゐる位でした。親孝行の伴は、何とかして父を慰めやうと、いろ〳〵に心を碎いた結果、鶯の啼く音を眞似し、これを父に聞かせて慰めました。その眞似がまた眞に迫つて、ほんものを聞くやうだと、忽ち遠近の評判となりました。その中に、父も寄る年浪で、世を去つてしまつたので、今は聞かすべき人もないと、それからはパツタリ眞似をやめてしまひ、如何ほど人は所望されてもこれをやらず、つひには悲嘆のあまり、剃髮して父の墓守となり一生を送つたといふことです。これは『湖水漫錄』といふ書物に載せられた物語であります。

鶯を飼ふといふことが盛になりましたのは足利義政の頃からだと申します。『應仁後記』といふ書に次のやうな奥床しい話が載せられてゐます。應仁の亂といへば、例の細川山名の勢力爭ひで十三年も續いたといふ亂ですが、此の中に井上若狹守といふ人がありました。鶯を飼ふこと稀代の名手で、いつも城中これを飼つてゐましたが、その城は敵の爲めに圍まれ、今は唯落城の外はなくなりました。若狹守、不圖鶯のことを思ひ出し、この名鳥を心なき敵方に委せることは出來ないと、自から鶯の籠を兩手に捧げ、悠々と

落ちて行きましたので、敵も味方もその風流の志と膽勇に感じ入つたといふことであります。

德川時代になつてからは、鶯を飼ふことも一層盛になりましたが、殊に寛永年間には、將軍家にお鳥掛りといふ役が出來、越前屋彥次郎、いちはや文吉といふ二人がこれの掛りとなり、鶯の爲めに扶持を賣つて居りました。

上野の東叡の宮は、殊に鶯がお好きで、名鳥を養はれてゐましたが、上野の森にやつて來る鶯がどうも鳴く音が卑しいと、常々嘆じて居られましたが、その頃、宮家へお出入をし、御寵愛を受けてゐました尾形乾山は、宮の旨を受けて、京都から啼く音のよい鶯を探し求め、これを上野の森に放ちました。すると育ちの卑しい藪鶯も、だん〳〵と、京育ちのよい聲を眞似するやうになり、忽ち一山の鶯の鳴く音が變つてしまつたと申します。

かうして美しい聲で啼く鶯は、多く籠で飼はれ、啼き合せ會などもあつて、よい音を競ひますが、自然のものにもまた一種の趣きがあります。そして春も末になりますと、また山地へ歸つて產卵します。卵は葡萄色で瑪瑙のやうに美しく、一腹に五個位生むのですが、自分では巢を作らぬ暴君の郭公や杜鵑が、鶯の巢の中へ卵を生み落し、鶯が何にも知らずこれを育てあげますと、孵つたのは我が子に似てもつかぬギヤングで、却つて我が子がこれに虐げられるといふ結果を生みます。かうした習性など、既に萬葉の詩人

は、とうの昔に歌にしてゐるのであります。

鶯

次に鶯に移りませう。毎年二月、龜戸の天滿宮や、九州大宰府の天滿宮では、鶯替の神事が行はれます。これは諸々の災難を嘘にして、新しい幸福の年を迎へるやうにと、木彫の形面白い鶯を授かつて來るのです。何時、何人が考へ出したものか、中々趣味があり、鶯の形を見てゐると中々愛嬌のあるものです。かうした面白い神事に因まれた鶯といふ鳥はどんな鳥でせう。

それはあの木彫が大體の形を示してゐるやうに、背から尾へかけて黑く、胸と腹とが灰色、頰から咽喉へかけて紅色で、嘴は太く短かく愛らしい姿です。特長は此の頰の色の紅色の點ですが、これも雄と雌とは多少違つてゐて、雄の方が濃く雌の方が淡いのです。

此の鶯といふ鳥は、鶯と同じ燕雀目ですがシベリヤ他方に棲息し、冬から早春にかけて日本に現はれて來ます。鶯と同じやうに、梅の花の咲く頃に、最も多くその姿を見せるので、時には梅の蕾などを喰べてゐるのを見かけることがあります。こんな風で、自然梅と仲よしになつてゐるので、天滿宮の神事にも用ゐられることになつたわけでありませう。

更に面白いのは、此の鳥に『照り鶯』『雨鶯』とあることです。『照り鶯』は頰の色の赤い雄のこと、『雨鶯』は、淡い方の雌のことなのです。一說には啼き聲から來てゐるといふので、雄は晴れを呼ぶから『照り鶯』、雌は風雨を呼ぶから『雨鶯』といふのださうです。そして雨鶯の方は尾を動かすことが雄の『照り鶯』より多いともいはれてゐます。

いま一つ面白いのは、此の鳥の異名に『琴ひき鳥』といふ名のあることであります。元より聲の美しいところから來てゐるのではありますが、一つには啼く時の形が、兩脚を互違にあげながら、丁度琴を彈く時のやうな姿をするから此のやうな名があるといはれてゐます。時々鶯姫と呼ばれ、お姫樣にしてしまつてゐるのも、琴彈き鳥といふ名の緣からでせう。

花の雪ふらすやうその琴の聲

こんな句もあります。

駒鳥

今度は駒鳥のお話をいたしませう。駒鳥は野鳥としてよりも、飼ひ鳥として昔から有名であります。鶯と瑠璃とともに、本朝三鳥といはれ、大瑠璃、黃鶺、深山頰白と共に、和品四鳥ともいはれてゐます。鳥

學の方では、鷦科（つぐみ）に屬し、日本固有の鳥ですが、支那の東南部にも分布してゐます。雄の姿を見ますと上がオリーブ色で、顏から眼元、頰から胸へかけて赤みがかつた褐色を呈し、腹は白く、尾の方へ行くとまた褐色となります。雌は咽喉の褐色の部分が少なく、胸も一やうに灰色を呈して居ります。

駒鳥はかうして昔からよく知られてゐますが、その繁殖を營むのは深山の奥で、關東では日光、關西では大和の吉野山が有名であり、更に大和の葛城山、土呂川の奥、伊勢の宇治、京都の附近では比叡山、信州方面では木曾などで、小鳥の最も豐富な富士山の裾野には割合に少いやうです。

駒鳥はかうして深山の奥深く、溪流に近い處の倒れた木の下などに營巢します。それは多く木の根や、木の葉などを材料として、皿形で、通徑六七寸位、これに一腹四個位の卵を生みます。かうして繁殖期をすませ、冬になると麓に降つて來るのです。性質が極く敏捷ですから容易に捕へることが出來ませんし、捕獲を禁じられてゐる鳥ですから、無屆で捕へると罰せられます。

さて此の鳥の名稱ですが、これは馬の鈴の鳴る音に似てゐるとて、此の名があるのであります。チンカラ〳〵とも聞え、ピンカラカラとも聞え、古書には『チンコロ〳〵』と書いたものもあります。近頃此の鳥の啼く音の研究が、だん〳〵盛になつて來まして、此の聲を研究し、鳥の言葉が解るやうになりたいといふ公治長が、彼方此方に現はれて來ましたから、いまに面白い研究の結果も發表されることでせう。

頰白

次に頰白です。この鳥も、一寸郊外などに參りますと、盛に眼に映つて來ます。此の鳥は、今に限らず四季絶えず見られるのでありますが、秋から早春へかけて、一番多く人の眼にとまります。その名の通り頰に白い部分があり、これが眼印になつて名をつけられてゐるのです。支那では娥眉鳥とも呼ばれてゐます。この鳥は姿も愛らしいものですが、啼く音がまた變つてゐて、昔から『一筆啓上仕り候』と聞えるといはれて來ましたが、聞き方に依りますと、チリリコロロチチリと聞えるといひ、また遠州あたりでは、『ツンと五粒二朱負けた』と聞えるといひ、九州では『おらがとゝ三八四十二』と啼くのだといはれてゐます。

頰白の種類は、普通のものゝ外に、深山頰白、朝鮮頰白、頰赤などいろ〳〵ありまして、その中でも深山頰白は一番美しいものであります。

連雀

お次ぎは連雀であります。東京の市内などでは、あまり此の鳥にお目にかゝりませんが、少し離れます

と、多數群をなして來ることがあります。早春の鳥としては、よく知られてゐる方で、燕雀目の連雀科に屬し、その大さは、先づ椋鳥位と思へば大差なく、羽色は葡萄色かゝつた栗色が主で、頭には三角形をした冠毛のあるのが特長ですし、目尻にも一寸隈でも取つたやうに黑い處があります。脚はあまり發達してゐない代りに翼は强く、よく長い旅を續けることが出來ます。我が日本に見られるのは、緋連雀と、黃連雀とであります。緋連雀の方は、その翼の一部と尾の先が緋色であり、黃連雀の方は、同じ箇所が黃色になつてゐます。その棲息地は、東部シベリヤ方面で、それが冬から早春にかけて、多く群を爲して日本內地へ飛んで來るのです。啼く聲はヒーヒーとばかりで、大してよい聲とは思へませんが、姿が美しいので盛に昔から繪などに畫かれたものであります。

此の鳥が喜んで喰べるのは、八つ手の實や檜の實などですが、青森縣では、此の鳥を『ほやどり』と呼んでゐます。青森地方で『ほや』といふのは寄生木（やどりぎ）のことで、此の鳥が寄生木の實を喜んで食べるからと申します。『ほや』は萬葉集の『保與』の轉訛で、寄生木の意であること申すまでもありません。

早春の風物に此の鳥を配しますと、中々面白いもので、畫家の好んで畫くところであります。

連雀やひとりしだるゝ松の中

といふ蓼太の句がありますが、松の中に此の鳥を見かけるのも面白いものです。

瑠璃

今度は瑠璃であります。瑠璃には大瑠璃と小瑠璃とあります。大瑠璃は鶲科であり小瑠璃の方は鶇科で同じ瑠璃と呼ばれてゐながら科を異にしてゐるのです。併し文學の方では全く同じに見てしまつて瑠璃鳥などゝ呼んでゐます。その區別の一番眼につき易いところは大瑠璃の方は、咽喉の處が黑くなつてゐるのに反し、小瑠璃の方は白いのです。何れも瑠璃色した光澤のある羽毛が美しいので、春の花などに添へられて繪畫などに現はるゝ場合が多く、その對照が非常に美しいのです。大瑠璃には、別に竹林鳥の名があります。早春の鳥で、夏までは居りますが、秋になると日本を去つて南の暖かい地へ去つてしまひます。

ある鳥學者は、この鳥が傳書鳩のやうに、その巢に歸るといふ習性をもつてゐるのを利用し、通信用に仕立てやうとしたさうですが、途中大抵は猛禽類の爲めにやられてしまひ、目的を達するに至らなかつたさうであります。

鶺鴒

私は本年（昭和十一年）一月、あの大雪の前に所用あつて京都へまゐり、愛宕山へ登りました。日本一

高いケーブルカーで終點に達すると、まだ雪が二寸ほど殘つてゐました。終點から十餘町、頂上まで登つて行きますと、不圖愛らしい小鳥が殘雪の笹原の中を飛んで居ります。歩みを潜めてよく見ますと、それは鷦鷯（みそさゝい）でした。深山といふほどでもないのですが、都からここまで離れると、もうあまり人を怖れず、私は三四尺の間を隔てゝ、その愛らしい姿を十分に見ることが出來ました。何ともいへぬよい氣持です。私は常々双眼鏡を携へては、鳥の習性などを見に行くのですが、東京あたりでは、鷦鷯などは容易に見られません。よし昔は居たにしても空氣銃などに追ひ廻はされ、今では影を潜めてしまつてゐるのです。ですから、此の鳥の姿を見た時たまらなく嬉しく感じたのです。

此の鷦鷯は古い名を『ささぎ』と申しまして非常に目出度い鳥とされてゐます。何故に目出度いかと申しますと、その昔、應神天皇の御宇で、『大日本史』に左の通り記してあります。

仁德天皇・應神天皇の第四子なり、母は仲姫皇后、天皇生るゝ時、木兎あり殿に入る、是日大臣武内宿禰、亦子を生み鷦鷯産室に入れり、應神帝、以て祥となし、武内宿禰に謂て曰く、今朕の子、大臣の子、日を同うして生れ、兼て瑞祥あり、その鳥名を取り相易へて子に名づけ、以て後葉の契りとせんと、因て天皇づけて大鷦鷯といふ。

此の大鷦鷯命が、即位在したのが仁德天皇であります。

高き屋にのぼりて見れば煙立つ民の竈は賑はひにけり

と仁政を布き給うたことは皆様のよく御存知のことであります。

此の鳥、又の名を巧婦鳥と申します。雌雄共同して巣を營みますが、此の巣が中々巧妙に出來てゐるので此の名があります。見た處あまり美しいといふ鳥ではありませんが、擧動が如何にも快濶で、愛嬌がありますので飼ひ鳥としても昔から通なものになつてゐるのであります。

さて、かうした早春の鳥を一わたり見てゐる中に、季節はだん〳〵暖くなり、雲雀が長閑かに名乘り出で、燕が南の國から歸つて來ます。もうその頃は、お馴染になつてゐたお濠の鴨の群れなどは、遠く北の國に旅立つたあとであります。（昭和十一年二月十一日紀元節東京放送局より放送）

野鳥をたづねて

素晴らしい朝晴れだ。

夜半から吹き出した風が、裾野の森林帶を掠めて、遠く瀑布の落ちるやうな音を立てるので、不圖眠を覺ましながら、

「此の風では鳥が少なからう……」

と心の中で呟きながら床を蹴つて起き出でたのだが、その風の爲めに、雲と云ふ雲は殘る方なく吹き拂はれて、紫紺の空に、雪帽を被いだ大富士が惜し氣もなくその全貌を露はしてゐるばかりでなく、上部を朝日の光に染めた、薔薇色の微醺である。

「あツ……小河原鶲が啼く……」

と、かう叫んだのは、山梨縣廳から馳せ付けた中村幸雄さんの聲である。一行が一聲も聞き漏らすまじと耳を傾ける。

昭和十一年六月六日午前四時、野鳥の會が富士山麓須走村に催した、鳥類見學の幕はかうして開かれたのである。

◇

東道は裾野隨一の鳥通高田昂翁、その息重雄さん、これに中村幸雄さんが加はり幸領は中西悟堂氏だから鬼に金棒である。一行の中は、鳥學一方の權威たる清棲伯も參加されてゐるし、詩人の尾崎喜八、畫家に西澤笛畝氏、更に婦人も數名を數へ、遠く四國大阪からの參加者もあつて總勢五十人、朝露の道を先づ淺間神社の境内に入つた。

途中、黄鶺鴒がスキと美しい線を描きながら飛んで行く、嘴太鳥が一行を迎へる、黑鶫が、清曉な聲を聞かせる。朝日は登つて樹々のわか葉の間から、清々しい光線をさし込んで來る。四時四十五分、一行が自然躑躅國に近いた頃、山椒喰ひの飛ぶ姿を見た。これからは全く、鳥の世界に入つたやうなもので、飛ぶ姿、囀る聲、應接に遑もない。綠の木の葉の間から、藍と褐色の交叉を見せて飛び出したのは樫鳥だつた。ギア〳〵と叫ぶ、黑鶫がまた聞える。

そゝり立つ赤松の梢に愛らしい日雀の聲が聞えた。節の細かい小曲の連續だ。小げら、ちご鵐、更に一寸離れた處からチョイツチーといふやうな快潤な聲で眉白が迎へてくれる。鶯と小瑠璃がこれに和して、交響樂の音色はだん〳〵手がこんで來た。この外四十雀の輕快な聲、仙臺蟲喰ひの微吟が小瑠璃の中音に

交つて中々面白い。

たゞ待ち設けてゐた杜鵑がまだ聞けない、郭公も遠慮の形か、一聲も聞かせてくれない。昂さんは

『あとで、巣の見學の時に聞かれますよ』

といふ。中村さんも亦

『いまに鳴きませう』

とこれに和す。

陽は漸く高く登つて來た。一行は登山口の草の上にいひ合せたやうに腰を卸した。小さめ鶸と、小瑠璃がまた啼き出す、双方かけ合ひのやうである。じつと林の間を見てゐると四十雀が、輕い軀を右から左へ上から下へと囘轉させてゐる。

私は不圖前日聞いた、兵さんの鳥の啼音を思ひ出した。兵さんは、本名高田兵太郎と呼ぶ、今年六十二とか聞いた。平常は淺間神社のお宮番をしながら、求めに應じて鳥の聲を聞かせる。大抵は口先と舌の技巧丈けでやる、一番はじめが大瑠璃で、それから小雀、山雀、鶯、虎鶫、鶸、山鳩、筒鳥、杜鵑などゝ進んで來る。此の筒鳥や山鳩は兵さんの傑作中の傑作であり、大瑠璃は十八番中の逸品だ。

『今度はゴロチヤンをやります』

といふので、ゴロチヤンとは何だと聞いたら、傍から昂さんが

『梟です』

と笑ひながら註を入れて下さつた。成るほどこれもうまい、そして、筒鳥などは、雄と雌とちやんと鳴きわけるから妙である。杜鵑も兵さんの傍にさへ居れば、幾度となく聞けるわけ、そしてチヨボイチーといふ眉白から、ツキヒーホシと聞えるといふ三光鳥、常鶸までやつて鳥が最後である。大きな聲から小さい聲、群がる時、飛んで行く折、何か驚いて鳴き立つ叫び、それが口先から巧みに發せられるのである。

兵さんは、かうして一日、幾度となく鳥の聲帶模寫を繰り返してゐる。時に小鳥寄せをする。兵さんが程のよい頃を見はからつてその寄せやうとする鳥の聲をすると、忽ち、遠くからその聲を聞きつけてやつて來るのである。至藝といつたつて、こんな至藝はない。兵さんが、どうして、こんな藝を覺えるやうになつたか、それは兵さん自身でも、はつきりとは言へぬらしい。須走といふ處に生れた人とて、富士の森林を我が家のやうに心得て宿屋の手傳ひしたり、登山客の案内をしたりする中に、自然に鳥が好きになり一寸、一聲二聲眞似する中に、だん〳〵と堂に入つてしまつたらしいのである。

私は兵さんの顏、その口眞似を思ひ出しては、ほんものゝ聲に聞き恍れたりした。

鶯が啼き出した。中村さんはいふ。

『鶯の啼き聲だとて、單なるホーホケキョーばかりではありません。その環境によつて、鳴く聲が違つて來ます。他の鳥の鳴く音を眞似るといふことも爭はれぬ鳥の習性の一つです。私が聞いた中で、面白く感じたのは甲州のある場所で、そこには、水の少い水車がギイ〳〵と低く音を立てゝ廻つてゐました。すると鶯が何時か此のギー〳〵を聞き込んで、その囀づりの末へ附加へてゐるではありませんか……』

と、面白い話である。

日は漸く高く昇つた。富士の姿は、彌が上にも鮮かに仰げる。私達は、一旦宿に引返し朝餉を認めて、第二の行動に移らねばならない。

◇

朝食を取つて、再び宿の米山館を出たのは午前八時である。これから山麓の森林帶を歩いて鳥の巢を探さうといふのである。巢は前日に高田昂さんが、極く手近い處で二十餘ケ所も探して置いてくれたのである。これが此の行の眼目なので、カメラマンはカメラの用意をする、西澤畫伯はスケツチブツクを小脇に抱へる、昆蟲の採集網を持つもの、胴籃を肩にかけるもの、流石に緊張味が見える。

場所は須走小學校庭から、瀧みちに出て、登山道左手の灌木帶に入つたのである。筑波根うつぎと、木

苺の花か、さゝやかな徑を彩る處、もんしろ蝶や、揚羽が盛に飛び交ふ。杜鵑が頻りに啼く、初夏の風趣滿喫の體である。私達八九人は高田重雄さんの案内で、先づ此の灌木帶に青鳴の巢を見、それから、小瑠璃の巢の前に立つた。巧妙を極めた構造で、巢は富士櫻の下に細い草莖や根などで椀形に作つたものだが此の中で、じういちの雛が孵つてゐる。見れば青磁色した美しい小瑠璃の卵はまだ一つ二つ殘つてゐたが、これも思ひもかけぬ侵入者の爲めに巢外へ投げ出される運命にあるのであらう、思へば不憫なものである。孵つたじういちの雛を掌へのせて見る、親は暴君でも、雛は何もしらない、そして肩をつぼめながら、背へ圓い窪みを拵らへる、此の窪みに宿主の卵をのせて投り出すのだといふ。

今度は一寸谷を下りて杉の林に入る。この中に鷂（はいたか）の巢がある。巢は杉の木の地上五六間の高さの枝の股に枯木や細竹のやうなもので作られてある。中西氏は、早速巢に近い一本の杉に攀ぢ登つて、巢の中をのぞき込み、手を伸ばして卵を取出して、色彩や大さの說明をされる。

此の時、鷂の親鳥は、抱卵の時刻が來たのか、巢の近くまでやつて來たが、巢の傍の杉の木には既に人が近附いてゐるし、下にも多くの人の姿が見えるので、非常に不安な樣で二聲三聲、高らかに啼きながら巢の方へ鋭い視線を向けるから、幾回となく、周圍を旋回してゐる。一寸、枝にとまつては巢の方を氣支かはしげに眺め、また旋回する。あまりにそのさまがいぢらしいので、中西氏も樹上から降り、次の巢の

場所目ざしてこゝを去つた。我等の姿が遠かると、鷁は疾風の如く巣の方に翔り來つて、やがて枝と枝の間にかくれてしまつた。鷁の卵は薄い瑠璃色で褐色の斑點があり、巣の中には五個あつたさうである。

次に日雀、それから青鶫の巣を見た。青鶫の巣は枯葉の上に曲物形に作つてあつた。こんな巣の作り方を見ても、鳥それ〴〵の個性が出てゐるから面白い。何處かで頰赤が鳴いてゐる。午前十時三十分である。

昂さんの案内で、更に灌木帶を進む。ぎんらんが清淨な花を捧げてゐる。敦盛草が朱鷺色の幌を傾ける、孔雀歯朶が、思ひのまゝに翼のやうな葉を擴げてゐる。植物美の豪華版だ。時折銀色した露がきらめく。

一行の足はとまつた。見れば五六尺ばかりの富士櫻の枝を撓めて、そこに巣が載てゐる。隨分不安定な場所の撰定だ。親は姿を見せぬが、巣の中には青灰色に赤い斑點を散らしたやうな卵が三個入つてゐる。

『これが黒鶫（つぐみ）です……』

と重雄さんが教へてくれる。カメラが動き出す、寫生帖が擴げられる。

その次に見たのは、不吉の鳴き聲をするといはれてゐる虎鶫の巣で、小楢の木にやゝぞんざいに出來て居り、中には同じやうな卵が三個入つてゐた。

更に進んで行くと、遙か彼方で筒鳥の啼き聲が聞える、皆一時に耳を傾けた。次の眉白の巣を見た時には、抱卵中の親鳥が驚いて飛び出したが、巣の中には卵が二つあつた。變つてゐたのは、黄鶸（びたき）と小雀（がら）とが一本のやしやの木に上下に洞穴を作つて營巣したものであつた。蒼鷹の巣も見たが、これは親鳥が姿を見せず、卵は二個で青灰色だつた。

かうして、午前中の見學は終り、一行は天然躑躅の花の中に休憩する。

◇

午後からも、巣の見學は續けられた。數多く見た中で、再び出あつた小瑠璃の巣の中には、居候のじういちの卵か孵らず、小瑠璃の方が先に孵つてゐたのを見た。何も知らず雛が育つて行く中に、此の暴君の卵が孵つたらどんなに驚くことだらう。赤腹の卵も見た、富士櫻の枝に、面白く拵らへて、中には四個の卵が生み落されてゐた。

かうして幾つかの巣を見ながら、登山道の灌木帶に別れを告げ、再び淺間神社を訪れた。この奥の林の中には、仙臺むしらひの巣があるのである。それは拜殿から半町ほど進んだ奥の崖下で、二三日前見た時にはまだ卵のまゝであつたといふのであるが、今は皆孵つてしまつて、狹い巣の中に身をすりよせて蠢めいてゐる。その朝あたり孵つたのだらうとの事であつた。

カメラの人々は一齊にレンズを向けた。場所が場所なので、三脚の据え方が中々むづかしい。誰かゞ巣

の中へ指をさし入れたら、雛が三四羽一時に轉げ出した、此の時である、親鳥は突如姿を現はして、巣に近かうとしたのであるが、意外の闖入者の爲め近よることが出來ない、親鳥はその巣の間近くやつて來ては樣子を窺うやうである、見れば、その嘴には、雛へのお土産の餌が啄まれてゐた。

仙臺むしくひの巣の見學を終つたころは、夕陽漸く春いてゐた。大富士は何時の間にか雲の披衣に肌をかくしてゐる。一行は、次で黃鶺鴒や、赤げらの巣など歸り路に見て、宿に歸つたのは五時頃である。私の手帖には、こんな歌が書きつけられてゐた。

さみどりの若葉を透きて洩るゝ陽に小鳥の雛は育ち行くらし

瑠璃鳥も青鳴の雛も目をとぢてちゝとしなけり青葉がけの巣に

裸身をみなすりよせてまどろめる雛鳥の上にもるゝうすれ陽

山吹の花の色せる嘴の大きく見えて雛はまどろむ

栗の木の空洞の奥にちちちと聲のみすなり赤げらの雛

綠の翼

佛法僧の飛翔

佛法僧鳥がた噂に上つて來た。ラジオで放送された遠州鳳來寺山からの佛法僧鳥は、木の葉木兎で、聲も非常にはつきりと聞えたが、五月の中旬、私は當時朝鮮旅行中の南薫造畫伯から、一枚のスケツチ葉書を頂いた。それには一羽の美しい鳥が飛んでゐる。畫伯の說明によると、場所は成歡の敢場で、畫伯がその中を歩いてゐると、二十間ほど前の林の中から、鳩位の大さで飛び出した鳥であるといふ。色は綠色そして擴げた翼には圓い斑點があり、それが陽の光に映じて天鵞絨のやうな光澤を發し、非常に美しかつたといふ。畫伯は、これが多分佛法僧ではないかといふ疑問を寄せられたのである。

お耻しいが、私はまだ佛法僧の飛んだのを見たことがないので、何時か質して見やうと思つてゐた矢先、をりよく內田淸之助博士にお目にかゝつたので、その話をすると、それは正に佛法僧らしく思ふといはれたのである。

越えて五月三十一日に、朝鮮昌德宮の祕苑から、鳥の聲の中繼放送があり、此の苑中にも佛法僧が棲んでゐるといふ苑長さんの說明を聞き、その飛ぶ姿などの說明を聞いて、愈々南畫伯のスケツチが佛法僧に違ひないことがわかつたので、その廣い成歡の牧場の中を美しい濃綠の翼を擴げて翔り行くさまが目のあたりに見るやうな心地された。

するとラジオでいま鳴いたのが佛法僧ですと說明された。私は偶然の機會に、おぼろげながらでも、佛法僧鳥の飛ぶ姿を想像することが出來、中繼ながらも木の葉木兎ならぬ姿の佛法僧鳥の聲を聞いつたことを、非常に意義の深いのを覺えた。

法隆寺の斑鳩

奈良といへば、直ぐ斑鳩の宮が思ひ出される。法隆寺の高い金堂や、五重塔などの美しい建築が目にうかぶ。

斑鳩へ
平群大野の高草の
黃金の海とゆらゆる日

といふ薄田泣菫氏の、『あゝ大和にしあらましかば』の一節が誦さまれる。

此の奈良の斑鳩は、昔からいろ〳〵と議論があつて、學者の說によれば、これは唯の鳩であつて、嘴の黃色い蠟細工のやうな桑鳩ではないといひ、一方では、斑鳩は全く、いま豆まはしといふ嘴の黃色な桑鳩で、鳩のことではないといふ。つひ近頃では小杉放庵氏の隨筆などにも、これに疑をかけて書いてあつた。

處が私は、この春、家族を伴つて奈良に遊び、法隆寺に詣でた時、不圖金堂の脇の庭に一羽の桑鳩を認めた。あの美しい赤松の枝から枝へ飛び移つてゐるのである。

伴れて行つた幼い甥が

『伯父さん、あそこに面白い鳥が……』

と指すので、初めて氣がついたのである。あまり眼のよくない私は、二十間ほど離れてゐるので、双眼鏡の力を籍りなければはつきりとわからず、双眼鏡を手にして、初めてそれが桑鳩に間違ひないことを確かめた。

この邊にかうして飛んでゐるのを見ると、昔の『いかるか寺』や、『いかるかの里』と呼んだのは、矢張り鳩ではなく桑鳩であつたか知れないと思つた。

それとも鳩のことを『いかるが』と呼んだのかしら……とも迷つて見た。

斑鳩の里は、いま夢殿のある處がその址である。皇極天皇の二年、蘇我の入鹿、聖德太子の御子、山背大兄王を此の宮に圍み、巨勢臣德太古、土師婆婆連猿手をして、王を攻めしめたので、王は一族とともに宮殿に火を放ち、悲慘な御最期を遂げられたのである。傳說によると、王の一族の亡魂が桑鳶となつて此の地に群がつて來たので、此の地名となつたともいはれてゐる。

いかるかやよるかの池はこほれども富の小川の流れたえせぬ　　權僧正　公朝

の、よるかの池も此の近くにあつたと聞き、いま目の前に、一羽の桑鳶を見て、何ともいへぬ感慨に浸らせられたのであつた。（昭和十一年）

小鳥づくし

これは近松の淨璃瑠『娥歌加留多』の中の『小鳥づくし』である。骨子は例の瀧口入道と横笛の悲戀、これに重盛の發菩提心を絡ませたので、『小鳥づくし』はその放生會の一節であるが、こんなものを見ると近松も中々の小鳥通であつたと見える。一寸書きぬいてゐたので、座興に加へて見た。

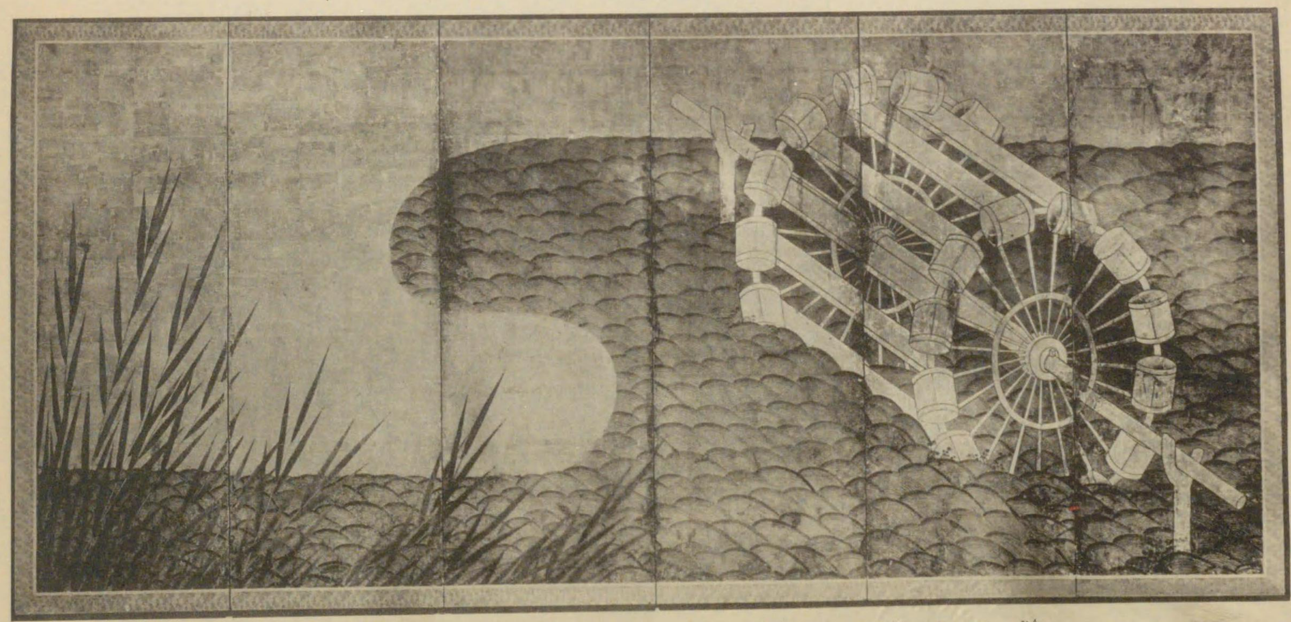
はや日限もきた山の、茸狩の御遊とて、紅葉を葺きて御假屋、御亭主方には小松殿、小松のかげに庭籠をくみ、數の小鳥をこめらるゝ、中宮たちいで、御覽あれば、百千の鳥の籠なれて、見知らぬそでにもなりつらん。遊ぶつばさに誘はれて、罪も消つゝ紫の、雲のうてなにのりの花、法ほけ經よむ鶯の、心も花の都鳥、神のめぐみの深き世に、大瑠璃、小瑠璃、燕、袖にむれつゝ啼く聲は、ひいやひよ鳥、四十雀、色も匂ひもふみみ聲、鶉衣のつまことの、ひゞきにかよふうその聲、野澤の水に影見えて、あかるくくだる夕雲雀、うき事聞きしみみづくや、百舌のこどもを手に取れば、ゆらぐか玉の尾長鳥、胸のひたきに立つ煙、むら〳〵雀、てりましこ、輕き羽風に山雀小雀、五十雀、また十二雀、ゑなが、さざゐに松むしり、菊いただきか菊のませ垣、そなたへくるり、くれはのとりぐゝは、聲のあやなす連雀や、思ふ中には處もつらき、人目のせきれいうちとけて、いつもはめぐりあふむどり、忍び大椋こよひ小椋と人につぐみの行々子、鳥にいふなかし鳥、知らせまいとて、鳴の羽搔としよりこひこひ口まめ鳥に、ほつてあいたうほとゝぎすの一聲友をば呼子鳥、かほよ鳥あゝ三味線のこま鳥や、山鳥の尾のしだり尾の、長き千歲をはなちてやるは、をし鳥とおぼしめせよも人の爲め、瀧口と横笛が、うき名をつゝむ御情け、御世菩提にかこつけて、鳥の音名を樂しむも、よしなや、同じ佛性と籠の口あみ打開き、皆一同に放さるれば、翼をかはし、羽をのして、百悅の聲をあげあなたこなたにかへり行く。

と、こんな短かい文章の中に、三十幾種の小鳥の名を讀みこんで、それを七五調でたゝんで行く手際は誠に巧みなものである。小鳥の名を讀み込んでゐるものでは、長唄の『敎草吉原雀』の

その手で深みへ濱千鳥、通ひ馴れたる土手八町、口八町にのぜられて、沖の鷗の二挺立、三挺立、素見ぞめきは椋鳥の、群れつゝ喙木鳥格子先、叩く水雞の口まめ鳥が、孔雀染めきて目白押しも有名たが、ほんの五つか六つで、問題にならない。西鶴も文章はうまいが、こんな仕事は、さすがに近松のお手のものである。

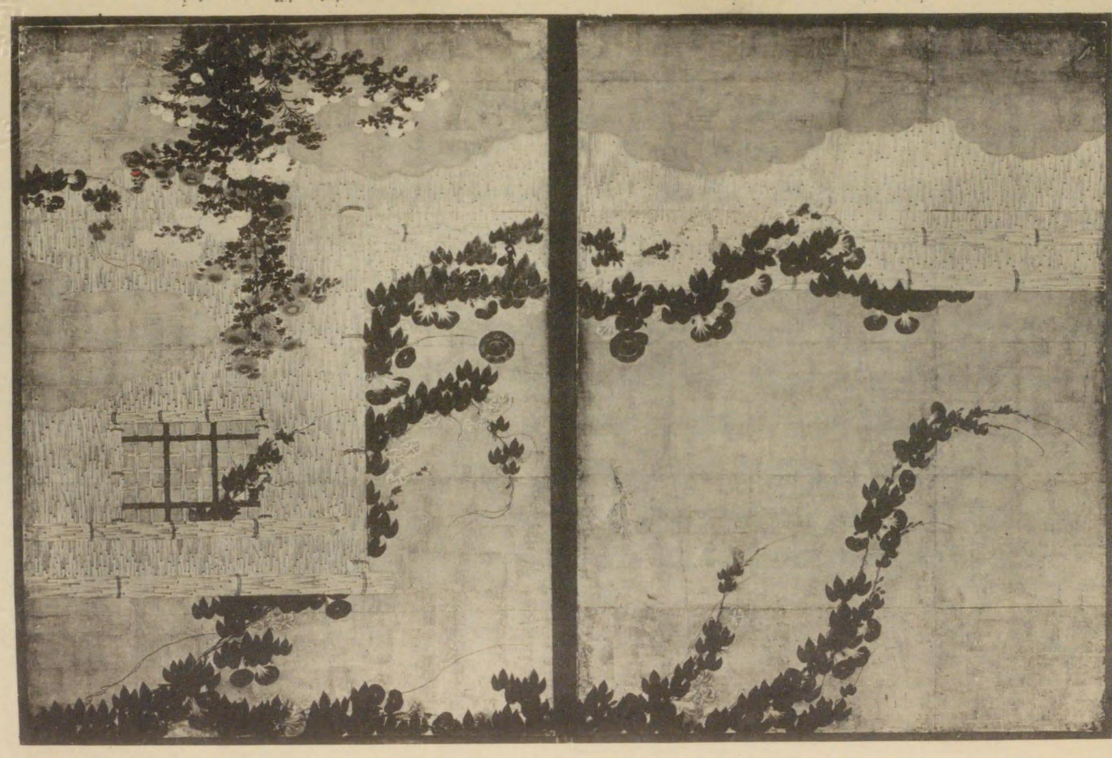
晴快風凱

筆齋北飾蔦（照參筆雜雲）



風屏双百山桃　　滝の水車

（水車・井戸・垣・參照）



繪襖院殊曼　　鎌朝の垣

（照參・垣・戸井・車水）

鳥　語

權大納言柳原紀光が、寛政五年から九年に亘る五年間に書き綴つた『閑窓自語』といふ隨筆の中に、「公治長並百鳥語書事」と題して次のやうな記事を載せてゐる。

少納言藤原通憲入道（信西）の所持の書目錄あり、めづらしき書ども多し、そのうちに、公治長並百鳥語一卷としるせり、むかしはかゝる書もわが國にわたりけむ、今は人の圖にものこりや聞かまほし。

と。藤原の信西入道といへば、平治の亂の立役者で、その最期は穴を掘つて匿れ、それでも遁れ完せず、獄門になつた程の人物であるが、その學は和漢古今に通じ、經學、天文、算通、佛敎、凡そ學として知らざるなく、究めざるものなく、その藏書の廣汎であつたこと、『九流百家備はらざるはなし』といふ程であつた。その豐富な藏書は、惜しいかな信賴が放つた火に燒け失せてしまつたのであらう。今は唯その藏書目錄の中に、彼れが博識宏才を偲ぶばかりである。此の『公治長並百鳥語一卷』は、信西が蒐集して居た中の珍籍であつたに違ひないが、その後、かうした珍書の現はるゝこともなく、紀光をして、此の嘆聲を漏らさしめたのであるが、その內容は、多分公治長が、よく鳥語に通じて居たことを詳說し、鳥語に

對する古人の觀察が、必らず此の一卷の中に精しく盡されてゐたに違ひないと思ふ。

◇

公冶長は人も知る、支那の春秋の頃、魯の國から出た人で、孔子の門下として聞え、『論語』の中にも

長妻（めを）すべし、縲絏の中にあれども、その罪に非ず

といつて、その女を與へた程の人物、よく鳥語を解し、悉くその啼き聲に依つて、鳥の性情習性を知つたといふ。だから公冶長の研究は定めし面白いものがあつたらうと思はれる。

動物を飼育すれば、ある程度まではその心持がわかる。それは經驗家のひとしく語る處であるが、どの位の程度まではつきり判るかは疑問である。然るに支那人には、鳥語を解したものが、公冶長ばかりでないと見え、いろ〳〵の人が登場して來る。

山崎美成の『三養雜記』には、『劉氏鴻書』から引いて、『左傳』には介葛盧といふもの、獸語を解すとあるし、『衝波傳』には、いまの公冶長のことを記し、『論衡』には、廣漢陽翁々中が馬語を解すとあり、『抱朴子』には、李南亦鳥語を解すと記し、更に陰子春も、鳥音を知り、祝雞翁は雞數百群を養ひ、各々に名を命じ、これを呼べば則ち應ずといひ、勃海の僧薩多羅といふものは、西明精舍に寓し、能く鳥獸の言に通じ、往々烏鵲燕雀の喧噪を聞いて、則ち休咎及び閭巷間の事を說く、それは恰も目擊したもの丶やうであ

ると記してゐる。

公冶長や、李南や、陰子春は、唯鳥語を解する丈けだが、薩多羅になると、鳥鵲燕雀の噪ぐのを聞いて世間のことまで知つてゐたといふに至つては、全く驚くの外はない。

◇

『三養雜記』の著者は、かうした支那に於ける幾多の例を擧げたのち、次に日本に於ける鳥語を解するもの丶實例をも擧げてゐる。その一に曰く

予が舅氏のつかはれし小竪、後園にて百舌をおとす、囮の頭をとらへて、ひたとふれども鳴かず、かの小竪、百舌の鳴聲をまねて、キキと鳴き、かたへに隱る、かの聲を聞きしより、高樹の上にありし百舌の、囮を見つけて飛來り、はごにつく、先年京師にて、鵶のまねせし乞食あり、一度鳴けば多くの鵶群り集る、これらを見れば、彼の類の語にわけなきこと知るべし。

これは、鳥語を眞似てゐるので、鳴き聲でこれを誘ふのであるから、呼子笛などの先驅をなしたものであらう。或は富士山麓の、高田兵太郎翁の如きはこれ以上であるかも知れない。處が前の柳原紀元の『閑窓自語』には、今少し進んだ話がのせられてゐる。曰く

前對馬守藤原祐民（家人圖書寮）かたりけるは、萬里小路前大納言尙房卿に、ひさしくつかはれける

女の、鳥のこゑをよくききしるよし、かねて聞きおき侍りしに、ある日、かの家にまゐりて待ちゐけるあいだに、からすいとうなきければ、かの老女、おくの方よりいできて、あしきからすなきかな、人にけが、あやまちあるにこそといひしほどに、しばしあつて、臺所に下仕の女の庖丁にて、手のゆびをきりしとて、なきさわぐ、さてこそかの烏の音をしるとききしに、つゆたがはざりけりと感ぜしにこそ、公冶長のためしもおもひいでて、ふしぎなる事なり。

とある。烏啼きが悪いといふことは、戯曲の『鏡山』ばかりでなく、いろ〳〵のものに見えるが、かうして怪我云々と細いことまで知つたといふのは不思議である。

◇

西洋では、アツシシの聖者フランシスが、鳥に教へを説いたといふ物語がある。その德が小鳥にまで及んで、フランシスが教へを説くと、さま〴〵の小鳥が集つてこれを聞いたといふ。これがジョツトの名筆になつて今に遺つてゐる。フランシスの教へを小鳥が聞いた位であるから、フランシスも小鳥の言葉がわかつたのかも知れない。西洋の公冶長であつたか知れない。

日本の謠曲に『善知鳥』がある。善知鳥は人も知る北海に棲む鳥で、傳說によると、此の鳥は、海岸に卵を生み、雛を育てる。そして親鳥は雛を呼ぶに『うとう〳〵』といふ、雛がこれに應へて『やすかたや

すかた』といふと、それを中納言烏頭安保の物語に結びつけてゐるのが、謠曲『善知鳥』の骨子である。

青森地方では、善知鳥は珍らしくないが、私はまだ同地方で親しく此の鳥の鳴く聲を聞いた事が無いので、こゝにはつきりといふ事は出來ないが、親鳥のかうした啼き聲に對し雛がこれに應へるとすれば、矢張り一つの言葉ということが出來る。雞が庭で喜戯しながら發する聲にも三四十通りあるといふし、雞舍の中にあつて牝雞が、雛に對して發する聲にも高低があり、變化があり、それが時に迫害者に對する警戒となり、時に親鳥としての愛撫の言葉と聞えたりすることは、既に人の知る處である。かうなると支那の祝雞翁の故事も強ち、荒唐無稽の物語とのみいひ切れない。

◇

『芥子園畫傳』の鳥の畫法を示す中に、『和鳴』がある。小鳥と小鳥が何か囁きあつてゐる處を描いてゐる。かうして何か物語るやうに互に相肯き、或は相戯れてゐる所は、決して唯無意義に聲を發してゐるのではないやうである。

鳥類の發する聲の中に、啼と鳴があり、鳴は俗にいふ地鳴きであり、啼は囀りであつて、啼は歌であり鳴は言葉であるとは既に一部の人々の間に行はれてゐる說である。野から野へ、森から森へ、あの群をなして飛んでゐる椋鳥の群れが、先達と見える一羽の發聲により、全群が動き出したり、靜止したりするの

も、よく野外に見受ける處、これもリーダーの言葉であるに違ひない。

同じとまり木に、何事か囁きかはすカナリヤを見ても、それは平和な一つの囁きである愛の言葉の交換であらう。

あらゆる小鳥類の啼き初めから、啼きのやむまで、仔細にこれを觀察し、その聲を聽き分けてゐたならそこに何ものかを感得するに至るのではあるまいか。公冶長ならずともその言葉を聽きわくることが出來るかも知れない。それには科學の力ばかりでなく、小鳥に對する愛と、興味の方が、より速かにそれに達する捷徑といふべきであらう。

雲雜筆

伊豆の海ふりさけ見ればはるかなる七島あたりむらさきの雲

これは昭和十年の暮、南伊豆の石廊崎あたりを歩いて、勅題に因み詠じた作の一つである。拙いものながら實感ではある。『海上雲遠』は將に太平の祥であり、繪に畫いても美しいが、雲の美觀は唯かうした場合ばかりでなく、雨を含んだ積亂雲でも、中空にちぎれ漂ふ卷雲でも、その形の面白さ、その色彩の美しさ、ラスキンならずとも、嘆賞措く能はざるものである。

殊に雲が美しさを增すのは、太陽の光線を受けて、その色彩の變化を現はす時にある。祥雲といひ、慶雲といひ、瑞雲と呼び、景雲といふ。皆さうした時に雲を讃へた稱呼に外ならない。かうして古人が自然に對し、深い畏敬の念を持つてゐた證據は、歷史の上にも明かに殘つてゐる。五色の雲が大極殿の上に現はれたので、目出度い兆であると、年號を改めたことは『水鏡』にも載つてゐる。それは天武天皇の御宇で

四年五月五日、大極殿の南の樓の上に慶雲見えしかば、年號を慶雲とかへられけり。

と見えてゐるし、『大日本史』には、稱德天皇の神護景雲元年の條に

八月八日乙酉、參河言す、慶雲現はれたりと、六百僧を西宮の寢殿に召して、齊を設く、十六日發己詔して元を改め、天下に赦し、群臣に位を進め物を賜ひ、孝子順孫、義夫、節婦を表旌し、高年、鰥寡孤獨を賑恤し、天下今年の田租の半を免ず。

と記し、更に、その年、九月にも

九月戊申の朔日、日の上に五色の雲あり、

と錄してゐる。五色の雲は餘程目出度いものとされてゐたと見え、淳和天皇の天長三年十一月二十七日の條にも、次の如く記してゐる。

少外記從六位下都宿禰廣田麿、左大吏正六位上御野宿禰清庭等が奏を見るに、儛く七月十六日申の刻五色の雲あり、豐樂殿の西に現はれたりと、紀伊守從五位下占野王が奏に曰く、去る八月二十八日慶雲海部郡賀多村の伴島の上に現はれたりと、皆彩色紛郁として美麗なること常に非ずといへり。臣等謹みて惟みるに、殿の豐樂と號するは四海の觀娛を驗はし、島の聖諱を名とするは、一人の有慶を表はせり臣等幸に會昌の期に値ひて、頻に希世の瑞を見る、其の朴舞をなすや、寔に恒品に面し、恒豫の至に勝へず、謹みて拜表陳賀以聞す。

と、人々がこれを瑞祥として如何に悅んだかがわかる。五色の雲と瑞祥とすることは、『西京雜記』に

五色雲富瑞、三色爲裔。

とあるあたりから出てゐるのであらう。裔は黃色の雲で、これまた五色の雲に次いで目出度いものとなつてゐる。

◇

雲が太陽の光線を受けて、美しい色彩と、形狀とを現はすものゝ一つに『豐幡雲』がある、一に『豐旗雲』に作る、それは雲が靜かに旗手に流れて、これに夕日が金色の緣をとつた時の莊嚴な光景である。

『萬葉集』第一卷に收められた天智天皇の御製

わたつ海の豐幡雲に入日さし今よひの月夜きよく明りこそ

がそれで、昭和十一年、第一回の帝展に中村岳陵氏が、六曲半双にこれを畫き、日本畫の題材の上に一つの新しい記錄を作つた。

横に棚引く白雲には、『布雲（にぬくも）』の名もある。萬葉集の第十四卷に

夕さればみやまを去らぬ布雲の何か絕えむと言ひし兒ろはも

とある。なるほど、何といふ美しい言ひまはし方であらう。

かうした場合の山に、山の峽から湧き立ちのぼる雲にも無限の趣ぎがある、眞山民は、それを

我愛山中雲、日々相往還・迹與人俱閑、有時抱幽石、伸我林下眠、豈不能爲霖、安肯輕出山。

というてゐるが、「我は愛す山中の雲、日々相往還す」は、伴蒿蹊の

心なきものとはいはじ夕暮は出て來し山にかへる白雲

と一脈相通ずる處があつて愉快である。

かうした雲の趣きは、曾て松本双軒庵氏の舊藏であつた青木木米が『雲出山腰』の作に見ることが出來た。それは簡素な線條の幾つ、流れ渦卷いて山腰をめぐり、こゝに譬へやうもない幽玄さを現はして居たものであつた。

更にかうした雲の變幻怪奇を、米友仁の雲山圖卷に見る。巒より巒に、嶺より嶺に、夢の如く、幻の如く、心あるが如く、心なきが如く、人をして座ろに塵外の境にあるを思はしめるのである。

◇

由來、東洋畫には、雲に獨特の描法があり、これが山水畫をして素晴しいものにしてしまつた、『芥子園畫傳』などには、僅かに約勾雲法と大勾雲法の二種しか示して居らず、古來傳へられてゐる方法として、更に吹雲法と勾粉法とを擧げてゐるに過ぎぬが、

雲乃天地之大文章、爲山川被錦繡、疾如奔馬撞石有聲。雲之氣勢如見、大凡古人畫雲祕法有二、一以水之千巖萬壑相湊、太忙處乃以雲間之蒼翠揷天、倏而白練橫施層々銳斷、上頭雲開髻青再露、文家所謂忙裡餘閒、反使閱者目速五色山水之一丘一壑、看意太閒處、乃以雲忙之、水畫山窮、膚寸斯起陡如大海幻作層巒、如文家所謂引詩淸寡以增文勢、餘畫山水諸法而殿之以雲者、亦似古人謂雲乃山川之總、亦以見虛無渺中、藏有無限山皴水法、故山曰雲山、水曰雲水云々。

といつてゐる如き、雲をよく會得して、その描法を示したものといふべきである。

◇

山水に現はれた雲ばかりでない、私達は俗に靈芝雲と稱する雲の一種の形式などが、如何に面白く、且つ巧みに利用され、運用されてゐるかにも驚く。

古い詮素は、その方の專門の學者に任せるとして、かうした雲の形の面白く表現されてゐるのは、オーレル・スタイン氏が發見した燉煌の『引路菩薩』あたりではあるまいか、その靈芝雲は、或は縱に、或は橫に、或は斜に、そして末は微妙なる線となつて流れ、雲の流動をよく表現し、これに菩薩を乘せて神祕感を深めてゐるのである。その表現法の簡にして、且つ變化多く、然も自然の雲の形象を巧みに取入れてゐる點は、全く驚くべきものがあるといはねばならない。

これは唐代あたりのものであらうが、それが我が國に傳へられてから、更に一歩を進めた表現法を見せるやうになつた。繪卷物などに見る雲の面白さ、自由さ、奔放さ、輕快さ、それは繪卷や、物語の展開に從つて極めて巧みに利用されてゐる。

たとへば、朝護孫子寺の『信貴山緣起繪卷』に於ける、劍の護法の信貴山から雲に乘り、輪寶を轉じつゝ宮中に入るの條の雲の如き、何といふ自由さであらう、何たる大膽なる表現であらう。この外、北野神社の『北野天神緣起』に現はれた雲、高山寺の『華嚴緣起』の中に出て來る龍の乘つた雲、それは形こそ唐代の靈芝雲の遺響を受けてゐるものゝ、その扱ひ方などには全く繪卷獨特の味ひが現はれてゐる。

◇

私はかうして雲を見て來ると、まだ〴〵幾多擧げなければならぬ作品に遭遇するのであるが、一足飛びに浮世繪版畫の雲の表現に於ける獨特の手法を一瞥しなければならない。

版畫には風景畫に於て天象を扱つたものが極めて多い。霜、霧、靄、雪、雨、月、夕日、雲とそれは版木の目と、摺とを利用して、實に巧みに表現するのであるが、その技巧の特質は、今までの繪の雲のやうに、唯に線や水墨の浸潤のみを以て表現するばかりでなく、板目を彫りぬいて、白く拔く技巧などが手に入つて來てゐる。

だから芥子園式の約勾雲法や、大勾雲法などに依らず、それ〴〵の技法に於て、上層雲でも中層雲でも下層雲でも、俗にいふ細舞雲、猪の子雲、鰯魚、蝶々雲、笠雲、みづまさ雲、なんでも自由自在である。

殊に北齊の雲は素晴しい。彼はその透徹した自然觀をよく繪筆の上に移し、然も先人未踏の技巧を恣にした。彼の『富士三十六景』中の『凱風快晴』の岱赭色の富士の背景、白く畫き出した卷積雲の如きは、何人と雖も絶讃を惜しまぬ處、『山下白雨』に到ると一轉して古典的な靈芝雲の應用となり、その斷續に面白いリズムを生みし出てゐる。

北齊に次いで昇亭北壽を擧げなければならぬ。版畫風景に於て、天象を扱つてゐる第一人者で、彼はあらゆる雲の形を、それ〴〵景致に從つておのが力の許す限り廣く深く突込んで製作してゐる、九十九里地引網の圖の積亂雲などは代表的逸品で、雲の表現に於て、特に一新機軸を出してゐる。

廣重もよく天象を扱つてゐるが、北齊や北壽に比すると著しく微温的である。それは雲より霞に感興を傾かせてゐるからであらう、北齊北壽が雲の畫人なら廣重は霞の畫家といふことがいへやう、同時に雨の畫家である時に『二長町芝居圖』の如き作もあるが、彼としては珍らしい。辰齋も北齊風の雲を描いてゐるが數は少い。

現代の人々の作では、曾て長野草風氏が試みた『高秋霽月』の印象的なのが忘られない、月を圍む雲の

ちぎれ、それは夜の空を極めて面白く表現した、全く氏獨自の藝術境であつた、この作以後かうした作にあまり接しない、前に擧げた中村岳陵氏の『豐幡雲』が、最近で我等の渇を癒してくれるものである。

別なものであるが、俳優中村七三郎氏に贈つた横山大觀氏の引幕がある、全畫面、唯雲ばかりであつたが、濃淡粗密重疊鬱積、然も、其間、別に別天地を畫き出した面白いものであつた。

雨の畫趣

毎年雨季に入ると、鬱陶しい日が續く、併しながら、あの靜かな木々の葉の綠を洗つて、音もなく降りそゝぐ雨の情趣は捨てられない、青柳の芽の煙るころ、糸のやうに降る春雨も面白ければ、橘の花の匂ふ初夏窓に聞く點滴も情がある、扨ては雲をつん裂く電光と共に、驀らに衝き來る白雨の豪快さ、落葉うつ秋雨の切なる幽趣、さてまた雪に交る氷雨の閑寂、四季とりゞに趣きはあるが、雨季といふほどあつて、初夏のころほひ、若葉にそゝぐ雨が矢張り一番である。

殊にその雨の面白味は、先づ植物との景觀に依つて味はれる、松はその針の葉の先に銀の玉を宿し、二葉の間から枝に傳はる、梅は枝先の葉がくれに、黃玉のやうな實が洗はれる、棕梠は掌を開いたやうな葉先の一つ一つ、たとへば筧に水の通ふが如く流れ流れて、さては自然に葉先が折れて、こゝから團々と滴り落ちる、蓮や芋の葉、銀玉を轉じて重さに傾く度毎に、水銀を流すやうに溢れこぼれる、かうして一つ一つに雨と葉の興を數へ來ればそれ丈けでも興は盡きない。

◇

花は卯の花くだしといはれる丈けに、卯の花が先づ雨と調和する、透きとほるやうな葉の間から、夢のやうに咲き出づる朴の花の雨、袋藤を逆にして一點の紅をさしたやうな七葉樹の花、これも矢張り雨にはふさはしい、或は垣の枳殼（からたち）の花、濡れて重げに搖らぐ紫陽花、貴妃をして涙に袂濡らさせる牡丹の雨、音もなく谷川に流れ落ちて柵となる齊墩（えんじ）果の花雪の如く綿の如く、葉先に積る白雲木の花の雨、葉なきを喞つ雨の金雀花、鴛鴦の羽搔きに搖るゝ姫著我、悉くこれ雨の詩であり、雨の畫趣である。その一部を見ても全部を寫しても、そこに盡きせぬ情趣が籠つてゐるのである。

◇

煙雨の中の市女笠、それは繪卷の中の人、大和繪ならでは見られぬ處であらうが、青田を劃る十字形の畦道に、鍬かつぐ簑笠の人、それはさしづめ蕪村あたりの領域であり、南畫の境地でもある、青柳の糸垂るゝ橋の袂に三つ四つ集まる柿蛇の目、これは直ちに浮世繪の景物である。

斜にそれを飛び行く燕、素早く翼を返して焦茶色の胸を見せるかと思へば、軒端の吊巢に濡羽を羽叩く。

雨そゝぐ花橘に風過ぎて山ほととぎす雲に鳴くなり　藤原俊成

これは同じ五月雨ごろのこと、杜鵑も雨によつて一層その幽趣を增さしめる、水雞の曉近く扉叩くのも、雨の日などが殊に多い。

水田の白鷺翼を揃へて立つのも面白ければ、樹立の中に喧しく啼き立てるのも初夏である。

蟲では錦襖子と呼ばれる河鹿、同じ蛙の中でも、石蕗の葉の上などに雨を呼ぶ青蛙、雫の中にぬれてぶら下る蓑蟲、垣にのの字を書く蝸牛、網に銀玉綴る蜘蛛。

◇

急雨を繪にしたのでは、雪村の『風雨山水』が名高い、蕭佐竹家の『風雨山水』は、風勢雨威に逆らふ古木を左手に畫いて苫屋の蔭に竹が靡く、岸を離れた帆船に破れむばかり帆は孕んで、綱まで切れやうとして居るが、同じ雪村の『風雨山水』でも、小倉常吉氏藏の一圖は、樹木を中央に描くこと三幹、枝は悉く左に靡き、竹林雜草悉く風に聲し、雨に音して岩石に激し、不圖左手を見れば、雲は千切れて月は海上に冴えてゐる。

急雨を畫いて、これまでに眞に迫つてゐるものは蓋し少からう、華山にもある、鶴崖にもある、此の鶴崖の『雷雨山水』中々大作で、構圖は遙かに複雜を極めてゐるが、遠景の提上風雨に靡く樹木など殊に面白い。應擧の『雨下江村』亦急雨に緣あるもの、近く雅邦には墨畫の雨中山水があり、墨の滲潤を極度に利用して樹木を二三株描き、急雨を白く殘して手法に新機軸を見せたのがある。

◇

雨の花鳥では、牧谿の雨中叭々鳥が直ぐ目に浮かぶ、これはもと井上侯爵家の藏で、左手から垂れ下つた樹の枝に、二羽の叭々鳥が翼を休めて居る一羽は背を見せ、一羽は鋭い嘴を右に向けて居る、その翼の墨色は、いまもなほ濕ふてゐるやうであつた。

叭々鳥の黑に對して、白いものを擧げると雅邦に雨中白鷺がある、鷺はよく雨と共に描かれる、併し雅邦の此の雨中白鷺は絶品である、鷺は元よりであるが、添へられた荻の葉がまた素晴しく面白い。

雨中飛燕は、四條圓山派の人々の好んで畫くところ、時にの青柳糸を加へて風情を添へる、濡れ鳥も好個の畫題、これには島田墨仙氏によい作があり、雨の情趣を遺憾なく出してゐたが、これは巴里に於ける日本美術展に出品され、彼の地に殘されて來たので、一寸見るよすがもない。

◇

浮世繪では、流石に廣重が雨の畫家であるその雨の描寫の如きも、いろ〳〵に試みてゐるが、數ある雨の圖の中で、私の好きなのは『東海道五十三次』中の『庄野』である、竹林を三段に描き、前のは密に、次は水墨でやゝ濃く、次でやや淡く、白雨を刷毛先で白く拔き、坂を上る駕籠、蓑を纏うて急ぐ人、半は傘をつぼめて坂を下りて行く人、こんな構圖で眞によく纏めてゐる。此の雨は急雨であるが、同じ白雨でも實直な線で雨を現はしたのは、『唐崎夜雨』、『新撰江戸名所』の『隅田川』である、三圍の鳥居を中心に、

坂を急いで下る人、相々傘で、堤を走る人、遙かに待乳山が雨に煙る、急雨では木曾街道七十枚の中『須原』が面白い、俄かの雨で辻堂が大繁昌、あわてゝかけこむ虚無僧、六部、巡禮、百姓、蓑を傘にかけ込む男、鳥籠に頭を突込んで急いで來る町人、遙かに馬上の人と、徒歩の人を墨一色で現はしてゐる、こんなさま〴〵の人々を取込んだ手際に廣重ならでは出來ぬ業である。

夜雨では、前に擧げた『唐崎夜雨』それから『江戸近郊八景』の中、吾嬬森の夜雨が有名である、『柳島やなぎの籔もかりてなし、吾妻の森の夜半の春雨』と水鳥堂が賛してゐる、北齋にも雨の畫は相當にあるが、歌麿では『繪本四季の花』の中におこそ頭巾の女二人、番頭を前に傘さして行く風俗の面白さが目に殘つて居り、その中に雷雨の圖がまた一枚ある轟きわたる雷鳴、降り出す急雨で、男は俄かに雨戸を立てる、女房に蚊帳を吊る、蚊帳の中では既に新造が耳を雨手で蔽うたり、手を合せて拜んだりして居る、これはいまも見る風俗である。

◇

現代の畫家では、横山大觀氏がよく雨を畫く、あの『生々流轉』の長卷の中にも、雨の處は際立つて居り、瀟湘の夜雨にも氏の新しい工夫が見えるし、又、氏には更に雨十題を描いたこともある、東山煙雨、嵐山春雨、堅田暮雨、辰巳橋夜雨、糺の森新雨、伏見時雨、三條大橋の雨、宇治川雷雨、湖上驟雨、八幡

の綠雨等である。

故下村觀山には『春雨』の傑作がある、橋上を行く美人の姿に、春雨の情趣がよく出てゐた、荒木十畝氏には雨中の作が中々多い、巢立つたばかりの燕が電線に並んでとまつてゐる『巢立ち』雨中牡丹、雨中の鳩、それから桐の花に注ぐ『烟雨』等。

浮世繪では、鏑木清方氏亦雨の好きな人である、その別號紫陽花舍、既に雨に緣があり『さみだれ』は幾度氏の幽艶な筆に上つたことであらう、『霽れゆく村雨』は氏を一躍東都の畫壇の花形たらしめた出世作その流れを汲む伊東深水氏も美人畫でよく雨を畫く、更に故池田輝方の『雨やどり』なども雨を記すに當つては忘られぬ作の一つである。

水車、井戸、垣

夏の風物には畫趣の豐かなものが少くない、天文地象、先づそれ〴〵に趣きがあるが、その風景の部分部分で特殊の景觀がある。だが、その多くは大抵水に緣のあるものが多い、涼しさを求むるこゝろ、それは畫にした處が自然水に近づいて行く、然もその趣きが、はつきりと現はれるのは、東洋畫の方で、西洋畫には何時ごろと季節の區別のつきかねるやうな作物が自然多くなつてゐる、それは日本といふ國土が、その地勢上、四季の區別がはつきりしてゐるから、そこに生れた藝術も自然さうなるのであらう、私はここに夏の風物中、特に畫趣を唆る二三のものを擧げて、その趣味を味ひたいと思ふ。

水車

夏　山路を旅して、コトン〳〵と水車の廻る音を聞く位嬉しいものはない、そこには必ず、水晶のやうな水が落ちてゐる、そのしぶきにぬれた木々の葉の間から、七八寸もあらうといふ大きな山百合が、花首を搖がしてゐたり、時には叢の中から、八仙花が滴るやうな水色の花をのぞかせたりしてゐる、水車は無

心に廻つてゐる。

東京の附近で、かうした情趣をしみじみと味ひ得るのは、高尾山から甲州新道を與瀾に向ふ、あの小佛の裏道から、上野原へかけての九十九折の道である、あそこは私ばかりでなく、畫を描く人の好むところと見えて、よく問題にされる、同じやうな畫趣豐かな場所を奥多摩にも求めることが出來る、秩父路にも時々かうした感じの處がある。

これは山路であるが、街路の兩側に美しい流れがあつて、この流れに水車を仕かけてある所がある、矢張り高尾に近い淺川の村がそれである、淺川には、此の美しい流れの外にまだ南天を垣根のやうに植ゑてゐる家々があつて、その南天の赤い紅が流れに臨んでゐるなどは中々面白く、特殊な風致である。

形から見ても水車には、いろ〳〵ある。外形が圓く、それに放射線狀に板をはめて、上から落ちる水を板で受け、更に次の板に注ぎ自然に水車が廻る仕掛け、これは最も普通に見る處のものである。

埼玉の二合半あたりへ行くと、水田の畔に小の形水車が仕掛けてあつて、これに足場がついてゐるのがある、水田に灌漑用の水を汲み込む爲めの水車である、水鄉潮來あたりにもこれを見る、どうしても繪であり、青々した水田が背景になつてゐるので趣が深い、曾てこれを長野草風氏の作に見た記憶がある、勿論他にも描いた人は澤山あらう。

繪にしたら、定めし面白からうと思つたのは、信濃の千曲川で見た船の水車である、川の中途に小舟一隻を繫いで置き、兩側に水車を仕掛け、船中で米など搗いてゐる、千曲川の靜かな流れには、かうした水車船が、三隻も四隻も繫いであつて、岸の綠葉が、その影を浸す、殊に初夏の若葉時が美しかつた、全く繪である。

故富田溪仙氏はよく淀の水車を畫いた、院展初期に好評を博した『宇治川繪卷』それから米國トレドの日本美術展に出品した『淀の水車』などそれだ、此の淀の水車は、昔から有名であり歌にも詠はれ、物語にも現はれ、殊に此の水車には、豐臣時代の花形役者淀君が關係してゐるなど、一層詩興を唆る。

その淀の水車のことは太田南畝の『半日閑話』の中に記さはてゐる。

淀川の水車、山州淀の外、北の方大川の中に水車二つあり、その車、大さ差しわたし八間あり、廻り二十四間なるべし、釣瓶一つに水一斗六升入るよし、川水を城の方へ汲み入るゝ爲めなり、二つとも泉水のやうにて城用の益にもあらず、年々修補の費若干なりといへども聞えたる名物なれば、このまゝにかけ置けると

云々とあり『夫木和歌抄』にも

ながめやる淀の川瀾の水車とことはにのみ君はかけける　中務卿のみこ

とある、此の水車も昔は、矢張り耕作用灌漑の爲めに水を堰き入れる目的で作られたのであつたが、淀君が淀の城に居るやになつてから城中の泉水に、淀川の水を引入れる爲めこの大水車を使用するやうになつとか。古くは龍骨車がある、他の水車が皆丸いのにこれは細長い形である。

白鷺群るゝあたり、瑠璃末を碎く淀の水を弄びながら、此の水車の廻る興趣、將に畫中のもの、曾て宇田荻邨氏もこれを畫いた、いまはこれを見る由もない。

『夫木和歌鈔』を見ると、前の淀の水車の外に、水車の歌が二首ある、曰く

早き瀨にやとれる影をくみあけて月の輪がくる水くるまかな　源仲正

瀨たえするしらすにたてる水車よにめぐるべきこゝちこそせぬ　民部卿爲家

これを見ると、水車も隨分古くから行はれてゐたものと見える。

さて水車は何時の頃から用ゐられたかというと『日本後紀』に

天長六年、詔曰傳聞唐國之風、堰渠不便之處、多構水車、以手轉以足踏、服手廻等各々隨便宜、此間之民、素無此備、動苦焦損宜下仰民間作件器以爲農業之資、大納言良峯安世奉勅、敎諸國民作水車。

とある、安世は桓武帝の王子で、良峰の姓を賜ひ大納言に上つた、書を能くし詩文に長じ、音樂にも造詣淺からず、經國集二十卷の著があり、天長七年七月六日四十六にして薨じたとある。

井戸

鏑木清方氏の作に、『柳の井戸』といふ作があつたことを記憶する、これは氏がよく描く半藏門から櫻田門に至る美しいお濠の外側にある井戸で、柳の老樹が一本その傍にあるので、柳の井戸の名がある、『江戸名所圖會』や『江戸砂子』を繰るまでもなく、有名な井戸であるが、此の柳の井戸の美しさは夏が一番よい。

江戸にはまだ名高い井戸が澤山あつた、いま參謀本部前にある井戸なども、昔は櫻の井戸といふ名高いものであつたが、今では蓋をされて見る影もない。

井戸の面白味はいろ〳〵である、井桁といふ木組が先づ面白いが、これも近ごろは少くなつてしまつた。

いつも面白いと思ふのは、鎌倉極樂寺の星月夜の井戸である、井戸も大きく且つ深いので、晝も星がうつるといふ、星月夜の名が殘つてゐるわけであるが、これがいろ〳〵と鎌倉時代の狂言廻しをつとめてゐる、鎌倉時代といふ背景が先づ面白いし、星が映るといふことから、井戸の深さも知られる、中には齒朶類などが生へてゐて、のぞくと涼風掖下に湧く。

昔田舍わたらひしける人の子ども、井のもとに出でゝ遊びけるを、成人(おとな)になりにければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女こそ得めとおもひ、女もこの男をこそと思ひつゝ、親のあはすることも聞かでなんありける、さてこの隣の男のもとよりかくなん。

つゝゐつゝ井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしなあひ見ざるまに

女かへし

くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかなづべき

かくいひ〳〵て遂に本意の如くあひにけり。

これは『伊勢物語』の一節で、有名な筒井筒の件である、井戸に關する物語の中では、最も興趣の深いものであるが、これは繪に畫かれると秋になる、井筒の傍に藤袴や尾花などが咲き亂れてゐる、幼物語であるから初の井筒の方は春でも夏でもよかりさうなものであるが、畫にすると秋の方が落ついて見える。

井戸といへば、直ぐに釣瓶のことにも亘らねばならぬ、釣瓶にもいろ〳〵あるが、桶のやうに圓いものよりは角形の底の細いものが面白い、丸形のものでは檜桶のやうに緣のあるのがよい。千代の

朝がほに釣瓶取られて貰ひ水

などには、朝顏といふ花に對しても、あまり角ばつた釣瓶は畫きたくない、綱のついた檜桶型の釣瓶などが面白からう。

釣瓶に綱をつけて汲みあげる古い型は、だん〳〵便利なものに改められて、桔槔(はねつるべ)が出來、車井戸が案出された、桔槔はよく田舍に見られるが、東京附近などにはあまり見受けなくなつてしまつた。一方の重みで竿が撓みギイ〳〵と音させる邊に俳味があり、畫趣もあるが車井戸の方には畫趣が乏しい。

井戸側の形では、石の桝形に苔蒸したなどは心憎いまで面白いものがある、樹立の幽玄を背景で井戸の神祕的構圖を見せた作に、勝田蕉琴氏の『杉田の井』などが聯想される。

名高い井戸では、さゞ波や三井の玉水、山城の山の井、近江の國の岩井、紀井のさらし井、奥州の淺香の岩井など。

晒し井に就いては、萬葉集にも

みくるすの中にむかへるさらし井の絶えずかよはんそこにつまもが　　よみ人しらず

がある。

この井戸を掘るといふことは、隨分古くから行はれたことで、支那では炎帝の時、帝が臣に命じて初めて井戸を掘り、堯に至り、これを民に敎へて飲料とせしめ、更に水田の畔に井を掘つて田に水を灌いだといふ傳說があり、日本では神代記に、既に天の眞名井の名があり、火々出見命が失つた釣を尋ねて行つた

常世の國にも玉の常井があり、『丹後風土記』には加佐郡矢原の池に、始めて墾田を定めその辰己の方三里ばかりの處に靈泉湧き出でたのをその墾田に注いだと記し、延喜祝詞式後には、『生井』『榮井』『津長井』の文字が見える、生井は池の水、榮井は湧出泉、いまの掘井戸津長井は川水である。

かうして井は生命の水を得る大切なものだからとて、仁德天皇の御宇に、水の源を記る社が建てられた、此の掘拔井戸といふものが完全に作られたのは、ぐつと近代になつたからではあるが、兎も角も地下數十丈も掘り下げて、うまく地下水のよい脈に當ればよし、さうでないと全く無駄になるので、相應の分權者でないと、容易に自家の井戸など掘ることは出來なかつた。

江戸時代に京橋の桶町に『讓の井』といふのがあつたが、これは桶町の金持が、この井戸を遺產として子孫に傳へる爲めに『讓の井』と名付けたといふことであり、また、新吉原揚屋町にも『尾張屋井戸』といふのがあつて、これは紀文大盡が少からぬ金を出し、三の輪の秋葉權現に祈つて漸く掘あげのであるといふ。

その頃の井戸の掘方は、唯土を深く掘つて行くのみであつたが、その後、幕府の大工棟梁溝口內匠といふもの、井戸掘の道具を工夫し、更にこれに工夫を加へて今日まで傳へられたのが神田新銀町の井戸工、五郎右衞門といものである。享保八年、馬場先門內の御用屋敷に、新に井戸を掘ることになり、工を五郎

右衞門に命じた處、五郎右衞門は金八兩で請負ひ、いくら掘つてもよい水が出ない、五郎右衞門大に焦立ち、家に歸つて父と相談すると、父のいふには、井の底土は粗いから竹の管を深くさし込んだら水脈に達するだらうと敎へた、そこで五郎右衞門、はたと膝をうち、その言葉の通りに竹の管を入るゝこと凡そ十間果して淸水滾々として湧き出でたので手を打つて喜んだといふ。

又その頃、南茅場町に八兵衞といふ井戸掘があつて、巧みに此の方法で井戸を掘り、殆んど百發百中といふ成績だつたので、八代將軍吉宗が特に召出して、その方法を訊ねたといふ、兎も角も江戸では此の五郎右衞門の掘つた井戸が掘拔井戸の元祖ともいふべきもので、三ケ年間に平均二十ケ所の井戸を掘つたといふことである、

なほ井戸を掘る季節としては、子と午の年は五月と十一月、丑未の年は六月と十二月、寅申の年は、七月と一月、卯酉の年は二月、辰戌の年は三月、己亥の年は四月としてある、かうして井戸といふものも發達して來たのであるが、考へて見れば藝術にも深い緣があり、古歌に詠まれてゐる井戸も少くなく、備中のいづみ井、奧州の淺香の岩井、山城ののりの井、とほ井、まつ井、いさら井、このいらさ井は源氏にも名が見える。

すゞしさに月もすみけりいはまくらこよひを夏のわすれ井の水　　從二位　忠定卿

など、全く夏の興趣である。

垣根

京都の天球院に、有名な傳山樂の朝顔圖の襖繪がある、篠竹を編み合せた垣に、ところ一杯朝顔の花をつけてゐる、上から長い蔓を思ひのまゝに伸してゐるのもあれば、下から絡んで窓にまで蔓の一端を見せてゐるのもある、全く縱横無盡、その花の描き方も千變萬化を極めてゐるが、この垣の描寫が如何にも面白い、普通のませ垣に、上に一文字を渡し緣を取つて、窓をあけてゐる、そしてその左端に持つて行つて白の鐵砲百合を畫き、朝顔の曲線に對照せしめた心憎い技巧である。

同じ襖繪で、夏のものとして忘られぬのは良正院の鐵線花の襖繪である、鐵線花といふ曲線が主になつてゐるのに對し、これはまた行儀正しい四つ目垣で、矢張りこれに一種の諧調がある、垣根といふもの、日本の造庭法の案出した極めて面白いものであるが、ものに依ると隨分くどくなる、檜垣や網代などは貴族的ではあるが夏向きでない。鶯垣は蒔繪などにもよく表現されてゐるが、これは夏にもふさはしい、ませ垣は絡む草などに依つてまた趣きも違つて來る。柴垣も蒔繪風である。

四つ目垣は、一般に廣く用ゐられてゐて、其處に何にか捨てられぬ趣きがあり、これに鶯一羽を配した

た作が川合玉堂氏にある、曾て土田麥僊氏も、朝顔の大作を畫くのに此の四つ目垣を用ゐた、花との對照

垣の直線と蔓の曲線との調和が面白いのである。

竹垣は總じて涼しいものである、建仁寺垣などは、眞と行と草の三體あつて、相應にやかましいものであるが、眞の建仁寺垣などはどうしても夏向きではない、畫趣にも乏しい。矢張草に限る、そしてやや朽ちて倒れかかつてゐる處へ、烏瓜の花が煙のやうにぽうと絡はつて咲いてゐる處なども夏には面白い畫趣である。

生垣では枳殼が面白い、殊にあの幽かな白い花の咲く頃がよい、連翹垣は、昔地所境に植ゑて仕立てゝ目印にしたといふ、花の中は面白いが、葉になるとつまらない、從つて夏ではなく春のものである。

初夏の頃では卯の花が忘るゝことの出來ない面白い味のあるものである、杜鵑でも鳴き過ぎれば一層興がます、卯の花くだしといふ雨季の和かい情趣が捨てられぬものである。

かなめは芽出しの眞紅がよく、どうだんつゝじは春の花時と、秋の紅葉がよい、まさきは夏のものである。

西洋のものは、どうも生垣などにはつまらない、ピラカンサスなど、大分用ひられて來たが、どう見ても安文化住宅向きである。

杭、小橋

夏の畫題から見て、まだ杭といふものも特殊な味がある。百本杭などは、その代表的のもので、隅田川情景の一つであつたが、今はないから詮なしとして、よく川の邊の緣などに橋杭など一二本殘つて、葭や葦がこれを圍み、時に白鷺が遊んだり、翡翠がおとづれたりすると、どうしても夏のもの、橋は小さいものが面白い、土橋といふあの丸太を並べたものなどは少し古くなると面白いものとならう、兩側に草の生へた土橋など渡つては危險らしいが、繪には此の方が面白い、勿論附近の情景なども之に伴はなければならぬのではあるが……。

板橋では潮來の十二橋のあの型が忘られない、眞ん中が高く、兩端が斜に低くなつて、船がその下を潜る、一つ橋をくぐると、また一つが迎へる、時に卯の花の雪の如く溶れることがある、躑躅が橋際にまで枝を伸ばしてゐたりする。

船頭はしづかに棹を手にして水は音も立てない、時に水雞か、鷸などか首を出す、水には鴨がくゞつてゐる、小橋の面白味は何といつても、こゝが第一である。

裝幀藝術のおもひで

著作者や出版業者が、書籍の裝幀に關心をもつやうになつたのは、あまり古いことではない、明治初期の出版物には、藝術的に見て記憶に殘るやうなものは餘りなく、稗史や小說類は、厚いボール紙に安價な石版畫の意匠を施したに過ぎない、その小說なり稗史なりの主要な處を癖の多い筆で畫き、彩色も簡單にすましてゐた。

小說類に多少意匠を施したもの、出たのは明治二十七八年頃からであると思ふ。春陽堂が先づ盛に小說を出版したが、その表紙は標題に因んだ意匠を木版刷とし、絹絲かなどで簡單に綴つてゐた、筆者は省亭桂舟、年方、年峰あたり、露骨にいへば、今日の菓子折の掛け紙の模樣程度で、大した藝術味のあるものとは思へなかつた、併し此の裝幀は相當永く續いたものである。

春陽堂はその後、此の種の小說類にクロースを使ふやうになつた、それは明治三十五六年頃で、その最初の試みが小杉天外の『魔風戀風』だつたと覺えてゐる、クロースに金板で白鳥の模樣を出し、色をつけたもので、地色が派手な空色の上に白と紅とが程よく用ゐられてゐたので非常に美しく感じたものである

その當時、此のクロースを用ゐることは、非常に流行したもので、博文館あたりの出版は、よくそれがあつた、大橋乙羽の『千山萬水』などは、それが代表的のものともいへるし、アート紙に風景の豆寫眞を五色刷にして挿入したなど、當時の讀書子を喜ばせたものであつた。

併し安ものの裝幀は、本ものゝクロースまでは行かず、ここに模擬皮紙といふものが盛に使はれた、當時の若い人々の間に、非常な努力をもつてゐた、土井晩翠の『天地有情』だとか、大町桂月の『黄菊白菊』笹川臨風の『奈良朝』國府犀東の『龍吹鶴語』齋藤緑雨の『あられ酒』『わすれ貝』などいふ種類のものは皆それで、色は蝦茶色、これに空押で一寸模樣をつけ、文字は永坂石埭などが書いたと覺えてゐる。

◇

その頃に裝幀で一新紀元を劃したのは、大橋乙羽の『歐山米水』である、これは乙羽が歐米漫遊から歸つての記念出版で、菊判四百頁ほどの内容のもの、歐米の各地の都會や名所の寫眞をアート紙で盛に挿入し、表紙は羊皮に白綸子を斜に貼合せ、白綸子には、錢線花が色刷として現はされ、鹿皮の紫紐で綴つた今日の言葉でいふ豪華版で、錢線花はたしか廣崎廣業が畫いたと覺えてゐる、兎に角、乙羽は博文館の養子として、故大橋佐平翁に愛されてゐたので、こんな豪華版位は何でもなかつた、こんな贅澤をして、定價が確か一圓八十錢だつたと思ふ、今から思ふと誠に隔世の感がある、此のアート紙が雜誌の口繪などに

そろ〳〵使はれ出したのは明治三十三四年頃であつた。

博文館や春陽堂のかうした月並の出版の中に、やゝ異彩を放つてゐたのは、堀野文祿堂といふ書店の出版だつた、主人文祿氏は長唄通の、大通人、その出版物には、緋鹿の子をはぎ合せ、これに葦手風に標題を現はしたものなどあつた、併し出版物としては大したものもなかつた。

小說や紀行文などの出版では、こんな平凡な道を辿つてゐたのであるが、詩集とか歌集とかいふ種類にはやゝ裝幀も見られるものがあるやうになり、單に形の上から見ても、モダン味が發揮された、その中でも著しく目に立つたのは、與謝野鐵幹、晶子兩氏の立籠つてゐた新詩社の出版であつた、私が面白いと思つたのは、月刊詩集『片袖』であつた、極く薄い三四十頁のものであつたが、小袖形に截ち、テープで綴つた瀟洒なもの、その中で、平木白星の『おさよ新七』といふバラツド風の詩を卷頭にした集などは、非常に文學青年の間に持囃されたもので、私なども常に懷中しては讀み耽つたものであつた、鐵幹氏の『紫』といふ詩集が出た、これがまたモダンなもので、五十斤位の紙を二つ折眞四角に切り表紙は羅紗紙の鼠色で、中央からテープの紫色したので綴り、菫が一輪描かれ、中央に『紫』の文字があるばかりであつた、簡單な意匠であつたが、當時の出版界をあつといはせたものである。

晶子女史の『みだれ髪』は藤島武二氏の裝幀で、矢張り相應にモダンなもの、これにはアート紙を裏打

した表紙を使つてゐた、「みだれ髪」に次いで『戀ごろも』といふ集が出たが、これは同じやうなもの、それから金尾文淵堂が出版界に乘り出して、盛に裝幀にも意匠を凝らしたが、『舞姫』が絢爛な姿で現はれたり、『毒草』が超モダンな裝幀で現はれたりしたのである。

◇

少しく時代が前後するが、詩集のことを記した序に、「抒情詩」時代を追想して見る、此の『抒情詩』といふのは、横綴の極く小型な集で、全部が六號活字、これは、松岡國男（今の柳田國男氏）宮崎湖處子、田山花袋、矢崎嵯峨廼舍、國木田獨歩、太田玉茗の六人の詩集で、獨歩のは『獨歩吟』國男のが『野邊のゆきき』花袋が『わが影』玉茗が『花ふぶき』嵯峨廼舍のが『いつまで草』湖處子のが『水の音づれ』で、表紙には鳥の子にクローバーを現はし、各篇の卷頭には各家それ〴〵堂々たる詩論を書いてゐるのが實に愉快だ、此の集が明治詩壇を啓發した力は素晴しいものであつた。殊に興味を惹くのはその挿繪で、これは和田英作氏が筆を揮つてゐる、『松原』といふ花袋の詩の挿繪など今見ても面白い、和田氏に聞いたら氏が二十四歳の時の筆で、隨分その注文がむつかしく手古摺らしたものだといふ。

やゝ贅澤なものとしては、薄田泣菫の『ゆく春』などがあつた、これは菊半截で、表紙は絹張りとし、これに綠で野邊の風景を銅版で刷り込み、朱字で『ゆく春、泣菫』と表はし、金茶の絹糸で綴り、中はオリ

ーブ色の輪廓をつけ二遍刷とし、その挿繪は故人になつた滿谷國四郎氏が畫いた、此の輪廓の意匠は松尾素濤といふ人の筆であつた。

その頃出た蒲原有明氏の第一詩集『獨絃哀歌』の裝幀もモダンなものであつた、これは山下幽香といふ人の筆で、有明氏の友人であつたといふが、その後香として消息を聞かない、第二詩集『草わかば』は特筆するほどの裝幀ではなかつたが、第三の『春鳥集』になると、これはまた凝つたもので、袋紙が青木繁と坂本繁二郎の合作、これを伊上凡骨が彫刻し、長篇『鏽斧』の挿繪は青木繁が畫いて山本鼎氏が西洋木版で彫つたもの、これは今日見ても誠に珍品であり將に劃期的なものである、人物の表現も面白く、繪の兩側に

『老くじら、山に乾びぬ、さあれ戀し、戀の古里、たちばなの青き樹かげ、籬みち、母の渚へ』

といふ一節を有明氏が書いてゐるなど當時の詩の愛好家をして少からず嬉しがらせたものである。

河井醉茗氏の『塔影』といふ集も出た、これは裝幀が長原止水、口繪は三宅克己氏であり、上田敏の『海潮音』といふ譯詩集も當時モダンなもの、海潮音の三字は宋版あたりの經文から取つたらしく、波と星とを現はして裝幀は藤島武二氏であつたと思ふ。上田敏といへば矢張その頃、散文の飜譯を集めた『みをつくし』が出た、白と水色との清楚な裝幀であつた、その頃、高山樗牛の弟、齊藤信策が、兄の樗手を訪問す

ると、座の近くに『みをつくし』があつたので、「それを讀んだのですか」と聞くと樗牛は、「何こんなものが讀めるものか、書癖の枕の足しにするのだ」と答へたといふ話が傳へられた、樗牛と上田敏は、それほどに仲が悪かつたのである。

◇

かうして詩集の裝幀は、確かに他の出版物より一歩進んでゐた、藝術趣味が高かつた、その中に、私達をして驚喜措く能はざらしめたのが、北原白秋氏の『邪宗門』の出版である、これは易風社から出版したもので、裝幀は石井柏亭氏、挿繪も柏亭氏と山本鼎氏である、贅澤なカツトをふんだんに使ひ、挿繪は悉く西洋木版、それを山本鼎氏が彫刻した、表紙は眞紅のクロースを用ゐて、これに自然と詩を象徴した繪畫をはぎ合せその下に切支丹のマークを金版で押し「エツキスリプリス」と白秋氏が詩に對する感興を象徴した『幼兒磔殺』と切支丹の宣教師を描いた『澆淫』などを柏亭氏が畫き、山本鼎氏は『眞畫』といふ面白い作を見せてゐる。

『邪宗門』が此の面白い體裁を保ち得たのは初版丈けで、あとはさつぱりしたもので感興はなかつた、白秋氏の驚くべき精力は、更に『おもひで』で『とらんぷ』の意匠を自から試み、『桐の花』でも瀟洒な趣味を見せたが『邪宗門』ほど深い印象は殘つてゐない。

歌集も晶子女史の『舞扇』に中澤弘光氏が美しい舞妓を口繪に畫き木版刷とし、扉に『京は三本木のおあい樣へ、この一卷をまゐらせそろ』と晶子女史の書いたのが今でも記憶に殘つてゐる。

歌集ではなほ岡本かの子女史の『歌双紙』を擧げて置く、これはほんの五六枚綴りのものであるが、全部が木版刷で、表紙と裏繪が岡本一平氏、納戸色に上下を刷つて中が朱色の麻の葉、裏繪が丁字屋の灯、口繪が和田英作氏の『たそかれの女』で、全く贅澤を極めたものであるが、一册しか出なかつた。

◇

裝幀といへば、この外、小島烏水の北齋の研究や、日本アルプス四册の裝幀も逸することが出來ぬし、夏目漱石の著作はどれも凝つたものであつた、最初に出たのが『漾虛集』で、これは藍鼠の布裂の南京綴、唐本仕立で絖を貼りこれに題簽を篆書で書いた凝つたもの、それから『吾輩は猫である』橋口五葉氏が登場し、裝幀界にいろ〳〵の印象深い作を遺した、扉もカツトも悉く五葉氏の筆、それが『鶉籠』になると、鳥の子にカラ押で籠目模樣を現はし、カツトも氣の利いたものであつた、「心」などになつて、初めて漱石氏が自分の道樂を見せて、自から裝幀の筆を執つたのである。

最近の出版では、西川一草亭氏の『風流生活』小杉放庵氏の『工房有閑』など面白いものである、自分の出したものに就てこの思ひ出を附け加へて置きたい、私が初めて世に同うたものは「盆栽之研究」であ

つたが、これが裝幀は杉浦非水氏、第二のものが平福百穗氏、第三の書が川端龍子氏、第四が山田みのる氏で、平福氏も、山田氏も、既に故人になつてしまつた書架にある兩書を見ると、いつもその當時が偲ばれて感慨無量である。それから、藝術叢書も出すやうになつてからは、荒木十畝、西澤笛畝、森田恒友、川合玉堂、山口蓬春、兒玉希望、田中咄哉州、小室翠雲、安田靫彦、堅山南風、兒玉希望、前田青邨、中村岳陵、森白甫、竹原嘲風の諸氏を煩はし、悉く木版にしたなどは、内容の貧弱な割りに凝つてもつと、自分でも一寸溜飲をさげてゐる。

挿繪今昔

新聞や雜誌の挿繪に筆を取つた人で、現存してゐる最も古い人といへば、新井芳宗翁であらう、翁は既に喜壽に近い年ながら、なほ壯者を凌ぐ元氣で荏原區中延に居を構へ相變らず酒を無二の伴侶として繪筆を揮つてゐる。翁は大蘇芳年の祕藏弟子で、初代芳宗の息子さんである。その父の芳宗が假名垣魯文翁と懇意であつた處から、今の都新聞の前身である今日新聞が出ると間もなく同社に入つて、挿繪を擔任したのであるが、日本で抑も新聞挿繪の始めともいふべきは、それより以前、明治の初年頃、魯文翁と初代芳宗翁が、食ふに困つた揚句、瓦版の新聞を思ひついて、翁が文章を書き、芳宗が挿繪を畫き一枚刷として出したのがそれであらう、魯文翁が編輯長記兼販賣係兼任で芳宗翁が女房役、刷上ると二人して手拭をかぶり、町中を賣り歩いたものだといふ、かうした人を親爺にもつたので芳宗翁も早くから挿繪に筆を執るやうになり大蘇芳年の門下に入り、その後、魯文翁が『假讀新聞』から『いろは新聞』今日新聞と籍を移すと共に、絶えず翁はその挿繪に筆を執つてゐたが、その相棒として同じやうに挿繪に手をつけてゐたのが、尾形月耕だつたといふ、黑岩涙香の如きも、初めて上京して草鞋の紐を解いたのは、此の芳宗翁のと

ころで、翁の紹介で『今日新聞』に入り、初めて探偵ものに筆を初めたのであつた。

『今日新聞』が都新聞と改題してからは、富岡永洗が永く挿繪を擔任し、都新聞の呼物の一つとなつてゐたものである、今當時の新聞を擴げて見ると、一頁が六段で、その中に既に二段ぬき、二段半ぬきの大きな挿繪が入つてゐた、いまの十三段制から見ると、四段ぬき五段ぬきの大きさにもる當のである。如何に當時挿繪に重きを置いたかがわかる、その頃永洗が新聞社から貰つてゐた給料は一ケ月三十八圓であつたといふ、當時にあつては勿論高給である、併し門下の多い永洗は中々苦しく、月給などは前借前借と借り越してゐたものである、そしてその初めこそは挿繪一枚を全部自分が畫いたのであるが、後になると自分は女なり、男なりの首だけを畫き、門下生があとの身體を畫く、そして一枚の挿繪が出來て、木版に廻す、木版の方では版木師が、その版下を櫻板の七分五厘の厚みのものへ薄糊で貼りつけ、乾かして二つ三つ位に割る、これは仕事を分擔し、早く仕上げる爲めにするので、割り方は無雜作に叩きつける、尤も肝甚な處だけは加減する、そして腕のよいのが首を彫り、他の職人や門下どもが衣裳のところや背景を彫り上げる、そして淡へが濟むとまた繼ぎ合せるといふ工合、それも大抵二日前位でないと繪師の處から版下が屆かない、それを一日位で彫り上げるのであるから並大抵のことではない、今日ではジンクが發達して精々二時間もあれば大抵製版が出來るのだから全く隔世の感がある、なほ永洗のところには弟子が十五六人も居て、皆丹念に新聞や雜誌の挿繪を切ぬき、娘形、老人、紳士、武家といふ風に區別して貼込み、その注文にあふやうなのを探し、永洗の畫いた首にあてはめるので、まるで安本龜八の人形細工といふやうなもの、今の井川洗厓氏の如きは、此の中から、苦勞して叩きあげた人なので、永洗は若くして逝き、あとには洗鱗、洗耳、洗厓などが殘つたので、今は洗鱗、洗耳も亡くなつてしまひ、一人洗厓氏丈けが殘つてゐる、永洗時代に木版を擔任してゐたのは、岡田清二郎と村上德太郎といふ二人であつた。

私は都新聞に入る前、永く中央新聞に居た此の新聞は美術界には中々緣が深かつたもので、挿繪は武内桂舟翁が專任で、桃川實の講談が、此の桂舟翁の挿繪で非常に受けたものである、石井柏亭、結城素明、杉浦非水氏などが筆を執つた時代もあり、竹内栖鳳氏が歐米漫遊のスケツチなども、銅版が出來なかつた位だから木版にして一面を飾つたものである、これは社長大岡育造氏が、美術愛好者で此の方面にも十分理解をもつてゐたからである、田村江東翁が當時鳴らした連載もの、『富貴樓お倉』の挿繪の如きも、桂舟が筆を執つて評判がよかつたもの、其後新聞が政友會の手に移つてからは、竹坡國觀兄弟が暫く挿繪の筆を執つてゐた。桂舟門下には、小島沖舟や、片山春帆、山中古洞など中々多士濟々で沖舟は報知に筆を執り才筆であつたが夭折し古洞翁はいま關西に居るやうである。

『やまと新聞』も挿繪では特色もつてゐた新聞であつた、これは福地櫻痴居士が創立した新聞で、その後

松下軍治といふ人の手に移つたのであるが、挿繪は長く水野年方系の人々が筆を執つてゐた、年方は四十を出たばかりで世を去つてしまつたが、門下には鏑木清方、荒井寛方、故人の池田輝方蕉園夫妻など出した。

都の永洗系、やまとの年方系と相對峙して讀賣には梶田半古が筆を揮つた、いま私の記憶に殘つてゐる處では、小杉天外の『魔風戀風』幸田露伴の『天うつ浪』などであつた。

雜誌では『國民の友』の特別附錄、山田美妙齋の小說『胡蝶』の挿繪が非常な問題になつた舞臺は戰國時代で、美しい上臈が裸體で、僅かに披衣を小脇に抱へて居る圖であくまで纖細なものであつた、筆者は渡邊省亭であつた、この挿繪が現はれると大分やかましくなつて、所謂裸體畫不神聖論だの、藝術汚辱だのといふ名論卓說が盛に出たもので、此の論容中には、水戸學派のチヤキ〳〵だつた野口珂北、それから依田學海、柳井烱齋など、いふ人達そこに、泰西の藝術論などを引用してやゝ辯護の位置に立つたのが、故九鬼隆一男などであつた。

こんな風に、表面では隨分やかましい議論が出て居ながら、裏面では矢張裸體畫の隨喜者も現はれた、『胡蝶』の挿繪の筆が、省亭と知るや、窺かにその門を叩いて裸體畫の亳を依賴するものもあれば、菊池容齋のやうな歷史畫家にまで『鹽谷高貞の妻出浴の圖』をなどゝ依賴した向きが少くなかつた、容齋の『高貞妻出浴圖』など今でも時々眼に入るから面白い。

その後、文藝雜誌があちらこちらから出るやうになつた、春陽堂の『新小說』博文館の『文藝倶樂部』文淵堂の『新著月刊』かうした雜誌には、大抵口繪に木版か石版の口繪を入れたものである。挿繪もあつた、新小說には鱔崎英朋氏などが活躍し『文藝倶樂部』には年方、桂舟、永洗等の系統『新著月刊』には赤松麟作、鹿子木孟郎などの名が見えた、それから文藝雜誌として『明星』や『新聲』の存在も看過することが出來ない、『明星』には藤島武二、和田英作、中澤弘光、岡野榮、杉浦非水氏等の作が、木版や石版になつて毎號二三葉づゝ挿入され、挿繪としては、荒井陸男の芝居スケツチなどが珍らしかつた、『新聲』には平福百穗、一條成美などが、挿繪にカツトに腕を揮つて當時の若い人達を喜ばせた。

少年ものには、小堀鞆音氏の社中が活躍した、尾竹國觀など、まだ十七八歲の青年であつたが、既に立派な挿繪畫さであつた、此の外宮川春汀、山中古洞、梶田半古、筒井年峰などの名も記憶に殘る、

それからまた見逃すことの出來ないのは、今日飛ぶ鳥も落す日本美術院の元老達、横山大觀氏も、故人の下村觀山、菱田春草も、たつた十三錢の博文館本『少年讀本』や『世界歷史譚』の挿繪に筆を執つたことである、『少年讀本』の第一編は櫻痴居士の『高島秋帆』で水野年方の挿繪であつたが、その中の野に珂北の『水戸烈公』が横山大觀、田山花袋の『池大雅』が下村觀山、樂庭篁村の曲亭馬琴も觀山、岸上貢軒

の『春日局』か菱田春草、依田學海の「三條實美」か寺崎廣業『世界歴史譚』の方では一編の高山樗牛の「釋迦」が觀山、二編の吉國藤吉の『孔子』が大觀、三編『耶蘇』が文を上田敏挿繪が中村不折といふ顔觸れ、中村不折も中々素晴しい人氣であり、當時二十八歳で夭折したが、前途を囑目されてゐた小坂象堂も二三册いてゐる。

なほ後半、東京日本畫壇の大御所となつた寺崎廣業も、東陽堂の二階に燻つて風俗畫報の挿繪を畫いて居たかと思うと、誠に今昔の感に堪へぬものがある。

洋畫系の新聞挿畫家

新聞の小說に對する挿繪揮毫の選定は、編輯局當事者の一つの惱みである、作に對する調和は勿論のこと、挿繪として、何處まで讀者層を引つけるか、どの點まで歡迎されるか、あまりに調子が高過ぎて全然受けなかつた例もあり、思ひもかけぬ間に合せものが、素晴しく歡迎されたり、全く豫想の出來ぬものである。

兎に角、かうして各社が、挿繪畫家の物色に苦心する傾向は、日本畫の挿繪ばかりでなく、洋畫畑からもどし〳〵變つた顔觸れを物色して、紙面の體裁を一新しやうとしてゐる。併し、此の洋畫畑の人々が、新聞挿繪界に進出して來たのは、さう古いことではない、極く近年のことである、どんな風にして洋畫系の人々が此の方面に領土を開拓して來たか、どんな人々が活躍して來たか、その經路を大略書いて見たいと思ふ、だが、それを書くに當つては、啻に新聞ばかりでなく、新聞類似の週間物や、雜誌のやうなものにまで、一應は觸れなければならない。

◇

日本に於ける新聞の始めといへば、遠く瓦版時代にまで遡らねばなるまいが、兎も角、新聞のやうな體裁をなしたものから擧げるならば、「内外新聞」や、「江湖新聞」から始めなければなるまい、これは何れも慶應四年の創刊であるし、それから明治四年、「横濱毎日新聞」五年の「郵便報知新聞」「東京毎日新聞」七年になつて「朝野新聞」八年には「平假名繪入新聞」の刊行といふやうなことになる、かうした原始時代の新聞……少し妙な言葉だが……では、元より挿繪などはなく、社會記事なども少く「太政官布告」といふた形のものが掲載されてゐたに過ぎなかつた。

新聞に續きものが載るやうになつたのは、明治十一年の九月に「平假名繪入新聞」の記者前田夏繁といふ人が、その頃一寸社會の耳目を聳動した事件にいろ〳〵と空想を織り込んだりして小說體に書いた「金之助の話」といふのが最初である。尤もこれは純粹の小說ではない、今日でいふ「實話物語」といふやうなものに屬したのであらう、併しこれには挿繪といふものは無かつたやうである。

「平假名繪入新聞」は、繪入と銘打つてゐる丈けに、繪は入れてゐたのであるが、それは事件を一寸畫いて、今の事件寫眞の代理を勤めた位のものにとゞまる、その筆者も詳かではない。

併しその頃、繪入の出版物は續々として出版された、山口鷗湖の「開化以後」だの、萬亭應賀の「大鈍托新文鬼談」だの、假名垣魯文の「安愚樂鍋」といふやうなもので、これには豐富に挿繪が入つてゐた、

この筆者は惺々曉齋が最も多く、彼れ一流の達者な筆を縱横に揮つてゐた。

曉齋に次いで盛に筆を揮つてゐたのは、大蘇芳年や、楊州周延で、周延は浮世繪師として名を賣つたが、元は越後の高田藩の出で、本名を橋本直義と呼び、幼時狩野派を學び後に彰義隊に加つたりした「改進新聞」に挿繪を畫いて認められて來たし、新聞挿繪家として最も古い人である。

周延は、その頃、盛に洋畫の風を研究したらしいが、矢張り浮世繪の傳統に歸つてゐた、それに對して小林清親が現はれて、ワーグマンに就いて學んだ洋畫風の挿繪も、チョイチョイ見せたが、連續物に筆を執つてはゐなかつたやうである。だが達者な彼は、新聞となく、雜誌となく、盛に筆を揮ひ、一方では版畫家として洋風の木版畫で鳴らしたものである。

◇

その頃、早くも洋風挿繪を盛に入れて賣り出したのが、「團々珍聞」である、これは四六倍判三十頁内外の薄いもので、政治や社會を諷刺を主とした、日本に於ける漫畫雜誌の元祖ともいひ得るであらう、明治九年に廣島縣人の野村文夫といふ人が、歐米の旅から歸つて、彼地にある輕快な週刊雜誌のやうなものを出版し、新聞と雜誌の間を行かうと計劃し挿繪を成るべく多くして、新機軸を出さうと試み明治十年三月創刊した、この挿繪の揮毫家としては、小林清親が眞先に之に當り、盛に達筆を揮ひ、それから、本多錦

吉郎が、永い間執筆した、本多は純粹の江戸ッ子で、夙に英人に就いて英語を學び、國澤新九郎に就いて洋畫を學んだりしたので、當時にあつては實に貴重な存在であつた。

かうして清親と錦吉郎の二人で挿繪を擔任してゐる中に、喧嘩早い清親は、野村社長と口論をして飛び出してしまひ、そのあとに入つたのが田口米作である、米作は號を櫻川と呼び、栃木縣の人で、早くから小林清親に師事してゐたので、挿繪など中々達者であつた、そして『團々珍聞』には一番長く執筆してゐた、その頃『團々珍聞』から、田口米作の處へ使ひ行つた小僧が、後の永田錦心で、初めは繪に志してゐたのが却つて琵琶で成功したりしたのも面白い、尤も錦心も、帝展に一同入選してはゐるが……それから寄稿家の中には、平福百穗、結城素明、笠井鳳齋などの名が見えてゐる。

『團々珍聞』はそれから二千號續いて明治四十年に廢刊した。

もうその頃は、各紙とも、小說で盛に賣り出してゐた、挿繪畫家も揃つてゐたが、『東京朝日』が右田年英、『都新聞』が富岡永洗、『時事新報』が筒井年峰『中央新聞』が武內桂舟、『やまと新聞』が水野年方社中『讀賣新聞』が梶田半古といふやうな顏觸れであつたが、併しまだ洋畫系の人々は顏を出さなかつた。

◇

洋畫系の挿繪が現はれるやうになつたのは、小說の挿繪などより、コマ繪の方が先である、明治三十五六年頃、『反省雜誌』といふのがあつた、これは後に『中央公論』となつて、一時本願寺の機關雜誌となり更に經營が瀧田樗陰の手に移つて今日の『中央公論』となつたのであるが、その『反省雜誌』時代に、中村不折が盛にコマ繪を畫いてゐたものである。

不折のコマ繪は、更に新聞『日本』や『朝日』にまで勢力を伸した、『日本』には、不折の外に下村爲山も盛に筆を執つた、爲山は、ホトトギス派の人々と古い因緣があつたから、子規一派が『日本』紙上に盛に筆を揮つてゐた關係上、勢ひ爲山が登場するやうになつたのである。爲山は伊豫松山の人で、子規と同郷であり、洋畫は小山正太郎の不同社に學んだので洋風とも和風ともつかぬ一種の畫風を創成してゐた、これは當時、相當注目されてゐたものである。この頃また、淺井忠のコマ繪も一寸現はれ、鹿子木孟郎の挿繪の出現した。それから少し經つて渡部金秋、渡部審也氏などの線の細かい挿繪が見え出した。

明治三十五六年頃、『萬朝報』に德永柳洲といふ人がゐた、『萬朝報』は小說にも挿繪を入れなかつたが、毎日必らず一人づゝ『時の人』を提へ、肖像として一面を飾つた。この筆者が柳洲であつた、まだ銅版が新聞には使用されなかつた時代なので、柳洲の肖像畫が中々達者でよく似てゐるといふ處から評判がよかつた此の柳洲といふ人、『萬朝報』の紙の色の變る頃まで、その達者な筆を揮つてゐたが、今は漸く忘られ勝になつてしまつた、『萬朝報』の德永柳洲に對し、『二六新報』には長原止水が、カツトや肖像畫に筆を執

り、清新な畫風を見せてゐた。

その頃、『報知新聞』は、社會部面に毎日主な記事の中へ、小さい挿繪を入れたものである、その日その日の記事の中から、話題になりさうな材料を提へて、手取り早く畫くといふ業なので、大したものではないが、これが輕妙な味があつて面白かつた、併し筆者は誰であるか判然しない、畫系は洋畫畑であつた。

『報知新聞』といへば、挿繪には關係がないが、色刷輪轉機を使用した始めも同紙である、明治三十八九年頃から、四十二三年にかけて盛に用ゐたのであるが、しまひには當時熊田葦城氏が執筆してゐた『日本史蹟』の寫眞の輪廓圖案に使はれた位になつてしまつた、その次ぎが『中央新聞』で、これは毎週一頁を四つ折にした子供附錄を出し、その色刷の圖案を杉浦非水氏が執筆し、編輯を藪白明といふ人がやつてゐたが、これも永續きはせず、日曜日丈け一面を飾つたり、新年號や時々の特輯頁に色刷を用ゐるに過ぎなかつた、それも杉浦非水氏の筆であつた。

◇

純粹の洋畫系ではなかつたが、新聞小說の挿繪界に、一大改革を起させ藝術的價値を高からしめたのは、明治四十二年一月一日から『東京朝日』に連載された森田草平氏の『煤煙』の挿繪であつた、これは名取春仙氏の筆で、今までのやうに挿繪として大きな紙面を取らず、僅か一段で、今のカット位の大さしかなかつたものであるが、當時は新聞の段數が少かつたから、今日の十三段刷から見れば、二段位の大さであつたらう、それでも、今日のやうに小說の作家と、畫家の名が肩を並べるやうなことはなかつた、此の挿繪は非常に好評を博し、新聞界の名物となつたが、それでも名取春仙といふ名を知る人は一部の趣味家に限られてゐた位である。

春仙氏は此の『煤煙』が好評だつだので、引續き、漱石の『それから』『三四郎』藤村の『春』小山內薰の『大川端』などにも、それを試みて、何れも相當な成績を擧げた、春仙氏は久保田米僊翁の門下で、才氣橫溢その作は日本畫の風致ではあつたが、洋畫系の構圖を多分に取入れてゐたのは爭ふことの出來ない事實であつた。

◇

鏑木淸方氏が『讀賣』に筆を揮つたのも多分その頃であつたらう、筆者はその翌年『中央新聞』に籍を置くやうになつたが、同紙は桂舟既に退き、故尾竹々坡が挿繪を擔任してゐたが、そこへ突然割込んで來た畫家があつた、神田伯山の講演『二人半兵衞』の挿繪を賴んだ處が、繪が高踏過ぎて一向に受けないそこで止むなく斷つてしまつたが、それが今日世に時めく日本美術院同人前田靑邨氏で一回の揮毫料が一圓五十錢であつたなどは、全く隔世の感がある。

兎も角も、此の春仙氏の挿繪を一の契期として、それからは、だん〳〵挿繪に注目するやうになり、創作の作者と畫家とが肩を並べて組まれ、挿繪を一つの賣り物とするやうになつて來た、

◇

昭和になつて、挿繪界に一大センセーションを起したのは、何といふても『大菩薩峠』に快筆を揮つた石井鶴三氏である、勿論氏は洋畫畑の人であり、彫刻家でもあるのであるが、此の挿繪は、洋畫の確實なデツサンを基礎として、これに浮世繪風の技巧を加味させた獨特のもので、全く他の追從を許さず非常な好評を博し、少からぬ長日月筆を續けた、その最後に、作者の中里介山氏と版權爭ひを起したことは、未だ記憶に新である、鶴三氏の肩代りに現れたのは中村岳陵氏で、氏は全く日本畫の人であるが、鶴三氏のあとを承けてよく畫格を保ち、氏には亦氏獨特の持味があつた。

一方では堂本印象氏が挿繪で注目される處となつた、是から各紙新小說を出す毎に、挿繪に非常に關心をもつやうになり、その詮衡には少からぬ苦心を拂ふやうになつた。

『朝日』が昭和六年に『西部戰線異狀なし』の筆者レマルクの『その後に來るもの』を黑田禮二氏の譯で連載し、その挿繪を和田三造氏が引受けたり、杉村楚人冠氏の『うるさき人々』の挿繪に洋畫界の大御所和田英作氏を引張り出して、これを依賴した處、氏はその爲めモデル一人を常雇にしてこれを畫いたなど

今も殘る好物話である。

木村莊八氏が挿繪界に活躍し初めたのもその頃であつた、氏が挿繪で研究したのは、「報知新聞」の白井喬二氏の『富士に立つ影』の挿繪を河野通勢、川端龍子の兩氏と共に擔任したのが最初であつたらう、十一谷義三郎氏の『唐人お吉』『時の敗者』から、大佛次郎の『霧笛』になつて纖細な洋風の繪畫となり、これが非常に好評を博した。

河野通勢氏は、田中貢太郎氏の『旋風時代』に明治初年の風俗を寫し、散々に道樂氣を交へて讀者を魅したものである。

新人としては『都新聞』が昭和五年に從來の型を破つて、硲伊之助氏に、小島昂の『微風に甦る日』の挿繪を依賴したのも特筆すべく、『人生劇場』で好評を博した中川一政氏の登場もその頃で、此の外

中村研一、太田三郎、大久保作次郎、熊岡美彦、小山敬三、向井潤吉、安宅安五郎、倉田白羊、足立源一郎、長谷川昇、大野隆德、小磯良平、佐野繁二郎

などの諸氏が彼方此方に筆を揮ひ、なほ古老格の小杉放庵を引張り出すかと思へば、長谷川春子氏を登場させたり、日本畫の方も亦負けぬ氣になつて、山村耕花氏は一時に三新聞に執筆し、小村雪岱氏がまた二新聞を股にかけ、中村大三郎、北野恒富、荒井寛方、矢野橋村、田中咄哉洲氏いふ風に、珍らしい人々を

出す競爭となつて來た。

その一方に岩田專太郎、小田富彌といふやうな挿繪專門家も介在して愈々これから挿繪界の混戰狀態とならうとする形勢にある。

此の次の時代には、どんな人々が現はれて來るか、これも面白いみものである。（昭和十年十月）

畫集、圖錄、目錄

美術に關する出版物は、その挿繪なり、圖版なりが、本文を助ける上に於て、かなり重要性を有してゐる。それ故、その紙質や印刷には、著者も出版家も相當に苦心してゐるやうである、裝幀等に於ても、苟も美術書と銘打つて世に出すからには、あまりお粗末なものでは內容までがお粗末に見えてしまう、かうなつて來ると、美術に關する出版も亦難い哉である。

私がいまこゝで書かうと思ふのは、美術に關する出版物の中で、畫集、圖錄、目錄といふ方面のものである、これらの中には、隨分編纂や裝幀、製版、印刷等にも苦心を潛めながら割合にその方面で批評に上つたり、話題の的となつたりすることが稀であるからである。

畫集といへば、直ちにその昔、審美書院が未だ華やかなりし頃出版した、『東瀛珠光』や『東洋美術大觀』を思ひ出す、堂々たる內容を備へ木版、玻璃版の精を取つて尨然たる大册數卷を重ねてゐるのである。收錄された名畫もなるべく原畫の趣きを損ぜぬやうにと、色彩で見るものは木版手刷とし、水墨のものは玻璃版とし、當時としては此の上なき贅澤なものであつた、木版は殊に立派なもので、月刊のものでは『國

華』に挿入される一二葉のものがやかましい、編輯同人の指揮のもとに、彫師も刷師も腕によりをかけて、之に當つてゐたわけである。

此の外に、浮世繪傑作集なども、木版と玻璃版で、製本や印刷の贅を盡した所謂豪華版であつた。

其頃はまだ三色版が十分に使用されなかつた時で、從つて今日なら三色刷で行くべきものは、大抵木版を使つたのである、事實これらの大出版が、今日なほ儼としてその價値を高めて行くのは、此の豐富な木版挿繪の爲めで、玻璃版の方は、今日から見れば、まだまだ幼稚極まるものであつた。

◇

三色版が著しい發達を遂げて來てからは、畫集の出版も益々盛になつた、殊に西洋畫や工藝美術の圖集畫集などになると、どうしても三色版の力を籍らねばならぬ、かうした方面で、少からぬ努力を見せたのは、元、大森に居た辻本五陽氏であつた、氏は三色版印刷の爲めには、實に並々ならぬ苦心をし多大の犧牲を拂ひ、そして意義ある出版を相當に見せたものである。

辻本氏の三色版印刷で、先づ世を驚かしたのは『原色法隆寺壁畫』である。法隆寺の壁畫は前にも『法隆寺大鏡』のやうな大出版があつて紹介されては居るが、原色で、原畫の面影を偲ばせたものはあまり見なかつた此の集が出て、はじめて完全にその全貌を見るを得少からず美術界の賞讃を博したものである、

此の集に依つて技倆を認められた辻本氏は、間もなく『東洋陶磁集成』を出した、これは大正十四年である。

そして辻本氏の技術が最高潮に達したのが中村彝氏の畫集である、これはその翌年十五年の出版で三色版のみならず、グラビア版まで使つた贅澤なもので、中村彝氏の作品中、五十圖を擇び、一枚一枚瀧面取の臺紙に貼り麻布の帙に入れた素晴しいもので、恐らく明治から大正へかけての畫集中、最も豪奢なるものであると思ふ、勿論內容に於ても彗星の如き魅力をもつてゐる。

近年に出版された畫集の中では、榊原紫峰氏の『紫峰花鳥畫集』が、嶄然として一頭地を拔く、これは紫峰氏の作品中、會心のものゝみ收め、原色版四葉、玻璃版六十六葉、これ皆半切と四つ切との大印刷で、紫峰氏が一圖一圖嚴密なる指揮のもとに製版し印刷したもので、誠に彪然たる大册、現代に於ける印刷能力の全部を盡したものといふことが出來やう。

◇

單なる畫集でなく、一つの大著述として、印刷美術の上に大きな足跡を遺してゐるものに、故平福百穗氏の『日本洋畫曙光』澁井清氏の『元祿古版畫集英』二卷がある、『日本洋畫曙光』は從來餘り知られてゐなかつた、秋田の佐竹曙山と小田野直武の事蹟を經とし、平賀源內を中心とする洋風移入の情勢を緯と

し、秋田藩に起つた洋畫運動の經路を詳述したもので、文獻としても極めて貴重なものであるが、これに收められた圖版が亦珍らしく、佐竹曙山の風景圖、唐鳥圖、蝦蟇仙人、竹と文鳥、その他總て三十葉、三色版と玻璃版と、總て稀覯の珍品、その印刷の如きも流石に百穗畫伯親からこれを指揮しただけあつて完備し盡した出版である、この數年來現はれた美術書として稀に見る立派なものである。

澁井清氏の『元祿古版畫集英』は、氏の豐富なコレクションが生んだもので、第一卷は大正十五年、二卷は昭和三年の出版である、第一卷は清信、師重、杉村等の研究で、大判の墨摺のものから、繪本類に至るまで數十種六十葉を精巧なる玻璃版とし、更に附錄として『好色浮世繪版畫目錄』菊四倍大六十四頁を添へた、これは實に澁井氏が數十年間苦心蒐集したものゝ中から系統を調べ、時代を正し、秩序よく編纂したものである、兎に角、元祿版畫の中で、重きを爲すものには祕戲畫が多いので、內務省の檢閱も相當に嚴しくその爲め十數回の交涉を重ね、漸くにして世に出たものである、恐らく浮世繪に關する著作中、最も贅澤でその上非常な手數をかけた出版といふことが出來やう、第二卷の方には、木版を二枚も加へ、解說を非常に詳しくした、內務省の檢閱は隨分嚴重で、幾枚か原圖の變更を餘儀なくされたが、外國の浮世繪研究家には非常に歡迎されたもので、海外からの申込も數十部に上つたと聞いてゐる此の『元祿古版畫集英』二卷の製版は大塚稔氏が自からこれに當つたものである。

◇

圖錄の中に、特に此の際一筆書いて置きたいものがある、それは『みち草』といふ極めて瀟洒な一圖錄である、これは故中澤彥吉氏が歐米を漫遊した際、彼地此地で蒐集した藝術品を、美しい原色版や玻璃版に附し、石井柏亭氏が裝幀を擔任したもので、小册子ながら聲澤の限りを盡したものであつた、內容も中澤氏が自からルノアール翁を訪問し、翁が會心の作として讓り受けた『西斑牙の女』をはじめ、ロダン美術館の陳列品で、ロダンの傑作の一といはれる『思索する人』此の外、埃及、希臘、古代羅馬、波斯の古陶高加索の玻璃器等、千金を惜まず集めたものゝ美しい圖版とし、その蒐集の回顧を書いたものである、これは辻本氏が製版に當り、極く少數の印刷で知己に頒つたものであるが、間もなく中澤氏は世を去り、その遺愛の此の珍什は、大震災で一つ殘らず灰燼に歸してしまつたのである、かうした事から、此の『みち草』一卷は非常に貴重なものとして、同好の間に保存されてゐる。

◇

次に『目錄』に就いて書いて置く、近頃の大入札といはれた大阪の故松本松藏氏の賣立には、今までのレコードを破つた素晴しい立派な目錄が出來て、同好に頒布した數の外に、一部二十圓で希望者に頒つた、この一事既に內容の如何なるものかを察知せしめるが、事實素晴しいもので、裝幀には絹紬に古代裂雜

頭唐草模様を現はし、古代紫の革綴とし、木版、三色版、一色網版等の圖版、實に四百に近く、木版には藝阿彌瀧山水、仁清色繪藤壺の二點を極密數十遍刷とし、原色版も二十六葉の多きに達し、一點一圖これに對する古今の評語、作の傳來、系統等を記し、特に研究を要するものは、一々これに對する文獻を渉獵して收錄する等、並々ならぬ努力を敢へてした、その編纂に當つたのは外狩素心庵君で將に賣立創つて以來の大掛りなもの、双軒庵松本氏は、翌年第二次翌々年第三次の賣立を行ふに至り、それ〴〵立派な目錄を出版した。その後、藤田男爵家、川崎男爵家の目錄がまた素晴しいものであつた。

賣立に目錄を作ることは、大正六七年からで、その初期のものは、今から見ると誠にお粗末なもので、內容こそ貧弱ながらアート紙を用ゐたやうなもの丶、表紙の如きは、唯の羅紗紙に『もく錄』と三字を印刷した丈けのもの、大方は菊判で、時々意匠を施したものがあつても、木版で紅葉一枚位散らしたに過ぎない、當時の大入札といはれ、百萬圓を突破した伊達家の目錄でさへ、石版表紙の今日から見れば誠に見すぼらしいものであつた。赤星家の時になつて、初めて木版の表紙となり面目を一新し、大正十三年吉田楓軒翁の賣立の時、初めて四六二倍大の型が出來、表紙も田中眞美氏が意匠を凝らした、これから目錄もだん〴〵立派になり、紀州德川侯爵家の時には、朱色の絹地に金色の三つ葵の定紋を現はし、圖錄としての獨立の體裁を以て現はれ次で島津公爵家の時には、江戸紫地の絹表紙で帙入とし、それから鹿峰神戸氏の

時の唐本仕立、釵山髻華氏の時の列帖綴、それから第一回の藤田家、川崎家、淺見家、說田家など何れも四六二倍大の厚さ一寸餘の大册、名物や名作には特に三色版を入れたりするやうになり、松本双軒庵に至つて、最高潮に達し、標題も何々家目錄でなく、『雙軒庵美術集成圖錄』と銘打つに至つた。

これも美術書の出版界にあつては見逃すことの出來ぬ一事である。

旅情畫趣

性來烟霞の癖あつて、毎年夏は數日の閑を割き、此處彼處と氣の向くまゝの旅を續けたのであるが、その中から、感興の深かつた旅の思ひ出を記して見る。

男鹿半島

男鹿半島の雄大な風景、あの半島を飾り彩る岩石美に心うたれて、何時かは一度探つて見たいと心願を起したのは、文展の初期に中澤弘光氏が出品した『男鹿半島』の作を見てからであつた、そして思ひ懷くこと實に二十年、漸く先年その目的を果したのであつた。

東道の勞を取られたのは、秋田縣船川港の町長柏崎泰吉翁、とうの昔に還曆を過したやうな童顏であるが、骨格も逞しく、鑊鑠として壯者を凌ぐ精力一杯の人、秋田辯をまる出しに滔々として男鹿半島の山水美を說く痛快さ、一夜を船川の宿に過して、翌朝未明に宿を出た、町長は宿の息子に遊覽船モーターの支度をさせ、ビールや罐詰、水蜜桃など積込んで、午前六時半といふのに港を出た。

飽くまで濃い紺碧の海の色、空の色、その空と水とが相迫るところ、海鷗幾百となく群れてゐる壯觀、朝の空氣は爽かに、涼しい風が頰を撫でるので、『いゝ風だ……』といへば、傍から翁は首を傾げて『强くならねばヨ、が……』といふ。

港を出てから、先づ鵜の澤山群れてゐる鵜崎を過ぎ、それからは奇岩怪石が應接に遑もない、帆掛岩、俎島、龍ケ島、鳥帽子岩、辨天岩、御幣岩といふやうな、かうした場所にはよくある名の岩や島が、思ひ思ひの形して送り迎へる、それへ、日本海の荒波が何の會釋遠慮もなくぶつかつて碎け、碎けて白龍を躍らすのだ、岩の色がまた面白い、海岸の風景といへば、多く黑み勝ちの、ともすれば靑みがかつた岩の多いのに引きかへて、此處のは渥丹の如く丹く、朱の如く明るく、時にそれが黝ずんで見えるのさへある、さうかと思ふと龍ケ島といふ兀立千仞の岩などは、あらゆる色彩、あらゆる線條、それが相交錯してモザイクのやうにさへ目に映る。

阿字ケ島といふ處へあがつて、こゝで中食を認めた、波狀を爲して多少の起伏はあるものゝ、岩は廣く平らに展開されて、或は刳られ或は缺かれ、その波の神工鬼斧に到る處面白い景象を見せる、時には岩と岩との間から、美しい雪柳が、丈けも伸びられず這ふが如くに繁つてゐるのもある、日本海の波風は荒くとてもこんなか弱い植物には思ふやうにその枝さへ伸ばす事が出來ないのだ。

その岩の上に胡座を組んで、ビールの杯を擧げた時の氣持は忘られない。

それから再び船を出して、有名な大棧橋、小棧橋の奇勝を過ぎる、どんと打ち寄せる波の上に船を乘りあげて、その波の引くにまかせつゝ棧橋といはれる岩の下を潜るのだ、かうなると、聊か風景を弄ぶ氣味合にもなる、午後には風が出るといふ豫言は的中して、波は雪を吐き、霧を噴きつゝ物凄い勢ひでぶつかつて來る。

『これぢあア蒿雀は駄目だナ……』

とモーターのハンドルを握る青年が殘念がる、此方も殘念だが仕方がない、琅玕色に陽光を屈曲さして、水に映るといふ蒿雀の窟は遂に見られずして船を還へした。

歸途には椿村へ船を寄せて、椿の樹の北限地帶といふ珍らしい椿を見た、これより北にもう椿はないと思ふと此の椿の老樹が何となく嚴かに見えた、私はその葉一片を記念としてノートの間に挾んだ。

象潟

『奥の細道』を讀んで、幾度か一度は訪れて見やうと思つてゐた憧憬の名勝、象潟に着いたのは、その歸り道の夜であつた。月もない眞の闇、時間も過ぎてゐたので、宿の選定もそこ〳〵に驛に近い象潟樓とかいふのに飛込んで、『何か夕飯の仕度を　と賴む』と『ハイハイ』と女中が返事をして去つたものゝ中々出て來ない、待遠しさに一寸部屋から廊下へ出て、帳場の方へ行かうとすると、今しあげ蓋を開けて、中から鮮魚を取り出す處であつた、五尺四方もありさうな冷藏裝置の水槽、中には一杯に海魚が銀鱗を閃めかしてゐるのだ。

珍らしく烏賊の刺身が出たので、酒の量を過し枕につくと、遠く波の音が聞え、小驛といふことが今更らしく身に泌みるが、驛の附近丈けでは、海濱らしい風も見えない。

翌日は未明に床を起ち出でた、昨夜は眞の闇だつたので、何が何やら解らなかつたが、今朝見ると朝靄の中から鳥海山が裾長にそゝり立ち、其の昔九十九島、八十八瀨と數へられた島々浦々は、いま青田の中に點々たる丘陵と形をかへて、老松參差、風に枝をゆるがしてゐる、大なるもの、小なるもの、高きもの低きもの、芭蕉が

その朝、天よく霽れて朝日はなやかに生し出づる程に、象潟に舟を泛ぶ、まづ能因島に舟をよせて、弓事幽居の跡をとむらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上にこぐとよまれし櫻の老木、西行の紀念を殘す。

といふたその能因島は何處であらう、古書に載せられた稻荷島、彩石島はどれであらう、靄は霽れて、青

田の綠が一面に丘陵の下を彩るその青田の盡くる處、鳥海山が繪のやうに横たはつてゐるのである。

『松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し』

と芭蕉の記した頃は、一面の海であつたが、文久元年六月四日の大地震に、一帶の土地隆起し、海水遠く去つて、島嶼、泥塊となつて其處此處に殘る、といふ歴史が、そゞろに肌に粟を生ぜしめる、然し島を彩る松の美しさが、僅かにそのかみの面影を偲ばせてゐるのである。

その丘陵の中で、樹木鬱蒼と茂つてゐる一角が有名な蚶滿寺で、宿から北へ十五六丁の處である、芭蕉が、

此の寺の方丈に座して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をささへ、その影うつりて江にあり。

といふた處、神功皇宮山といふ山號が素晴しい、青田の畔に庭下駄を濡らしながら、蚶滿寺を訪ねて見た流石に東北の名刹、崩れかかつた築地塀、そこに斜にさしかかつた老松の幹、古びた山門、閑院宮家云々と記された高い柱、何處となくありし昔を偲ばせてゐる。

山門を入つて露にぬれた境内の甃を踏んだ、すると、その古びた鐘樓の前に、十二三の村の少女が白蓮二三本を抱へて立つてゐた、指を繰ると成る程、その日は盂蘭盆會であつた。

此の土地にして此の少女、何といふ趣きのある對照であらう、私は今にその時の情景が忘られずして心眼に浮かぶ、本堂に住寺を尋ねたが不在、寺のこと一言二言聞いて見たが、不親切で私の希望を滿足させてくれなかつた。

寺内には芭蕉翁の合歡の花の句碑があり、名木『夜啼きの椿』がある、蚶滿寺七不思議の一つとか、一株から細い多くの幹が生へて一つの叢をなす處、速水御舟氏の『名樹散椿圖』を思ひ出したりした。

象潟の町を歩いた、こゝも文久の地震の爲め多くの家々が潰れたといふから、今のはその殘りであらう町の唯中に、唯一つ古い蒼蒸した石橋が遺つてゐる、形も時代も、周圍のものと調和してゐない、如何にも昔の姿のまゝである、あとで象潟の地圖を擴げて、それが名高い高橋だと知つた。

その高橋の傍に合歡の木が一本、あの細かい可憐な葉の間から、牡丹刷毛に紅を含ませてぱつと散らしたやうな花をのぞかせてゐる。

芭蕉の吟じた合歡の花はいま何處に殘つてゐるのであらう、此の合歡はまだ若木で、恐らく文久の地震も知るまい、併し象潟の昔を語る此の高橋は、若木ながらも此の合歡によつて、どの位旅情を深からしめたか知れない。

私はいつまでも、いつまでも、此の合歡の花咲く古い石橋の上に立つてゐたい氣持になつた。

厚岸

北海道では、厚岸の一日が忘られない、根室へと志して厚岸の驛で列車を降りた時は、繪に見るやうな厚岸灣や歴史で名高い國泰寺などが胸の中に描かれてゐたのであるが、灣を隔てた眞龍の街を歩いて行くと、細かい糸のやうな雨が横なぐりに降りつけて、傘もさせない、人通りもない通り、殆んど雨戸を閉め切つたやうな兩側の人家、何といふ寂しさであらう、唯時折何處か街裏の工場でエンジンの音が洩れてくる位である、灣の渡船場に來た時は、雨は愈々細かく煙つて寧ろ霧といつた方が適切だつた、一面にヴェールをかけたやうな中から淡墨の船の胴體が、その影を滲み込ませる。

渡船の人々の中に、六七十に見える六部が一人交つてゐた、舷の方へ唯一人弗然として言葉を交さうともしない、船はやがて對岸に着いた。

すると間もなく細雨はやみ、霧らしい湖面も霽れて、そこには牡蠣島が夢のやうに浮んでゐる。

厚岸はその昔、松前藩が會所をい置た處、北海道の文化史上には忘れることの出來ない土地だが、明治維新後、寂れて今のやうになつてしまつた、街を歩くと何處の家でも言ひ合せたやうに莚をのべ、海草を乾してゐる、それに幾百千となく蒼蠅が群つてゐて、人が近づくとパツと立つ、その物凄さは旅慣れた人

でもだぢ〳〵とする、それでもその傍には百日草も咲いてゐる、向日葵が大きな花をつけたりしてゐる。

歩きにくい砂利道を踏んで、名刹國泰寺を訪れた、この寺は十一代將軍家齊が、日露の國交と、北海移民の爲めに建立したもので、日高様似の等淵院、膽振の善光寺と共に北海の三大寺と呼ばれたものの一つ、文翁知政禪師の開基で禪宗であり、寺領として十萬石を下賜され、鎌倉建長寺から輪番が派遣される例になつてゐた、そして内政と外交と面倒な交渉を此の三ケ寺の間で處理せしめやうとした幕府の政畧が、一寸偲ばれるし、此の寺が禪宗である一方、等淵院が天台宗で、上野寛永寺の末寺になつてゐることや、善光寺がいふまでもなく淨土宗で、信州長野の善光寺の出張といふことにしてゐる點などから見ても、細かい用意の潜んでゐたことがわかるのであつた。

丁度よい雨歇みに、國泰寺の山門を潜つた、境内は到る處、櫻である、春は五月頃、此の櫻が一時に咲いて遠近の花見客が、こゝに雲集するといふのも興を惹いたが、今はその櫻の枝々から、幾つともなく毛蟲がぶら下つてゐるのに、幾度か氣味悪い思ひしながら、庫裡に住職を訪ねて見た、住職は白髯の長い品のよい老僧で、此の遠來の訪問客の爲めに、いろ〳〵と寺の寶物など見せてくれた、先づ開基の文翁知政禪師が書いた寺の掟、此の中には

一、天下泰平國家安全の勸行怠慢あるべからざること

一、蝦夷をして東邦の姿に歸化せしむること
の文字があり、更にまた
一、隣邦の外夷渡來したるとも國のあざけりなからしむること
の一項がある、幕府が如何に此の點に心を碎いたかがわかる、古文書には『夷國船渡來中日記板書』がある、暇があつて丹念に讀んで見たらば面白いであらう、寺門の鳳雲閣といふので、抹茶の饗應を受け、再び厚岸湖の方へ引返した、雨はまた一しきり降り出して、小さい湖面を包んでしまつた。

白老

おなじ北海道の旅、白老のアイヌ村を訪ねたのは昭和二年の夏であつた、今は當時より餘程變つてゐるであらう。

私が此の旅に上つたのは、その年の八月十三日だつた、本州では百度に近い暑さであつたといふ日である、室蘭行の列車を白老で棄て、僅かな荷物を驛へ預けて、村の通りへ出た、驛前から大通りに出る角に簡單な部落の道しるべが出て居る、それを頼りに進む。

樽前の火山灰が土の色を鼠色に見せ、割合に廣い道には、バラツク建のやうな粗末な家が並んで、ほんの形ばかりの部落を作つてゐるのである、然もその家々の大方は、戸を閉して人の居る氣配さへない位にひつそりしてゐる、全く人つ子一人通らない、時折家と家との間から、風に搖られた玉蜀黍が赤ちやけた毛の頭を出す、何といふ寂しさだらう。道しるべに依ると、此の村には第一、第二の小學校があつて、その第二の方は全く土人の學校だといふ、そこで先づ學校を訪ねた、眞夏の日は頭からカン〳〵に照りつけるのであるが、流石に北海道では東京ほどに感じない、家並を外れると畑の中にチラホラと家が見える、小さい茅葺であるがその葺き方が、七段又は十段位になつて、特長があるので直ぐ知れる、その入口は聖公會の講議所であつた、それから土人の共同浴場、その一部を仕切つて工作場となつてゐて、五十位のアイヌの男が頻りに手工をやつてゐる、絲卷、箸、小刀手提バツク、アツシ、さうした品々が吊してある。

小學校を訪ねた、二教室ほどあつて、周圍が畑になつてゐる、そして十六ささげが花を開き、玉蜀黍がこれを圍んでゐる、そこへ村役場の人々が戸數割の徵税に來た、見ると一戸當り五十錢宛で、二字の姓の下へ片假名で名を書き入れてある。

留守の女教員さんに、色々と學校の模樣を訪ねる、そこへ遊びに來た十二三のメノコが部落訪問の案内に立つてくれた、案内により入つたのは、野村エカシトクといふ七十三四の老人の家であつた、酋長格の家柄といふので外の家よりは幾分大きく、勝手口から入ると中は二十疊位の廣さ、中央に爐を切り、普通

の家なら床の間といふ位置の處に、貝桶、角盥、湯桶、簡單な唐草蒔繪の品が五箇ばかり重ねてあり、その上に美しい拵付きの太刀が五六本、周圍には木を削つて作つた幣が張り廻はされてある、是は此の家の寶物で、その昔松前藩の人々と交換した物といふ、此の寶物に交つて「巴里」といふレツテルを貼つた酩酒の一升罎が見えたのも面白い。

主人エカシトクは、入口でアキユリといふ小刀で、頻りに何か拵らへて居たが、客來といふので、いそ〳〵と座を立つた、何處かレピンの畫いたトルストイに似てゐる、翁は徐ろに語り出した。

私とこは、先祖代々の酋長で、明治三年に野村といふ姓を貰つた、若い時から熊も二十三頭ほど捕つた私達は生れ落ちてから海へ出て魚を漁ること、山へ行つて熊を捕ること、その外の事は敎はらない、それでも神の有難い事は親から敎はる、それは火の神で、イショブンキョウといふ神を呼ぶ言葉も敎へられる、粟で酒を作ることも何時か習ひ覺えた、しかし、内地の人々と交る前には、物に味をつけるのに海の水を用ゐるより外は知らなかつた、畑に物を作る事は知つてゐても、土地が瘦せてゐて何も出來ない、その中に内地から人がだん〳〵に入込んで來る、一番頼りにする熊も減つてしまつて、今では全く見られなくなつた、昔は手槍で突けた鮪も、内地の人が大がかりの漁をするので、我々はだん〳〵と立ちゆかなくなり、その熊を捕るに用ゐた弓、鮪を突いた此の槍、それを使ふには、自然と一つの呼吸がい

るのであつたが、今はそれを知りながら、役に立てることが出來なくなつてしまつたのだ。

と老人の話は少し曇る、これは拓けゆく周圍の有樣や、それと反對に年々に減つて行く種族の身の上や、さうした悲哀が、自然に話の中に芽を萠し出すからであらう、私は何ともいへぬ哀愁を覺えた。

『お爺さん、今度は熊祭りの話を……』

私は强いて聞倦きた月並の熊祭りの話をさせて、話頭を一轉せしめやうとしたのである。

エカシトク爺さんも、何時か釣り込まれて熊祭りの話を初めた、かうした話になると爺さんは急に晴やかになつてしまつて、しまひには、手振り足振りしてその祭りの次第を語り出した。

私は安心したやうな氣持になつて、その家を辭さうとすると、出口から

『旦那さん……』

と私を呼ぶ聲がした、見ると垢じみたアツシを着た五十ばかりの入墨の女が、手提袋のやうなものを押賣りするのだつた。

私はまた暗い氣分に浸されてしまつた。

中津峡

熊谷驛で省線に別れ、秩父鐵道の電車に搖られて秩父町に下車、こゝに在住の畫家で、秩父山岳會の幹事をしてゐる辻田華江氏を訪ねた、中津峡入りの概略を知る爲めである、相携へて自動車を大輪まで走らせ、三峰山麓に秩父宮への獻上畫を製作中の和田英作畫伯を突然に驚かした、しばらく都の空に遠かつて山中生活の畫伯は非常な喜びで、直ちにその座敷に招ぜられる、傍には力作の『秩父の峰』が既に大方出來上つて、畫伯の座右に巍然たる偉容を見せてゐる、見ればその座には舊知の松崎秩父驛長や、盆栽家の清水柏翁氏などが居合せて、雜談に暫し賑ふ、窓外には三峰の翠巒、雲を吐き靄を纏うて威容益々加はる

その中に驛長等の一行は、時刻が來たとて自動車で出かけたが、やゝ暫くして引返し。

『先生、不動下の溪谷は、此の附近では先づ第一ですから、是非先生のカンヴアスに……』

と態々の迎へである、そこで畫伯は私に

『では一所にどうです……』

と促がす、その言葉に從つて自動車上の人となつた

◇

不動下といふのは大輪から五六町の手前でささやかな不動堂の下を降りた處、荒川の溪流はここに至つて俄かに狹まり、水は左右の岩に碎け、更にその紫紺や瑠璃や白綠や群青や、凡て清々しい色彩の總てを集めて驀らに落ちて來る、峙つ岩と岩の裂け目からは、澤玉簪花の紫と、風知草の綠が波の飛沫に靡いて搖らぐ、その風致は一寸木曾の寢覺の床を思はせるが、規模は彼より遙かに大きく、彼の靜的なのに對して、これは飽くまで動的であり且つ男性的である。

畫伯はやがて、岩の上にカンヴアスを据えた、バレツトには忽ち藍、綠、紫、さま〳〵な繪の具が搾り出される。

『この邊ではよく杜鵑が鳴きます、昔から賞美する程面白くはありません、それよりは此の邊の山奥で育つた鶯の谷渡りの方が……』

畫伯はかういひながら、頻りに筆を動かす、その流れの上には、何時かほんのりとクリーム色の西の空の色が映るやうになつた、眞夏といひながら、一寸ひやりとして來た。

蜩が頻りに鳴く、やがて畫伯は筆を收めた、未完成の作を片手に、畫架を肩に、もと來た急な小徑を宿に辿りつく。

その夜は畫伯と唯二人になつて、けふ獲れたといふ鮎に舌鼓をうちながら、久し振りで盃をあげた、前には三峰の森が溪流を隔てゝ窓に迫る、電燈を目がけて夥しく集まる羽蟻の群れ。

それに交つて飛來る、黄蛾、紅蛾、白蛾、黒蛾……矢張り山の宿だ。

◇

翌朝は四時といふに目が覺めた、愈々中津峽入りである、含嗽をすませて欄に倚ると、氣一しほ冷やかに、朝靄の樹々の間から、鶯が頻りに啼く。

六時半、靴ばきのまゝステツキを手にしながら大輪を立つ。

畫伯が笑ひながら、送くて下さる。

左すれば朱欄の登龍橋を渡つて三峰に登る道、中津峽へは右の道をとつて進む、こゝからなほ二十丁ほどの落合までは賴めば自動車も通ふのであるが、此の時間ではまだ運轉手も夢の中であらう、まゝよと足に任せて行く、落合は荒川の本流と、中津川とが合する處、徒らに豪大な秩父大瀧村第一の要所で、村役場もあれば、駐在所もある、ここから簡單な釣橋一つ渡ると道は又二つに岐れる、左は山村栃木を經て、名高い雁坂峠を越えて甲州路に入り、右は中津川の流れに沿うて、羊腸たる山路を縫ひ、終局の中津川の部落を經て信州に入るのである。

『新記』に依ると、『秩父の山奥は、峰巒四方に方に聳えて平地なく、耕す處は皆火耕の畑なり、これを指または燒畑と呼べり、稼穡の困難なるさま、季春より初冬の頃までは、それ〴〵の場所場所へ、廬を結びて移住し、禾熟の時には、晝は猿を防ぎ、夜は猿鹿を逐ひ明發まで寢られず、聲をあげ又は板木を鳴らして夫妻父母、山を隔て、谷を越え、みな處を異にせり』とある。

これは今から數十年前の話である、實際そんな風であつたか知れない、併し今はささやかな地でも桑を栽ゑ、桜の木や、麻を培ふて生計のしろとしてゐる、唯水田ばかりは大輪から中津川まで六里二十八町、遂に一畝の地だに見ることが出來ない、人里に近づくと腕ほどもある丸太で柵を縱横に構へて居る、野猪の近づくのを防ぐのである。

◇

落合の村を過ぎてから、間もなく、椚平、鶉平の小部落を迎へる、平といふ文字の通り幾分の平地で、そこに自然に人家が集まる、併し、平といふても、全くの猫額大、多くは山の中腹で、細い道が家と家を繋ぎ、部落から部落へ通ずる、それでも鶉平には小學校の分教場があつて、幾つかの机が並んで居り、『うるしや』といふ旅人宿の看板も見えたので道端からのぞいて見ると、夏蠶の桑が一杯で旅客などの泊まれる隙もなく、泊める氣配も見えない。

此の邊から、道はだん〳〵と勾配が急になつて、溪流は遙か下の方になる、時々此の細い道を炭や薪を積んだ駄馬が來る、せん方なしに崖岨に足をかけ、木の枝につかまつて馬を避ける、馬子はいとも鄭寧にお辭儀をして過ぎてゆく。

小雙里といふ部落を過ぎると、道ばたに不動堂がある、堂は掘立小屋同然だが、その傍に一寸美しい瀧が落ちてゐる、その飛沫が霧と散つて、ヒヤリと身に沁みる、通りすがりの馬子に處の名を聞いたら、花井澤と答へた、山中に似合はぬ優しい名だ、こゝで帽子を取り、上衣を脱ぎ、タオルを水に浸して半身を拭ひ、兩手を以て思ひのまゝに瀧水を掬ふ、氷のやうな冷たさである。

これからまた暫らくは九十九折の細道を辿るのである。次で十六々木（そゞろき）といふ部落がある、人家というても漸く五六戸位、それでも家の前には、眞紅、淡紅、白、絞と美しい立葵が數十莖、すく〳〵と伸び、一本ごとに數十輪の花をつけた豪華さ、花の下を白い雞がかけ廻る、繪だ、繪だ、將さに宗達が名作の六曲一双を展げた形だ。

瀧がまた一つ、今度は道の下を潜つて、右し左し、そして雜草の中を潜り、音のみ聞かせて、果ては遙かな溪流の中へ……。此の瀧の落ちてゐる爲めか、次の部落を瀧の澤といふ、板屋根に石を置いたのが三々五々、山の中腹を彩つてゐる。

やがて今度はだら〳〵と下つて、徑は川の岸にまで降つてしまう、こゝにまた十數戸の一部落があつて濱平と呼び、一枚板の橋をかけて道は左側に移る。

◇

濱平を過ぎてからは、人家は全く見えなくなつて、道は森林帶に入つてしまう、この邊りから溪流の形はだん〳〵面白くなつて來る。兩岸の絶壁は一歩一歩と相迫つて來て、そこに背黑鶺鴒がツイと波狀を描いて飛び交ふ、鶯が頻りに木々の間に鳴き音を辷らせ、時々遠くで杜鵑が聞える、美しい玉紫陽花が、冷やかな山風に玉を搖がす、八九寸もありさうな山百合が數十輪うなだれかゝる、その美しさに見恍れながら山裾をまた一めぐりすると又瀧が落ちてゐる、危く崩れさうな岩の下を足早にかけぬけると、又そこに險しい岨道が岩を抉る、さなきだに細い道が、山から山、峰から峰へと滲み出して來る、水にぬれて危く上らうとするのを、靴ばきの足を取られまいと氣支ひながら漸くにして鹽澤の部落に着いた。

道傍に小學校分教場の看板が、目に入つたので、里の人に、生徒は幾人位あるかと聞いたら、

『はア一年と二年で十二人、三年からは二里下の鶏平へ行くでがす……』

と答へた。

立話をして居る處へ、手に手に銛を持つた素裸の子供が五六人集まる、一人の提げた魚籠の中には、六

七寸ほどの『やまめ』が跳ねてゐた。

◇

中津峽は、此の鹽澤の部落から一里十六町の中雙里まで、更に一里餘の中津川まで抉られたやうな峽谷をさしていふので、兩岸はそゝり立つ岩壁幾十丈、その下の岩を嚙み、崖に碎ける水の淸冽さ、そこにいろ〳〵の名勝がある。

今までは賃せば駄馬の背も借りられたが、ここからは全く馬も通はない、人家を離れると、そこに『秩父名勝中津峽』の棒杭が立ち、やがて『彼岸のはちす』といふ高札が立つてゐる、岩の形からの名であらう、神工鬼斧の言辭も古いが、その裂目に根を托して綠を搖がす樹々の美しさ、そこにまた風知草がおどろ髮をふり亂してゐる『、霞岩』『瑠璃ケ淵』『滑川の時雨』『小滑の瀧』かうした美しい風景が、或は仰ぐ對岸の彼方に、或は足下に轟く激流の中に、一歩一歩と展開されてゆく。

『滑川の時雨』に柔かい南畫の趣きがあるとすれば、『霞岩』には北畫の豪宕な破墨を思はせる、岩の形も千變萬化で、一枚岩に全流を漲り落すもあれば、二つ三つと渦卷いて、そこに神祕的な深潭を穿つもあり『折木峠』と『三高山の夕照』が峽谷美の最高調に達し、更に『曲水』の奇景、『鴛鴦ケ淵』の奇勝となるかくて『常世脊山の躑躅』を經て中雙里に近づく、不圖、足もとから栗鼠が一匹チョロ〳〵とかけ出して道

ばたの橡の木に登り、前翅で顏を撫で居る、前後に全く人影もない。

午前十一時半、一本の丸木橋を渡つて中雙里に着いた、こゝは人家僅かに五戸、近頃分家して二軒ばかり殖えたといふ、崖の上の一軒家の前には、こゝにも小學校の分敎場があるが、生徒は僅か七八人だといふ、部落のはづれの山中鶴吉さんといふ家で一休みした。

鶯が頻りに鳴く、淙々たる溪流を隔てゝ山雲が頻りに去來する、中津の勝はこれから中津川まで、全く北畫式の直線の多い風景になるのだ。

私は此の山中の家で、思ひのまゝに山雲の去來を眺めたのである。（昭和三年七月二十八日都新聞）

金鑽へ

保己野村

鑷は既に上簇して、野には桑摘の唄も聞えず、黄土色した麥も半ば刈られて、蒸暑い草いきれの中を自動車は驀らに南へ向つて進む、十二天山の頂上の平坦な線が少し斜になつた頃、自動車は埼玉縣の西隅兒玉町に入つた、狹い街路には、荷車や、リヤカーが無雜作に置かれて、これに積まれた袋の中から、黄金の玉白銀の玉が、瞬く間に土間に山を築く、繭の取引である、その軒先をスキと燕が飛ぶ。西武の地方は今將に繭の集散で、日に日に活況を呈して來る、その忙しい田園の情景を外に私の乘つてゐる自動車は、半日を近郊の遊覽に費すべく走つてゐるのである。

兒玉の街を右に折れると、官幣中社金鑽神社への縣道である、兒玉七黨の據つてゐたといふ難關の城址を右に見ながら進むこと七八町、金屋村小學校から更に右に折れて、保己野付に急いだ、いふまでもなく鄕土の大偉人塙檢校の生家を訪ね、その墓に詣でたい爲めである、部落に入つて間もなく左手に見えるの

が、此の不世出の偉人の生家、それより一寸進んで、先づ檢校の墓域を訪ねた、一行は私の兄二人と、姪の配偶、次兄の四男坊とである。

檢校の墓は僅かに四尺ばかりの根府川自然石で、これに『和學院殿心眼智光大居士』の戒名を刻み、傍に檢校が最も會心の作だつたといふ

言の葉の及ばぬ身には目にも見めなかなかよしや雪のふじの嶺

の一首を題してゐるこれは門人の屋代弘賢の筆である、屋代弘賢は有名な『古今要覽稿』の編者で、幕府の命によつて編纂した一種の百科辭書式のもの、その引例の廣汎なる、その詮索の周到さ、如何にも檢校の高弟たる實祿を示してゐる、それのみならず、編纂ぶりの『群書類從』に似通つてゐることも爭はれない、平常『古今要覽稿』に依り一方ならぬ便宜を得てゐる私は、弘賢の直筆を見て非常に親しみを感じた

そして今、塙檢校の墓域に於て、弘賢の眞蹟に接したのも、偏に檢校の引合せとしか思へなかつた。

その隣に檢校の事蹟研究を生涯の仕事としてゐる篤學者長田氏の寓がある、訪ねたが不在、それから庭傳ひに檢校の生家を訪ねた。

當主は萩原武平さんといふ、丁度鑷兒上簇の忙しい中を、シヤツツ、股引といふ姿でいろ〳〵と檢校の遺品を見せて下さつた、檢校が幼時、江戸へ出る時、生母が縫つて與へたといふ雲齋織の巾着、群書類從

編纂の功績により將軍家へ召された時の御召狀、遺愛の盃、遺愛の銅印、これには『一酌散千憂』と刻してある、この銅印は水戸文公から拜領したといふ思ひ出の深いもの、それから空前の大著完成の爲め、般若心經二百萬卷讀誦の覺え書、その他の古文書、何れも心ひかるゝものばかりであつた、それにしても此の地、かゝる偉人を出すべく、あまりに平凡な村のたゝずまひである。

庭の桑の大木の下には立葵が眞紅に咲いてゐた。

多寶塔

保己野を辭して自動車は更に西へと進む、絶えては續く西武の丘陵は、幾重にも皺を疊んで、その間に部落を鏤める、畑では矢張り麥の刈入れ、農家は養蠶が濟んで直ぐ麥の刈入れである、何といふ忙しさであらう、さうした家々の庭に栗の木が紐のやうな花を綴つてゐるのも面白い。

此の栗の花には一種の禪味がある、美しいといふのではないが、此の花の咲くのを見ると夏が來たといふ感じが犇々と胸に迫る、――長い花と圓い毛毬――この對照も興を惹く。

小砂利を敷いた縣道に不圖『諸車止』の制札を見た、氣轉を利かせた運轉手君が別の道を右に入る、このあたり一帶極めて密な小松山で、その赤松が腰を寰げて並び立ちさまが面白く、何處となしに百穗氏の

遺作でも見るやうな心地がされるし、山の下の水田となつてゐるのも面白い眺めである。

やがて金鑽山元三大師のお堂を右手に見ながら、官幣中社、武藏二の宮なる金鑽神社の社務所前に着いた。有名な特別保護建造物の多寶塔は參道の右側、約二十間ばかりの石段の上に建つてゐる。多寶塔といへば、直ぐに高野が目に映り、根來のが胸に浮んで來るが、こゝの多寶塔も忘るゝことの出來ない美しい感じを懷かせるのである。

記錄に依ると、此の塔は御嶽の城主阿保金隆が武運隆昌武運長久を祈る爲め建立したもので、塔の柱は に、『天文三年午八月晦日大檀那阿保彈正金隆本願』の文字がある、阿保氏は前の海軍大臣安保清種氏の祖先で兒玉黨の一族、丹の黨の一人、丹莊に地を構へてゐたが天竺の多寶如來を信仰し、これが爲め多寶塔を建立したものといふ。

塔は二間半四面で桶皮胴造二重圓高欄付、三手先軒二重乘木、中唐戸三ヶ所、脇欞子窓一ヶ所、屋根柿葺總丹塗で、相輪の頂上まで四十四尺六寸ある。

此の多寶塔の美しさは、初層屋根下、桶皮胴から上の組物の精緻を極めてゐることで、此の精緻の上を蔽ふ屋根の勾配のなだらかさ、更に綠の林を背景とした丹塗の魅力である、細かい建築上のことは、今ここで管々して記す要はない、此の若綠の中に、夢のやうに立つ塔の姿は將に繪であり詩である。

金鑽の靈社は先づ此の名物を以て來り詣づる人々を迎へるのである、社務所を訪ねた、あやにく官司金鑽氏は不在であつたが、社務所の人々は皆懇ろに迎へてくれて、何かといろ〳〵教へて下さつた、宮司はいま兒玉七堂事蹟の探究に餘念なく、近ごろ若泉村阿久原に兒玉七黨を祀つたと見るべき社を發見、その祭祀狀態から今日までの經過を調査し近く社殿建立の儀を訴へる筈だといふ。

兒玉七黨の遺跡は、此の金鑽神社を中心にそこここに散在し、更に探究の歩を進めたら興味は滾々として盡きぬものがあらう、私は此の宮司の計劃を興多いことに聞きながら、森嚴無比の拜殿前に額付く、拜殿のみあつて本殿のなき珍らしき大社、それは日本に僅か三社しかないこと既に知られてゐるところである。

私は兄とその四男の三人で御嶽に登つた、僅か三町といふけれども、五六町の思ひがする、頂上は眺望雄大で兒玉金屋青柳の村々から、更に鬼石、阿久原、渡瀨、八鹽神流川を挾む名邑が點々指呼の間に散在してゐる、其間の畑地や水田は、たとへば金銀の色紙を並べたやう、その中腹に有名な鏡石が横はつてゐる、古代花崗岩の大壁面で、面は磨ける如く、顔は映らぬまでも空を行く雲位はうつりさうだ、立つて耳を傾ける、鵯が鳴く、頰白が囀る、三光鳥が歌ふ、野の樂師や伶人たちはこゝを先途と合奏をはじめる。

水殿瓦燒址

青葉若葉の金鑽神社から、更に三波石に向はうとしたが時間が許さず、道普請で自動車が通れぬといふので、再び元來た道へ引返し更に兒玉町から史蹟保存物に指定された沼上村の水殿瓦燒址を訪ねることにした、こんな機會でないと一寸わざ〳〵見に來られぬと思はれたからである。

兒玉の町を途中から右に折れて、深谷街道を驀らに走る、黃ばんだ麥畑の間を自轉車に乘つた白衣の女學生が十人、二十人一隊となつて狹い道を進んで行く、その行く手から雀がパツと群れ立つ、この邊の女學生や中學生は皆自轉車を利用して學校へ通ふ、かうした風景は東京ではとても見られない、然も操縱は中々慣れたものだ、十五分ばかりで身馴川の新橋を渡つた、梅雨時といふのに、川には一滴の水もない、兒玉の文化は此の身馴川の流域と神流川の流れに沿うて進んでゐるとは學者の說く處、此の邊、こゝかしこに古墳が點在してゐるのも、何となく遠い上代を思はせるものがある。

自動車はとまつた、さゝやかながら美しい流れに沿うて史蹟記念物水殿瓦燒址の石柱が立つてゐる、進んで窯址を見た、見れば窯址には上家が建てられ四圍の硝子窓から內部が見られるやうにしてある、窯趾は一寸瓢形で一は大きく一は少さく、少さい方が窯で大きい方は火の焚き口であらう、火は四つの穴から

窯に送られて行つたらしく、その穴が歴然として殘つてゐる。

その傍には黒板博士の額で、柴田常惠氏の選文にかゝる石碑が立つて、此の瓦窯趾の由來を語つてゐる。それに依ると鎌倉時代のものと推定せられ、當時、此の一帶此處かしこに瓦窯があつて、盛んに製造された形跡はあるも、完全に殘つてゐるものは全國中第一に推すべきものであり、此の附近一帶から屢々形の面白い古瓦が發見されたので、遂に地主を說き發掘したわけであると、三四年前の話である、かうして四方硝子窓にしてあるなら發掘した瓦も陳列して置きさうなもの、それのないのは聊か物足らぬ感じがした。

瓦と文化……これは如何にも面白い研究である、瓦の我が國に傳はつたのは崇峻天皇の元年、瓦博士麻奈父奴、陽貴文、陵貴文等が來朝して傳へたと日本書紀に記してある、百濟は支那から傳へたものであらう、昔は多く茅葺屋根であつたが、神社や佛閣には早くから瓦が用ゐられてゐた、支那文明の傳へられたあとを一片の瓦に偲ぶのも興味が深い。

この邊水殿と呼んで、清冽なる流れがあり土も瓦に適してゐたとか、武藏國國分寺の附近から出る古瓦に子玉と銘のあるのは、實に此の兒玉から燒かれたものだといふ、あの鎌倉の五山の文化も此のあたりから運んだ瓦の下で發達したかと考へると、一しほ興味も深くなる、さうなると、傍への流れも折角美しい水

でありながら、底に芥を沈めて置くのが惜しくも思へる、竣渫して美しい砂利でも川床に敷いたら、どんなに遊子をして喜ばしめることであらう、こんな事をとめ度もなく考へながら、私は此の變つた一史蹟を辭した。（昭和十年六月二十一日都新聞）

飛騨の笹魚

上高地から、飛騨の平湯へ出るには、中の湯から安房峠を越さねばならない。

馴染の深い梓川の溪谷を離れて、愈々中の湯から安房峠への道を辿る、何となく風物に名殘が惜しまれて、幾度か過ぎて來た谿谷の方に眸を向ける。

時々靜寂を破る爆音、それは中の湯から、飛騨へ通ずる新道の開鑿で、岩石をダイナマイトで碎く音である、五米突位の美しい道路は、既に一二町ほど出來てゐるのであるが、忽ち材木で塞がれて、そこには危險ですから山みちをお通り下さい

と書いてある、その道しるべに從つて左手の山みちを辿る。

山みちとはいふものゝ、それはほんの一時的につけた道だから、僅かに片足をのせる位に土が均らしてあるばかり、そこを杖を頼りに踏みしめ踏みしめつゝ登らねばならない。その道の險しさ、忽ち手の甲から腋の下、それから背部へと汗の流れが氣持を惡くする、帽子を脱いで、涼風を入れると、雫になつて中から滴る。

一登り登ると、そこに『峠へ近みち』と木札がブラ下げてある、見ればこの邊一帶、丈けなす隈笹の原で、僅かにそれを刈つて道が通じてあるので、切口が下に向いて、丁度針鼠の針のやうに逆立つてゐる、危險此上もない。

俄か造りの險路十五六町、漸く舊道になると、道はやゝ平になつて、四方の山彙が初めて目につく、今までは道の險しさに心を奪はれて四方を眺める餘裕すらなかつたのだ、道が平になつて、足許に安定がつくと、附近の植物地帶などが、はつきりと眼に映つて來る、道のべに紫の鈴をふる姫しやじん、夢のやうに傘をひろげる、ししうどの花、紅白の粒々した花をもつ溝そばの群落、それらが代る代る道を彩る、そしてまた鬱蒼と繁る樹の間からは、鶯が、けたゝましく調子を高めて鳴き出す、ギア〳〵と吐き出すやうに鳴いて、枝から枝へ移るのは樫鳥であらう、不圖、此方の樹には、柄長が面白さうに、枝から枝への曲藝を見せる。

一時間半ばかりで、漸く峠の頂上へ着いた、山また山に圍まれてゐるので、更に展望が利かない、切株に腰かけて一休みしてゐると、裏白樅の大木の梢を異形の雲がフワリ〳〵と動いてゐる、この雲を浮べた空は些の濁りもなく澄み切つて、コバルト色だ、こゝに岐阜縣で立てた里程表がある、岐阜縣では非常によく行屆いて、到る處に里程表が立てゝある、見れば平湯までまだ四粁、二時間かゝると記してあつた。

白樺の杖をたよりに、また一しきり駈け下りる、急勾配なので、かけ下りるといふより寧ろ辷るといふ有樣だ、徑は九十九折に曲り曲つて、綠の中から綠の中へ拔ける、不圖小さい人家が見えた、木樵小舍かそれとも休み茶屋か、灑なす汗を拭ひつゝ、一目散に人家をさして駈け下りた。

それは正しく小舍であつた、見れば私より一足先に越えて來た二人の學生が、他愛もなく寢そべつて、疲れを休めてゐる、案內者は晝食を認めてゐる、傍へにゴム印一個が轉がつてゐるので、取りあげて見ると、『安房小舍』とある、日本アルプスを背景に、アルペンストツクを橫へた意匠のスタンプである、スタンプの流行は、こんな山奧にまで浸入して來てゐるのである、生卵二個を啜り、谷川の水を汲ませて心ゆくばかりに飲む。

飛驒路くれば峽より峽に湧きのぼる雲も珍らし水もなつかし

峠路は小笹篠原かや千ぐさその奧の奧にうぐひすの鳴く

一休みして小屋を立つ、ここから四粁といふ道を辷るやうにして漸く平湯の不動道場といふのに着いた。

峰から集る水は一つになつて、奔流となり飛泉となり、それが當つて碎ける、岩の一方を切り開いて小舍を作り、そこに乘鞍嶽の不動を勸請し、蓬髮長髯の堂守が、頻りに小さい庭の掃除をしてゐた、餘り興も唆らぬので、一刻も早くと、船津屋といふのに靴を脫ぐ。

此の平湯は高山を東に距る八里の山奧で、溫泉は硫黃岳と乘鞍嶽の兩方面から引いてくるらしい、二十五軒の平和な山村で、浴客はその部落の中央の共同風呂へ、手拭肩にして入りに行くのである、私の泊つた家のみ僅かに內湯があるのだ。浴槽に入ると、直ぐ窓の外が靑田、その靑田を前にして、笠が嶽と錫杖ケ嶽が仰げる、蝗が硝子扉に飛びついたり、靑田を渡る風の浴槽に來るのも珍らしい。

山村だけあつて、土地の人は純朴である、つひ安房峠一つ越えた上高地方面には、ハイヒールにハンドバツクといふモダンな女が、男とスクラム組んで步いてゐるのに、處女地のやうな感じである。

一風呂浴びて二階の一室に陣取ると、何處かで長唄の『秋の色種』を彈いてゐる。それがボコ〳〵三味線で迎も大さうなものである、宿のものに、土地に藝妓でもゐるのかと聞いたら

『いえ、湯治のお客樣が、お慰みにやつて居られますので……』

といふ、日はまだ高い、私は駒下駄をつつかけて乘鞍の大瀧を見物に出かけた、形の美しい瀧であつた。

翌朝、私は宿の主人に、『平湯には昔から、名物の笹魚がある筈だ、何處へ行つても見られぬが、今は無いのか』と聞いたら。

『昔はよくあつたものですが、今は少くなりまして……』

といふ。

笹魚といふのは、竹の梢に筍のやうな形のものが出來るのだ、それは老いた竹でなければ出來ない、此の平湯から、平湯峠へかけては、それが多いので、昔から有名であり、此の笹魚が谷川に入つて岩魚となつたといふ傳說もある。故杉孫七郎子爵が、此の地にこれを獲て、畏くも明治天皇の天覽に供したこともあるし、

谷川の水やこしけむ飛驒の山小笹に魚のおひいでにけり　東久世通禧

めづらしき飛驒のささ魚ささといふさかなにも見む飛驒の笹魚　小杉榲邨

などゝいふ歌もあり、古い隨筆にも遺つてゐる。

主人は私が笹魚の話をし出したので非常に喜び『今は減多にありませんが、幸ひ此の間山の案内が探して來たのが一つあります、旅の記念にお持ち歸り下さい……』と、神棚から出して來た。

私は非常な懷かしさを以てこれを眺め、その厚意を謝しつゝ一首

これやこれ飛驒の笹魚ささなみをくぐりて魚となるてふものを

そして、鞄に收めながら高山行の自動車に乘つた。(昭和十年八月二十九日)

式根島

黑潮……黑潮……もの凄い程魅力のある潮の色だ。海鳥が、船の直ぐ際を、緩やかな曲線を描いて飛んでゆく、空は櫻の木の肌のやうに、雲が幾十筋となく横に裂けて、そこから曉の色がさしこむ、船はボーツと間のぬけたやうな、だが底力のある汽笛を鳴らした。

伊豆の式根島に着いたのである。

僅かな勾配を見せた丘の左右が横に流れて、松を主とした森林帶が續き、その下に白く見えるが今度出來た溫泉ホテルだ、そして船の周圍に張りめぐらされた紅白の段々幕は、此の島開闢以來の盛事たる、ホテルの開館式を飾る唯一のもの、これが外なら直ぐ一發煙花でも打揚げる處なのだが、そんなことのないのは、如何にも大洋の眞唯中の島らしい。僅かな灣をなしてゐる足附の入口には、斜に材木を立てかけたやうな三角形の島が二三横たはつて外からの波を防ぐ、そして島の上には形の面白い松がおどろ髮のやうに生へてゐる。

七月五日午前六時十五分、船が着くと、島が俄かに活氣立つやうに見えた、島中の老若男女が濱邊に集

つて、我々の一行を迎へるのである。

隱かといつても、黑潮の太平洋だ、その波のうねりを越えつゝ我等の艀は本船橘丸の乘客を乘せて幾度か往復しつゝ客を運んで行く、私達もその幾回目かの艀に乘つてやがて本船を離れたのだ、流石に海の子の漕ぐ船、モーターはあつても艪を利用して、巧みに岩と岩の間を濱に近づく、その送り迎へる小島の面白い岩の上に何やら、オレンヂ色の花が見える、近づくとそれは野生の透し百合で、僅かな岩の裂目に根を托して、美しい花を開き、丁度松のおどろ髮を彩る簪のやうでもある。

私は十畝書伯と共に、東京灣汽船の鈴木氏に迎へられて、群れなす島の人々の中を、先づホテル階上の一室に陣取つた。ここの眺めも面白く、我等を送り迎へた岩の間から、新島が臥牛のやうに横はつてゐる。

◇

式根島はもと新島に續いてゐた、それが中世地震の爲めに中間が陷沒して二つの島となつたのだといふ初めは人家もなく、漁船が風波を避ける爲めに寄つた位であつたのが、何處か此處に天然の靈泉の湧出することが知られて、忽ち人家が建ち、移住者も出來、今日では全島四百の人々が生活し、足附、小濱野伏といふやうな港も出來て兎も角も、一つの島をなすに至つた、その溫泉ホテルの直ぐ南、一丁程の處にあるのが足附の溫泉である、溫泉といつた處で、海岸の岩の間から湧出ずる天然風呂、人々は干潮の時を見て、こゝに浴しに行く、溫泉に浸りながら海風に吹かれて、新島や、地内島や、それからその間に點在する島々を眺めるなど、成る程一興だ。

ホテルを出て私は、此の足附の湯場に出かけた、道伴れには花道家の原田欣華君が居る、もう既に湯は同船の人々に占領されて、賑やかなこと、とてもその中へ割り込めない。

するとホテルの案内人が來て、地奈多の湯へ案内するといふ、地奈多の湯といふのは、足附から直ぐ背後に横はつてゐる板崎の鼻を隔てた岩の岩の間に湧いてゐるのである。

近道といふので、草原を掻き分けて進む、茅萱の中に、雜木の幹が勢のよい處を見せる下には椿の若木や、かくれ簑や、定家かづらなどが生茂り、海岸には葛が這つて、そこには淡紅色の花を開いてゐる、椿の葉の光澤光澤した鮮かな綠の色＝これでこそ眞の『つや葉木』である。

道は丘の上に出た、こゝには猫額大の耕地が拓かれて、西瓜の蔓が地を這つてゐる、南瓜が黃金色の花を開いてゐる、榛の木の自然の枝を折り撓めて生き垣にしてゐるなど、此の島でなければ見られない。

頰白が啼く、姿は見えない。

颯と風が赤松の梢を渡る。

道は忽ち斷崖の一角に吾々を導く。

『あそこが地奈多の湯です……』

案内者は、遙かに彼方の斷崖の間を指した。成る程、既に少さい人影が見える、道は削つたやうな斷崖を一歩一歩と下つて行くので、此の風景が中々面白い、まるで繪だ、物凄い繪だ。

地奈多に出た、今までの斷崖は三方に開けて、前は渺茫たる太平洋、その起伏してゐる岩の間からは、沸々と溫泉が湧き出してゐる、鹽類泉だが、鐵分を含んでゐるので、溫泉は鐵錆色をなし、岩垢がぶよ〳〵と浮いてゐる、氣早に飛込んだ人々が。

『オヽ、熱つ……』

と叫んでゐる。

何といふ雄大な、そして怪奇な溫泉だらう、凄いのでは、北海道の登別の地獄池や、別府の血の池等もあるが、こゝは凄いといふより、雄大であり、怪奇である、全く他には見られぬ異風景である。不圖私は岩の上に脫ぎ棄てゝあつた女の着物を見た、冷飯草履が一足既いである、それは此の島の少女が、身の病を治す爲めに靈泉に、浴してゐるのであらうと思つた。

果然、岩と岩の間に、顏の靑白い少女の姿を見た、少女は一人靜かに靈泉に浸つてゐたのに、時ならぬ

多數の侵入者に驚かされて初め自分が浴してゐた場所を讓り、一人岩陰に引込んでしまつたのである。

『何に效くの……』

少女に問うて見たが返事はない。

◇

地奈多の溫泉＝それは式根島唯一の樂園である、たとへ水は水錆に赤くなつてゐても、自然の溫もりは島の人々の體を程よく包んで、病めるものは救はれ、惱めるものは慰められ、疲れたるものは休められただから島の人々は、いふに及ばず近い島々、遠くは三宅八丈あたりからこの溫泉に浴するのを唯一の樂しみとして、やつて來た、此の島の人々は勿論十二三町もある遠い所を、夜は提燈一つで、此の斷崖を下りて浴するのである。

併しそのやうな勞も、湯に浸つては自から忘れる、そればかりではない、南の島の澄み切つた空に磨いたやうな月の下に、此の靈泉に浴する神祕な氣持は？……

こんな事を考へながら、私はその痩せた少女の身の上などを想像して見たりした、

『何といふ寂しい顏だらう』

取り留めのない想像空想、それを神祕的な靈泉と結びつけて、何だかそこに潛んでゐるローマンスでも

探したい氣分になつた時、遙かの斷崖の上から、又同船の一團がゾロ〳〵と下りて來た。

ホテルが出來て、航路が開けて、やがて此の別天地にも黎明が來た。島はこれから拓けて、昔のやうな夢の國は消えて行くのだらう。

私は新島行の時間が迫つたので、急いて此の別天地から足を外へ向けたのである。（昭和十一年七月七日）

お花畑に立て

車の轍に押しひしがれた蓬の、草の姿はとうに失はれながら、なほその香をとゞめるとは、我が王朝時代の文學に、初めて官能の働きを見せた清少納言の『枕草子』の一節である。

その敏きこと電の如く、その細きこと針の尖のやうな神經の働きは、それが鋭ければ、鋭い程、一方に疑ひ の芽を育てる、併して遂には我れと我が視力にスクリーンをかけ、我と我が耳の鼓膜をも責める。

併しながら、かうした心の疑ひ、官能に對する意識の反抗が、何ものをも釀し崩さぬ前、既に全くその美に撲たれ、その神祕に慴伏さしめるものがある、それは海拔五千尺以上の高山に見るお花畑である。

立山連峰を大なるバツクとして、山の精の粧ひを凝らした五色ケ原、二里に近い大雪溪のタイトルから、俄かに局面を一轉させて、人の眼を奪ふ白馬の葱平、あるは神工鬼斧、見るだに五體慄く斷崖の下、金色の氈を布く八ケ嶽のお花畑、かうした天地には、下界に見ることの出來ぬ珍らしい草や木が下界では見られぬ色彩を以て飾られてゐるのである。

一度これに接した時、唯自然の大なるを知つて、人の身の少なるを思ふ、そしてその小なる人の身に集

喰ふ官能の働きを自ら嘲る。山姫が巧みを凝らした狹霧のカーテンは、山の谺の響に開いて、艶やかなステージは現はれる、紫に咲くは千島桔梗うるつぷ草、おやま龍膽、白馬あさつき、紅きは何、小鬼百合、駒くさ、おほさくらさう、雪わりこざくら、黄金色はちんぐるま、長之助、みやままんねんぐさ、高根きんぽうげ、白きは、はくさんいちげ、たうやく龍膽、おさばぐさ、つまとりさう、丈高きもの、低きもの地を這ふもの岩にすがるもの、實にそれ〴〵の色と光澤を見入る時は、色彩は一つ一つ美妙なる韻律となつて、名曲の中に現はれてくる一つの交響樂となる。

けれども、此の花の中には、他との群生を嫌ふ種屬がある、白馬ケ嶽から鎗ケ嶽、杓子岳に向ふ時、心して足許を見る時は、スレートのやうな雲母片岩の間から、駒草が面はゆげに咲き出て居るのを見ることがあらう、駒くさは高山植物中のスターである、他と離れて、獨り此の中に立つ風情は、世にも妙なる獨唱家が、今し得意のソプラノに張切つた努力を現はす、それにも比さうか。

曲目はまた變つて、こゝは高山の奥、たまさかに見る黑百合の花に、ステージはオペラの氣分になつてしまう、佐々成政の愛妾早百合、その優れた容色が他の嫉みを買つて、小姓竹澤熊四郎との浮名を立てられる、百方身の明りを立てたが、寵深ければ憎しみも深くこれを聞いた成政烈火の如く憤つて、二人を殺したのみか、一族十六人を罪に處した。

臨終の際に早百合の形相凄じく、『立山に黑百合咲かば、佐々の家は亡びやう』と、その後、豐太閤が北野の大茶の會に、淀に獻じた珍花黑百合が身に祟つて、五尺の軀の置き處なく、果ては雪の佐良佐良越えとなつて關東に走つたのは誰が爲めであつたらう。

黑百合は、今も立山にはよく見受ける、そして必らず此の物語を聯想せしめる、我々はかうして、お花畑の中に立ち種々の想の糸を繰る中に、狹霧のカーテンは、拍手ならぬ溪谷の谺の中に、音もなく垂れてしまう。

落葉を語る

一

宵のころは、まだ左程でもなかつた風が、夜半から曉へかけて、一しほ勢ひを增したので、颯と吹いて來る度び毎に、裏の梧桐の葉が、バサ〳〵と亞鉛板の屋根を叩き、それがまたカラ〳〵とかすかな音をさせながら庭に落ちる、間もなく一しきり、枝と枝の擦れる音、長い葉柄の基が豆太鼓のやうに屋根にぶつかる、時折その音に夢を破られ

『明日の朝は庭が落葉に埋まつてゐるだらう……』

など〻考へながらまた眠るともなく眠つてしまう。

落葉の風にころがる音、それは、かなり寂しい感じのものである。

カラ〳〵と這ひまはる度びに音を立てるもある、枝から離れてバサリと大きな音を立てるのもある、音も立てず、響きも殘さず、自然に敷り散く寂しいのもある、カラ〳〵と音を立てるのは、楢や櫟、榎、欅

の類で、これらの葉は、銅色にクル〳〵と卷いて、それがころ〳〵と轉がつて行く。

その音を聞いてゐると、何時も薄田泣菫氏の『あゝ大和にしあらましかば』といふ『白羊宮』中の一篇を思ひ出す。

日は木がくれて諸とびら
ゆるにきしめく夢殿の、夕庭寒に
そそ走りゆく乾反葉の
白膠木、榎、楝、名こそあれ
葉廣菩提樹
道ゆきの、さざめき語に聞きほくる
石廻廊のたたずまひ

といふのがその一節である、落葉のさざめきはこのやうに『日は木がくれて』からが趣きが深いが、それよりも夜半から曉へかけて床の中でじつと耳を澄ますと、一層その感じが深い。

そして、これらの葉の囁きは、怨むが如く、喞つが如く、時にはすすり泣くやうにも聞える。

處が同じ囁きでも、アメリカ生れのチューリップや、プラタナスはひそ〳〵とひそめきあふのではなくて

聲高に無遠慮に、賑やかに、アスフアルトの街路の上を囀りつゝ行く、ここに近代的の色と音とが潜む。

鋭く大きな音を立てるものに梧桐があり、油桐があり、朴の葉がある、桐の葉は大きく、重く柄も太いので、時が來れば、その重さに堪へられず、風をも待たず落ちて來る。凡兆の句に

桐の葉の風にかまはぬ落葉かな

といふのがある、その通りである、『一葉落ちて知る』云々といふ古い言葉は、矢張り桐が一番適切である、但しこれは梧桐ではない、油桐の方である、梧桐は油桐より葉が薄い、重さも輕い、だから油桐より一足遲れる、そして、此の方は風のまに〳〵容易く舞ひ上り、舞ひ下り、時に思はぬ遠くの方にまで運ばれることもある、朴の葉は厚く、そして大きいので、遠くへは飛ばず、しづかに散り敷く寂しい姿である、櫸はその色が錆びて、乾反つて、時に蟲喰まれながらも、容易に地に落ちない、落ちる時には、あとに若い芽が育つてゐる、この仲間に山毛欅がある。

音もなく散り敷くのは公孫樹である。眼覺むるばかりの華美やかさを見せるが、風が來ても大して飛ばす散らず、地に姿を委したまま、だん〳〵と色が褪せて白味がかつて行く。智月尼の

わが影のそれかとのぞく落葉かな

の寂しさが、この場合ぴつたりとあてはまる。

二

夜が明けて庭へ出て見ると、果して庭は落葉に埋もれてゐた、地上一面を褐色にしてしまつて、なほ飽き足らず、青木の枝にも、檜葉の梢にも、山茶花の葉の上にも、洋傘をつぼめたやうな形して、梧桐の葉が引つかかつてゐる、その上から、また梧桐の實の船が、クル〳〵と舞ひ立ちながら落ちて來る、その葉を一つ一つに見ると梧桐が一番多く、その中に櫻、柿、木蘭、朴、柳、ポプラ、それに細かい檜の古葉が粉のやうに交つてゐる、掃いても、掃いても、あとから又、バサリ〳〵と落ちて來る、不圖

掃きけるが終には掃かず落葉かな

といふ太祇の句が偲ばれ、また

柴の門しばしたゞずむ足もとをの木葉に埋むひと嵐かな

といふ井手曙覽の作を思ひ出した。

私はその足許の落葉の中から、櫻の葉一枚を拾ひあげた、庭には勿論、このあたりに一本の櫻もないのに何處から舞ひ來つたのであらう。見れば、その葉の半ばは印度更紗のやうに色づいて、自然と蝕ばまれたあとが、不思議な文樣のやうに見える、その紅も唯の紅ではない、南の國の人々が自然から敎へられた貴い植

物染料で、、暇にあかして染めあげ染めあげた色である、パツと目覺めるやうな華やかさはないが、何處となく捨てられぬ味はひのある紅の色澤である。

櫻落葉、櫻落葉は昔から歌にも詠まれ繪にも畫かれてはゐるものゝ、此の日ほどしみじみと眺め入つたことはない、春の花の散り際を讃美しながら、何故に此の一葉に籠る不思議な色彩を眺めぬのであらう。

柿の葉をまた一枚拾つて見た。

これはまた櫻にも增した光澤をもつてゐる。そしてその一部に染出した紅の色も、渥丹や、茜のそれではなくて、將に猩臙脂の色である。それに柿の持前である光澤が豐かなので、丁度美ごとな金唐革の色である、猿手か百合手か人形手か、これにも自然に一種の文樣が染め出されて、その緣は、燦びやかな金色に粧はれてゐる、將に遠い遠い、葡萄牙の貴い工藝の一つとして殘された此の金唐革の味ひだ、更に一枚を取つて見る。

これは蟲につかれて、そのあとが黑く怪しい古代文字のやうな形となつて、模樣が殘つてゐる。

『何處の國の象形文字であらう……』

柿に文字を墨で書き、紅葉するのを待つて墨を消すと、生地のまゝに文字が殘る、支那の風流人はこれを自然箋といふた。

いま柿の葉の、この不思議な文樣に、私はじつと眺め入つた、立羽不角の定家の手を出す閨の落葉かな

は、こんな心持ではなかつたらうか。

朴の葉には、櫻や、柿のやうな美しさはない、併し一やうに澁い茶色で、やゝ厚味がかつてゐる處に、印傳の味ひがあつた、柔かい羊の革を名匠が練りに練り、鍛へに鍛へて作りあげた、この名品、それには何の模樣もなかつた、紋印傳でもなければ、繡印傳でもない、紹鷗や利休に好かれさうな無地印傳である。

その外に金泥の隈を取つた櫁や、そのかみの供奉の扇と其角の吟じた公孫樹、それに交つて松の散葉が細い線を加へてゐる。

三

もとの木を離れて、吹く風のまにまに散り行く木の葉を漂泊のおのが身にたとへて、悲痛な作を殘してゐるのは、佛のヴエルレエヌである、その『秋の歌』は將に落葉を歌つた絶誦であらねばならない。

我が國で、よく落葉を歌つてゐるのは西行法師である、ヴエルレエヌと西行法師と、その性格はまるで違ひ、その藝術も全く趣きを異にする、併し一脈相通ずるものは漂泊であり、放浪である、唯彼れは熱情と、

奔放の上の漂泊であり、此は自然をと友し、經律に親んでの上の遍路である、ヴエルレエヌが頽唐的な生活に詩を求めつつある間に、西行は

あらしはく庭の落葉のをしきかなまことの塵になりぬとおもへば

と深い深い宗教的意議から、人生を達觀して歌つてゐる、ここにその相違がある。

例の本願寺名物として傳へられた關寺の落葉の色紙の如きも、法師が絶誦の一つであつた。

繪畫の中では、先づミレーの作を擧げねばならないミレーが自然の深い憧憬者であり、田園の讃美者であることは、今更いふまでもない、かうした詩人的性格の彼には、落葉の如き、眞に打つてつけの好畫題であつた。

暮れてゆく秋の野末に、四人の少女は山なす落葉の前に立つて、その色とり〴〵の落葉を眺めてゐる、彼方の庭から、此方の野から、手に手に運び來つた落葉の如何に色や形のさまざまなる、その一つ一つ、そのかみの思ひ出を祕めてゐるのであらう、これはマンチエスターの美術館に藏せられてゐる彼の代表作の一つである。

我が國で落葉を畫いて、近代に名を成したものに菱田春草がある、櫟や、楢の雜木林に、落葉は積つて地を蔽うてゐる、無心に遊ぶ日雀や四十雀の精妙さ、それは此の落葉を悉く有情のものたらしめてゐる、心に詩

なくてはこの種の藝術は生れない。

更に落葉を畫いて心ひかれたものに、下村觀山の『しぐれ』がある、加茂の社の森の一隅時雨のあとの行（には）潦（につみ）はまだ乾かず、烟るが如き薄靄の中に、はら〳〵と落葉は散つてゆく、何といふ靜寂な光景であらう、由來時雨と落葉は、文學的に因緣深く、藤原俊成は

まばらなる槇の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらむ

と歌ひ、源頼實は『續拾遺集』に

木の葉散る宿は聞きわくかたぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

と詠じてゐる。この外、時雨の落葉を叩くかそかの音に詩情を動かした詩人は幾人あるか知れない。

その音を聞きわけて、これを繪にしたのがこの觀山の『しぐれ』ではなかつたか、此の有情の畫人も逝いて今は亡い。

落葉といひ、散り葉といひ、病葉といひ朽葉といふ、その用ひどころこそ違へ、これぞ此の植物の一つの生態的變化に昔の文人や歌人か與へた數々の名である。

そして、その葉の一片一片に、此の言葉の一つ一つに、彼等はその永遠の生命を託した藝術を遺してゐるのである。

から思ふと、落葉に無量の感慨が湧き、愛看の念を生ずる。

又しきり、木枯は落葉を伴つて吹き荒んだ、私は庭に立つたまゝ、その散り敷く落葉を見入るのであつた。

（昭和五年十一月二十八日）

鐵線花を模様として

懷月堂筆

（鐵線とかざくるま參照）

鐵線花と風ぐるま

昭和八年の晩春のこと、ある家で、床の間の竹の花入に、唯一輪の鐵線花を挿し、その花の姿と、蔓の形とが何ともいへぬ風情があつたので、私はやゝ暫くこの花に見恍れてゐたのであつた。

晩春に咲く花の中で、私は此の鐵線花が非常に好きである、花の色の六瓣が、如何にも形よく、薄紫の色あひが肅やかで粹であり、鐵線といはれる蔓の出方も面白く、その伸びながら描いてゆく曲線美が、一層此の花の興趣を深からしめてゐるのである、挿花の席で此の花を眺めると親しい友達にあつたやうな感じがしてならない。

すると、それから二三日して友人の畫家水上泰生氏にあつた、そして氏から

『今度ある展覽會に、自分は鐵線花を畫いて見たい思ふがどうか……』

と相談をかけられた、元より異論のあらう筈なく大賛成で、その旨を答へると、

『まアそれなら一つ、僕のところの鐵線花を見てくれたまへ』

といふ、庭下駄を突かけて、案内をしてくれるので、ついて行くと、裏の日あたりのよい所に、一間ばかり特に垣根が出來て、これに鐵線が縱横に蔓をのばして、無數の蕾をつけてゐる。

「咲いたら、きつと美しいだらう……」

といふと、氏は

『咲いて、それを繪にする時のことを思ふと體がむづ〳〵するほど嬉しくなる……』

といふ、私は不圖、その前に見た、床の間一輪の鐵線、それを挿した主人も、そんな氣持で挿したのではなかつたかと思はれた。

◇

『鐵線花、寛文八年渡來す』

これは故白井光太郎博士の『日本博物學年表』に記すところである、寛文八年といふと、今から二百七十年ほど前になる、この年には、この鐵線花ばかりでなく、黑船つつじ、扶桑華、唐つつじ、阿蘭陀石竹などといふ、いろ〳〵のものが支那から長崎へ渡つて來てゐる、新しきを喜び、奇を好むともがらは、我れ先きにと此の珍らしい、美しい花を弄んだらしい、芭蕉翁にも

散らば散れ千里一風の鐵線花

の一句がある、芭蕉翁は、此の花が渡來したといふ寛文八年から二十七年後の元祿七年に浪花の花屋仁左衞門の宅で、數多の門人に圍まれながら、五十一歳を一期として、永い眠についてゐる。

不思議でならぬのは、京都の天球院にある有名な山樂の鐵線花の襖繪である、山樂は、寛文八年から更に遡ること四十一年の寛永十二年に七十七で世を辭してゐる、して見ると鐵線花はその以前既に渡來して居たのであらうか。

そんな詮索はどうでもよい、此の花の渡來してからの我が藝術界の喜びはどうであつたらう、その花の美しい姿を眺めては、居ても起つても居られず、我れ先に繪にしたり、模樣圖案にしたりした。

あの太い線の中に、纖細な模樣を盛り込み裏とした氣品を備へる懷月堂の浮世繪に、何と鐵線の花の多いことよ、それも唯に、蔓をからませたり、花ばかり拔き出したりしてはゐない、或は肩から打ちかけて見たり、圓窓の中に纏めて散らしたり、ありとあらゆる技巧を凝らしてゐるではないか、菊唐草といふ異名さへその頃に生れて——。

◇

鐵線花は六瓣を普通とする、これは正しく支那が原産地で、『植物名實圖考』にも

鐵線草、宗圖經外類、生饒州、治風腫、消毒、餘至彼訪之未得。

とある、此の饒州は朝鮮といふ說もある。

ところが、これと形が殆んど同じやうで、八瓣のものは秩父邊にも自生を見られるといふ、此の方には、

風ぐるま　といふ別の名がついてゐる。美しさは勿論勝り劣りはない。

私は數年前、秩父を歩き、岩戸觀音に詣でた時、一農家で此の風ぐるまの垣を見た、細竹の四つ目に、それは犇々と臺をからませて、或は直ぐに、或は斜に、その葉の布置おのづから體をなし、その處々に無數の花をつけてゐるのである。

こんな風情の繪を、曾て故人の平福百穗氏の作に見たことがあるが、花の色があくどくないので數が多くても邪魔にならない。上蔕の被衣でもひろげたやうに思へた。

その時の印象を深くせしめたものは、唯に此の風ぐるまの垣ばかりではなかつた、その垣の中には燃えるやうな牡丹が一株、十數輪の花を捧げてゐたのである、元より無心の農家の庭のことである、茶趣味がある でなし文人趣味を求めるでもない、唯かうした巧まざる對照が、何ともいへぬ美しさを感じさせ、純な氣分で受入れられたのである。

勿論、その庭には、他に花は見なかつた、こゝに若し、マガレツトや、カーネーションでもあつたなら、私の此の感與は忽ちにして破れてしまつたのであらう。

山伏の隱居や垣の鐵線花

こんな氣持も、鐵線花なればこそ、風ぐるまなればこそである。

盧元

それから間もなく泰生氏の鐵線花の作は出來た。

花は再び生命を新にしたのである。

玉蟲の色

私は一匹の玉蟲を手にして、飽かずその甲の持つ美しい色彩に眺め入つた。

『何といふ美しい色であらう……』

紅と綠と黑との堅縞、それが悉く金屬性の光澤を以て虹の如く輝いてゐる、蟲のかうした美しい色彩は、いふまでもなく、その異性に對する魅力となるのであるが、それにしても自然が與へた美しさは、とても人工の如何ともすることの出來ぬ深みのあることを思はせる。

かうして玉蟲の色に恍惚としてゐる私の眼には、忽ちあの法隆寺の玉蟲の厨子が映つて來た、典雅譬ふるにものなき、あの蜜陀繪の貴うさもさることながら、周圍を飾る金銅唐草の透し彫にした意匠その透し彫の底には此の玉蟲の羽が、幾百千となく貼られてあつたことを思へばその當時はどんなに美しいものであつたらう、そして、此の飾りにする爲めに諸國に令して玉蟲を捕へしめた有樣などが目に浮んで來る。

何處の國の玉蟲は羽色が殊に美しいとか、何領の玉蟲は光澤が一だんと勝つてゐるとか、玉蟲捕りの人々は我れ勝ちに澤山の玉蟲を捕へて持ち込んで來たことであらう、貴き推古天皇の御厨子を飾る料となると聞

いては、慾得を離れて此の玉蟲の捕獲に、人々は奉仕の誠を披瀝したに違ひない。

玉蟲を裝飾に用ゐた例は、此の厨子ばかりではなかつた、朝鮮でも盛に行はれてゐた、慶州金冠山から發掘された馬具にも、澤山の玉蟲の羽が使はれて居り、今も燦たる光彩を放つてゐるとの事である。

學者は、法隆寺の玉蟲厨子に、凡そ幾百千四の玉蟲が使はれたかを丹念に研究した、元來此の蟲、普通の甲蟲とは違つて餘り數の多いものではない、それをかく澤山集める苦勞は誠に並大抵ではなかつたらうと思はれるのである、かう思ひながら、玉蟲を眺めて居たら、不圖こんな想像が浮んだ。

某の娘であつたか、世間の人々が、爭うて玉蟲を探してゐるので、つひ釣り込まれて探し求めてゐると庭の榎の木の枝に、何も知らぬ玉蟲は、そろ〳〵とその美しい翅を動かしながら這うてゐた、娘は喜んでその手を伸ばした、するとその樹のかげからも一本の手が現はれて、その蟲を捕うとする、不圖顏を見ると、それは日頃娘の心に描いてゐた男であつた、かうした緣から、娘は此の玉蟲を大切に大切に、その化粧筥の中に祕め、そして男に逢ひたい時は、そつと筥の中から玉蟲を出しては眺めるのであつた。すると必らずその人に逢ふことが出來た、それから此の蟲を鏡奩の中へ、或は衣裳の中に潛ませる習慣が生れた。

本草綱目曰、甲蟲也、背正緣有在甲下、人取帶之、令人喜好相愛、媚藥也。

と。

この蟲、その命を失ふても、甲の光澤はややしばらくそのまゝに殘る、正三位知家は、『新撰六帖』の中に歌ふて曰ふ。

はかなさは露よりけなる玉蟲のからをとゞめてかたみとやせん。

昔はかうして、玉蟲を裝飾に用ひ、更にそれは媚藥として、人に貴まれた、近江の玉蟲は殊に名高く、山城の山崎、攝津の有馬もその產地として聞え、その種類にも黑玉蟲、青玉蟲、黑星玉蟲等が數へられた。

玉蟲は元來他の蟲のやうに、餘り繁殖力が旺でない、それ故、少し濫獲すると忽ち絕滅に瀕してしまう、昔の趣味家は、かうして玉蟲のやうな小動物にまで愛惜の手を伸ばし、更にそれが他の動物にまで及んで行つた。

正倉院には、有名な止利佛師の鳥毛立女の屛風があつて、玉蟲の甲ならぬ鳥の羽毛が、巧みに使はれてゐる、自然の森や林の、枝から枝へと移り飛び交ふ小鳥の翼の美しさを見、池や湖の面、漣漪蹴立てて翔り立つ水禽などの妙なる姿を見ては、その食指の動くのも無理はなかつた、それ故、鳥の羽の巧みは、かうした繪畫や工藝のみでなく、その身を飾る衣裳にまでこれが使はるゝに至つた、鴉の濡羽も、大瑠璃の風切羽も孔雀の玉尾も、鴛鴦の思ひ羽も、それはそれ〴〵の特長ある色と形とを備へて、そのかみの人々の美的情趣を唆るに十二分でつあたからである。

人々の自然物觀賞は、かうして鳥の上に移つて行くや否や、少しでも美しい羽毛をもつ鳥類は忽ちにして捕へられ、だん〴〵と地上からその姿を消して行つた、鳥類が姿を消して喜ぶのは、今までこれに喙まれてゐた蟲どもである、芋蟲も尺蠖蟲も、毛蟲も、髓蟲も時を得顏に庭木を荒し、菜園を平らげ、果樹を擊み、穀菽を貪り、殆んど地上に綠のかげを見ることの出來ぬやうになつた、人々は始めて目覺め、こゝに鳥影を求める時が來たのであつた。

然し自然物の美に憧憬るゝ心は、まだ人の心から去らない、鳥の羽は忘れても、これに代るものを求むるこゝろは切であつた。

不圖海邊に阿古屋貝の片われを拾つた、その五彩燦ゆき虹色の光の美しさ、それは遙かに祖先が求めた玉蟲のそれに勝るものがあつた。

忽ち貝殼は、かうした新しい用途に活きて、服飾の一部に、机案の意匠に、あるは百濟緒琴の唐草模樣の中に、琵琶や箜篌の飾りにまで鏤入されるやうになつた。

玉蟲から螺鈿へ——

私は、古き工藝美術の美しさに見入る時、いつも、かうした經路で、世に螺鈿の藝術などが生れて來たのではあるまいか——と思つてゐる。

卵

場所は京都岡崎の動物園であつた。

禽舍の中の鳥の群れが、思ひ思ひの姿をして、それ〴〵異つた習性を見せてゐるのに興味を覺えながら、じつと中の鳥類を見て居ると、忽ち此の平和なるべき禽舍の中に、一大異變がもちあがつた。

それは外でもない、此の禽舍の中にクキーンのやうな態度で、悠々と群禽の中に立ち交つてゐた丹頂が、池の中からまだ生み落されて間もない家鴨の卵を發見し、それを長い嘴に啄んでやつて來たのである、此の丹頂が、君子のやうな顏をしながら、家鴨の卵を掠奪したのを素早く見つけたのは、同じ仲間の丹頂である、朋輩であるか夫婦であるか、それはわからない。

兎も角も一羽の丹頂がくだんの家鴨の卵を啣へて進むと、直ぐそのあとを追つて行つた、それと知つて、その丹頂は脚早に逃げ出した、すると此の有樣を五位鷺が見つけて、更にそのあとを逐ひはじめた。

五位鷺の次に白鷺も續いた。

鵠がまた何事かに驚いた風でそれに從ふ。ペリカンが動き出した。

忽ち丹頂を先頭にして、いろ〳〵の鳥が此の卵を奪ふべく追かけて、禽舍の中は忽ち大動亂の渦卷きとなつた。

丹頂は、發見者の衿り、掠奪者の威力、それを十二分に發揮して、これを他に奪はれまいと懸命になつて逃げる、するとあとの鳥どもに、丹頂がひとりで卵を占領するは怪しからぬ、割前をだせといふやうな顏付してこれを追ひかける。

まだ生み落されて殼も固まらぬ卵の悲しさ、さなきだに、鋭い丹頂の嘴に挾まれてゐるのであるから堪らない、丹頂が啣へて逃げる度毎に、その嘴に强い力が加はつて行く、忽ち卵は割れて、黄味が流れ出した、すると丹頂は、その黄味を狙つて頻りに長い嘴を以てつつき出した、仲間の丹頂は勿論これに長い嘴をさし出して來た。

丹頂が黄味を狙つて、卵の殼を投り出すと、五位鷺がそれを啣へて獨占しやうと走り出した、するとまた他の鳥どもが頻りにこれを羨んで、またあとを追ひかけてゆく、五位鷺が翼を動かして舞ひ上らうとすると白鷺が、これも翼を擴げて前に立ち塞がる、池の中へ入ると、今度は鴨の群れが、ギヤア〳〵聲を立てゝ追ひ廻す、五位鷺は再び陸にかけあがつた、丹頂の方では、半ば地に吸取られてしまつた卵の黄味を殘り惜しさうに頻りに嘴で突付いてゐる。

不圖見ると、前の五位鷺は、あまりに追手が嚴しいので、つひにその卵を落してしまつた、すると、それを素早く見つけたのが、貪婪な顏付した烏で、電光石火、卵を浚つて小さい松の木の枝に上つてしまつた、他の烏どもも一齊に松の木にかけ上つてしまつた、唯鴨だけが諦めて池の中へ入つてしまつた。

しばらく相爭つてゐた卵の殼が、烏の貪婪な嘴にかゝつてしまつたと見るや、皆諦らめたと見え、一羽去り二羽逃げ出し、烏のみとなつた、烏はしたり顏に悠然と卵を食べやうとした、しかし丹頂から五位鷺へ、五位鷺から烏へと、追ひかけ、追ひかけられてゐる中に、卵の中味は悉く流れ出し、黃味は旣に丹頂の餌になつてしまつたあとなので、殼の中には雫一滴も殘つてゐない。

折角自分の手に入れながら……

といやうな顏付して、烏は忌々しさうに、その殼を松の上から蹴落した。

私はかうした光景を見て、何だか人の社會の爭鬪を見せつけられるやうな氣がした。

黃味を味はつた丹頂は嘴先を泥だらけにしながら、半ば吸ひ取られた砂の中の黃味をまだ突ついてゐる、自分の生んだ卵を奪はれ禽舍の中にかうした異變を起させた家鴨は、何處を風が吹くといふた姿して、大きなお尻をふり〳〵餌箱の靑葉を漁つてゐた。

鋏の音

栂の尾の明惠上人をその創始者、開祖と仰ぐ松月堂古流の傳書に依れば、此の流派ではすべて苔がついたり、さるをがせの絡つたりする深山ものを活けず、庭砌原野の草木に限つてこれを挿すといふ、これは花道の性質からいうて眼にふれたものを剪つて挿すといふ意味で、挿さんが爲めに態々深山幽谷にまで踏み入つて、珍奇な植物を求むるには當らないといふことであらう、これは中々味のある言葉で、花の選擇といふことから見ても、一應は考へさせられることがらである。

だが時代は中々に、開祖や創始者のいふことがそのまゝ套習されず、松月堂古流でも、今日では、深山幽谷のものが盛に用ゐられて來た、さるをがせの下つた『とりとまらず』や、苔のついた『あらゝぎ』のやうなものまで時々見えるやうになつて來た。

蓋し、その流派の掟となつたことは、通常眼にふれてゐる一草一木に新しい技巧を吹き込んで、こゝに花道といふ一つの藝術を創造するといふことなのであらう、こゝに『茶花』といふ文字の味が出て來る。

◇

利休には、花の扱ひ方に對するいろ〳〵な逸話が傳へられてゐる、併し一輪の花を得る爲めに、一莖の草を剪る爲めに、甚だしい苦心をしたといふやうなことは餘りないやうである、唯、彼には天禀の機智があつて、其の折りに臨み、機に應じてこれを活用した丈けである、盥に桃の花のみをこき入れて、『桃花流水』と見せたなど、利休なればこそ人も許したであらうが、他の人がやつて、これほどの效果があつたであらうか、兎も角も、利休には、花の生命を摑むといふ素晴しい技術があつた、これを詩化するといふ得難い才能があつた、それ故、何も珍奇な材料を鷲の目鷹の目になつて探すには當らなかつた、佗助の一枝、一節切の掛花入、これ丈けで利休は立派に花を活かしてゐるのである。

茶花といふことが、今日どうしても忘られぬのは、その簡素の美を尙ぶからである、總てを簡素に、清楚に片付けて行く茶趣味の花の扱ひ方は、將に花道の奥の手でなければならない。

◇

だがこゝに一つの問題がある、それはその藝術的傾向に於て同じ、軌道を歩んでゐるのみならず、茶道の方でも切つても切れぬ緣のある小堀遠州の創始したといふ遠州流ではどうであらう、あの曲折した姿態の作り方、あの小締りに纏り過ぎた花器、花臺、これも利休あたりの物語りや、つまりその流れを汲んでゐる茶花に比較して如何なる感じが浮ぶか。

遠州流の花を見てゐると、こゝに明かに時代といふものが見えて來る、それのみならず遠州の趣味が多分に加はつてゐるやうな感じさへする、例へば今までは行成や公任の優しい假名文字のみにあこがれてゐたのが、それでは物足らなくなつて、中峰や兀庵の墨蹟が加味したくなる、直線のみでは單調だからこれに曲線を加へて見たくなるといふ風に、遠州流は遠州流により、一は時代の流に順應し、一は自己の趣味を十二分に加味して、今日のやうな型を創成するに至つたのであらうと思ふ。

それ故、はじめて見る遠州流の花は、如何にも態とらしく不自然で、普通の茶花の清楚に如かぬ心地がするが、玩味する中に、矢張り一つの味があつて、巧みに人を魅了する、玆に遠州その人の偉大なる處が潛まれてゐる譯であらう。

◇

松月堂古流の例を引いた序でに、最近私の見た一つの事實を引く、それはある花道家が高山植物のみを以て、その披露の會を催したことである、深山ものを使はぬといふ松月堂古流とは全然反對の立場になつて來る、併し此の時の高山植物といふものは、決して苔蒸した常磐樹やさるをがせの絡つた深山のものといふ意味ではなく、唯、平地にない高山性のもののみで、元より草本もあれば、樹木もあつて、普通には捨てゝ顧みられない雜草の種類すら交つてゐた、私はこれを見て面白いといと思つた。

少くとも、茶花で感じ得ると同様の面白さをこれに見出した、それは挿すべき花の範圍の擴大されたことゝ、徒らに贅澤な感じばかりが先に來る苔付きものが餘りなく、よく自然のものが利用されてゐたからである、この趣味で押し進めて行けば、花道家の擇ぶべき花は、何も口傳書や、聞書の擧げた植物の種類に限つたことなく、どんな雜草や野草でも、十分に活けられるといふこと、煎じつめると、見たまゝのものを直ちに活けるといふ茶花の主意と合致して來る、こゝに面白味がある。

◇

贅澤に見られる花、それは隨分多い、庭に一本、枝ぶりの美しさを見せてゐた樹木もそのまゝに伐り取つて來て、これを僅か二三日の眺めしかない花會に用ひる。

なるほどその植物には、新しい生命が吹き込まれて、藝術的には活きて行くであらうが、庭に殘された根は、あまりにも慘めなものである、だが今日の花道家の中には、かうしたことを誇りとする人々が少くないのを不思議とする。

花屋にいひつけて、お入用おかまひなし、唯見た眼の立派な枝ぶりのもののみを探したがる、苔でもつきさるをがせでも絡つてゐれば、なほ更御機嫌がよい、そこで挿されたものは、樹そのもの丈けの立派さで、肝腎の技といふより、腕といふものは全くその樹のかげに匿れてしまう、かうした事實は今の花の陳列會に

餘りにも例が多過ぎる。

そこで極端な例ではあるが、松月堂古流が深山のものを使はぬといふことが味はれる。

深山のものを使はぬといふことは、無駄な勞力と費用をかけぬといふ意味に解すべきである、日常目に觸れるもの、それで十分である、これを巧みに活かす力を私共は茶花に求め、茶花に習ひたいと思ふのである。

挿された花

十數年前の昔になるが、いま東京で押しも押されもせぬ花道家のA氏が、まだ東京へ出て間も無い時のこと、私の處へ訪ねて來られて、いろ〳〵花に對する談話を交へた、A氏は長らく池坊を研究し、それを基礎として今日自から唱道する處の新しい花道を案出した、いはゞ此の道に於ける一方の先覺者である。

その交した談話の中で、私は所謂初傳中傳、奥傳といふやうな、私達にはよく解らない術語で呼ばれる資格、それと共に師匠から交付せられる卷物を見せて貰つた、いはゞこれが花道家の虎の卷で、それには花の扱ひ方水揚げ法、月々に挿す花の種類、平たくいへばこんな平凡なことが、如何にも鹿爪らしく書いてあつたやうに思ふ。

こんな平凡な許し書を貰ふために、少からぬ年月と費用を要するのかと私は聊か驚いたのである、實際、技術は兎に角、それに書かれてゐることは、少し花のことを知る人ならば、誰も承知してゐる位のことで、一向に有難くないもの、更にをかしく思つたのは、その植物の名稱にさへ隨分曖昧なものがあつたことである、それでも祕傳であり虎の卷である。

今日でさへ少しひねつた花になると、挿してゐる當人が一向その名を知らない、こんなことは珍らしいことではない、それは多く花の擇擇を花屋任せにして置くからで、花屋の方でも正しい名稱を調査研究するでもなく、いゝ加減な俗稱や、甚だしきに至つては、緣日の植木商人と同じやうに、勝手な名を付けて賣りつけるものさへある、有りふれた花では面白くないといふので、深山に入込んで伐出した花などには殊にこれが多い、花道家の方では唯珍らしい變つたものさへ生ければ目につくから、それをそのまゝ受入れて活けるといふことになるのである。

私達から考へると、隨分無駄なことである、何故にもつと大きな方面へ眼をつけて、日常目に觸れてゐる花を活用して見ないかといひたくなる。

雜草として、田園の厄介もの視せられてゐる草の中などには、存外面白いものがあつて、挿し方に依ると我々の目を喜ばせてくれるものがいくらでもある、何故にさうした方面に手を伸ばさなかつたか、例へば、今見る藪からしにした處が、その花をつけた處には一種の味がある、竹煮草にした處が、活用すれば結好人の目を娛しませてくれる。

花道家は花屋ばかりを頼りとせず、自から野に出で植物を採集することである、それは花の自然的形態、花道界の所謂『出生』を知る上に於ても無意義なことではないと思ふのである。

流儀花には、或は私の意見は用ゐられないかも知れない、併し花に對する視野を廣くするといふことは大切なことで、これは敢へて流儀花と投入と、その區別を問ふ必要なく受入れらるべきものと思ふ、そしてよくその植物の生態、色彩、その味を研究し使用すべきである。

同時にこれを容るべき花器の研究を必要とする、今日まで挿花界に於て使用してゐる花器はあまりにも類型的である、紋切型である、たとへば薄端の如き、寸胴の如き、玄猪形の如き、それは長い間、洗練に洗練を經て來て今日に至つたもので、實によく出來て重寶なものであるが、何れかといへば、德川時代、若しくは、その前から在り來つたもので、建築が變り、裝飾が進んで來た今日になると、時に不調和を感ずるものが多々ある、殊に薄端の如きものには、往々低級極まる紋樣や彫刻が加へられて、到底今日の時代に伴ふものでないのがある、しかもそれが平氣の平三で使はれてゐるのである。

かうした無關心から目覺めて、花器に對する認識を新にし、研究を深くし、更に花器ならぬ花器の利用法をも研究すべきである、尤もこれは既に一部の人々の間には行はれて來てゐるが、それはほんの僅かの投入花の人々で、流儀花の方ではまだまだそこまでは、進んでゐないやうである。

新しい工藝美術家はよく花器を製作する、その作品は各所の工藝美術展覽會に現はれる、その作の中には時に花道家の心持が解らず、花そのものを知らずして製作されるものもあるが、時には面白い花器もある、

花道家はかうして花器の製作家と相提携して、花器の研究を深めて行くことも必要であると思ふ。

繪畫と花道との關係を研究することも一つの手段であり方法である、私の處にある大家の作になる小色紙の薔薇の小點がある、それを幅に仕立てゝかけて置いたら、そこへある花道家が見えて、此の繪の筆者は花道をおやりですかと聞かれて、私はその畫家が花の稽古をしたといふ話を聞いたことがないので、『イヤそんな話は聞きません』と答へたら、その花道家は『でも餘りに此の花の挿し方が法に叶つてゐますから……』といはれた、知恩院の錢舜擧の牡丹の幅が、立派な盛花の形であつたり柳里恭の釣花が今日矢張りその範になつてゐるのを見ると、一種の感に打たれる、畢竟構圖の妙味も、花型の眞奥も、要するに『美』である、この一話は何を敎へるのであらう。

先年開かれた浮世繪の展覽會に、無落款の春信の『挿花』が出品された、ハツバー氏の所藏で、私にその解說をかけと求められた、その型を見ると、池坊のやり方である、だが池坊の型から見れば、隨分無理もあり、型の方からいつても整つてゐない、併し唯『挿された花』として見る時、言外の面白味があつた、それは花と花の周圍の色彩も、その美を助けてゐるのに與つて力のあつたことは爭はれなかつた。

こゝに到ると花の型といふものにも、研究の餘地がいくらでもあるといふことになる、それは自然の研究にあり、自然の研究を手取り早く纏めてゐる繪畫を參考とすることに於て、より多くの利益が得られると思

ふ。

花の陳列に就いても、今の花會には不滿が多い、花の色彩と形との調和、花器との配合、高さ、廣さ、それらにまるで無關心で同じ勝手のもの、同じ種類のもの、然もこれを同じ高さに於て、行列させてゐる例がいくらもある、これらも一考すべき事であらうと考へてゐる。

斷雲居雜筆

鵺

ある日のこと、山口蓬春氏とあつて、いろ〳〵と談を交した、蓬春氏曰く、『この間、出入の鳥屋が、珍らしいものが手に入つたのでお目にかけます、御氣に召したら……』というて來ました、見ると虎鵺です『中々面白い鳥で、これは面白いから置いて行つて貰はう……併し繪になるかしら……』とかう思ひながら、虎鵺を眺め、何かの機會があつたら畫いて見やうと思ひました、それにしては一應虎鵺のことを調べて見やうと不圖貴著の『鳥』を出して拜見しますと、此の鳥は昔から不吉の鳥といはれて來たことが書かれてゐますので、ア、これはいけない、こんな鳥を畫いて、若し先方の人がいやな感じを起してはならない、―かう考へましたので、折角鳥屋が持つて來たものですが、そのまゝ返してしまひました』といふ、私は蓬春氏がさうした細かい依頼者の氣持にまで入つて考へる用意に敬意を拂つた。

虎鵺は何故不吉か、それは此の鳥、一名をヌエと呼び、鵺を此の鳥に充てゝ居り、そして鳴くのを凶兆と

する故である、紫宸殿の上に現はれた鵺といふもの、それは猿面虎身蛇尾の座物で、もとより想像のものであるが、夜ごと夜ごと、怪しい聲で啼いたといふのは、此の鵺、卽ち虎鶏ではなかつたかといふことになつてゐる。

蓬春氏は、此の鳥を不吉のものと知つてから、遂に畫かれなかつたが、その後さゐ展覽會に水上泰生氏がこれを畫いて出品した、そして曰く、此の鳥に關する因習を打破したい氣持から……　と、どちらにも面白が味ある。

鷙鳥擒獸

虎鶏は不吉の鳥といはれてゐるが、私はかうした意味以外に避けたい畫題をいくつか見る、例へば古畫によく見るものであるが、鷲や鷹が、兎などを攫んで食べやうとしてゐる圖、鷲鳥擒獸　などゝいふ題で描いてゐる作である、それから狩野派の人々などが、よく畫く鷹が鶴を捕へる圖、あれなどは、壯烈といへば、壯烈に違ひないが、一面には正視するに忍びない殘忍性を帶びてゐる、これは德川時代に鷹狩が非常に流行し、將軍家が鷹狩などする時に、大名や旗本などが、これに從つて出かけ、鶴のやうな獲物を鷹が仕留める時に一種の褒言等があつてこれを褒める、鷹は勢ひ猛に獲物を捉へて降りる、かうした感じを將軍家では

繪所の繪師をして畫かしめたものである、最近にも前田青邨氏がこれを畫いたが、それは流石に昔のやうな殘忍性を包んで、餘程美化されたものであつた。

嘴の蟲

繪畫を見る時の氣持は、少くとも和やかな氣分でありたい、そしてその畫かれたる物象や、自然に溶け込んでゆくほどの餘裕と熟とがほしい。

花鳥畫家は、時々鳥が蟲などを爭ひ喰ふ場面を描く、これも鳥の生活の一部であるし、蟲にも見て感じのよいものと、よくないものとがあるが、それでも嘴に啣へられてゐるのを見るとよい感じはしない、何もかうした殘忍な場面情景を畫かなくても良いではないかといふ氣持になる。

鳥が蟲を食ふことは、一つの本能であり習性であるから如何ともすることが出來ない、寧ろ鳥は害蟲を食つてくれる人間の味方であるから、蟲を啄むことろを畫いたとて差支はないやうなるものゝ、畫家が筆にするに當つて、何もその殘忍な場面を好んで畫くにも當るまいと思ふ。

畫家が一度びこれを筆にするに當つては、害蟲であらうが、益蟲であらうが、そこに一つの美を表現し得ればそれでよい。

蝶は美しい蟲であるが、その幼蟲時代は見るも氣味の悪い毛蟲である。

金砂子

昭和三年頃のことである、島田墨仙氏から久邇宮家御下命の襖繪が出來上つたから、見に來てくれぬかといふ書面を受けたので、早速、中延の玄雲閣を訪れた、墨仙氏としては珍らしい大作、畫題は『伯牙子期』であつた、人物の面白さ伯牙も子期も、よくその性格が現はれて、畫面に躍動してゐる。

私が此の作に就いて、感じを深くしたのは人物の描寫もさることながらその周圍に施こされた金砂子の播き方であつた、實にいろ〳〵の播き方がしてある、そこで私は氏に感じのまゝを話しすると、氏は膝を乘り出して

『砂子をよく見て下さつた、實は今度の作、襖繪のこと故、自分で學んだ砂子の播き方を出來る丈け應用して見たわけです』

と語られた、そして氏は砂子に就いて、更に、言葉を續けた。

今、普通に砂子をふる時は、俗に蒔きあげといふ方法、それを裾濃といつて一番廣く用ひ、それから平砂子が行はれてゐる、短册には重ね砂子を用ひ、色紙にもそれが見える、滲み出しはやゝ凝つた蒔き方となる、更に細かい蒔き方を擧げろと、微塵、揉砂子、大山椒、小山椒、大石、小石などといふのがある、その大小濃淡で、立派に繪の具の代理をするし、繪によるとこれが非常に深味を現はす、いま砂子の蒔き方など精しく知つてゐる人はだん〳〵少くなつたが、自分の知つてゐる處では、織田觀潮氏のお父さんは實に砂子の名人であつた。

と、私は非常に此の話に興を覺え、それから繪の砂子に注意するやうになつた、併し、愚鈍の私には、まだ十分にその名稱や蒔き方が飲み込めずに居る。

墨仙氏が、どうして砂子に斯く精しいか、それは氏の先代雪湖翁が松平春嶽公から拜領した、常信の手記に據つたもので、それは僅か美濃紙二十枚ほど綴つたものであつたが、金泥の溶き方、膠の扱ひ方、墨の磨り方砂子の蒔き方等、それはよく要所々々を記してあつたものであつた、氏は少年時代にこれを讀み深く研究する處があつたのであるといふ、その手記は、その後、氏の令兄が米國へ携へて行つてしまつたが、令兄の客死されたのちは行衞不明となつてしまつた。

『伯牙子期』の襖繪は、その手記が幾十年後に生んだ力作である。

木蘭の實

木蘭の花は、普通に『もくれん』と呼ばれてよく繪にも畫かれる、蕾の中が筆の穗のやうなので木筆花とも呼ばれてゐる。

私の居る家の庭にも、木蘭が一株あつて、早春の候、よく美しい雅致ある花を見せてくれる、私は時に此の花を手折つて、瓶に挿したりすることもある、花の咲く頃は葉が見えず、葉の出る頃は、小さい實の形になつてゐる。

木蘭の實、それはどう見ても決して面白いものではない、海鼠を青くしたやうなグロテスクなもので、これに美があらうなどゝは思つて居ない、だからいつもそのまゝに看過してしまつてゐた。

處が、ある年、その實が熟して不思議な色彩を見せてくれた、即ち實の外皮が裂けて中から目覺めるやうな朱の色の漿果が現はれたのである、永い間、木蘭を見てゐるが、かうした色彩のものを、まのあたり見たのは初めであつた、迂濶千萬であつたが如何とも致し方がない。

その實をじつと眺めてゐる中に、不圖思ひ出したのは、高山樗牛の墓のある清水港の龍華寺を訪れた時の事である。龍華寺には有名な大蘇鐵があつて、それが實を結ぶ、その形は隨分奇妙なもので、佛焰狀をした部分と、朱色の部分から成つてゐる、それがまた靜かな朱色である、何でも藥用になるといふので賣つてゐたやうに思ふ。

木蘭の實を見て、直ぐに蘇鐵の實を思ひ浮べた、それは朱色が繋ぐ聯想である、それにしても、此の實、誰か畫にでも扱つたものはないかと、手の廻りのものは調べたが、誰れも畫いてゐない、して見ると、まだ此の魅力のある朱の色にまで觀察が屆かなかつたのであらう。

木蘭の實は何か藥にでもなるのですか？　家のものは、私があまりに深くこれを凝視してゐるのでかう尋ねた、だが私には即座に答へ得るほどの知識を生憎持合はせてゐなかつた。

『さア花のことは知つてゐるが、實の方は……』とかう濁すより外になかつた、そしてそつと『本草綱目』を開いて見たら

四月初始開二十日卽謝、不結實。

と記してあつた。

朱の色

朱の色で思ひ出す、昭和七年院展の前田青邨氏の出品『石棺』の内部には、素晴しい魅力ある朱の色が見られた、昔は死屍の腐敗を防ぐ爲め、高貴の人の棺の中には、朱を詰めたといはれてゐる。

青邨氏の調べたところに據ると、朱を詰めたなどゝいふことはあまり例がなく、何等かの傳說ではないか

しらといはれた、私は果して石棺の中へ朱を詰めたかどうか知らない。

その朱については、こんな話がある、大正七八年の頃である、兩國の美術倶樂部の賣立に、さる大名華族のものとして、夥しい朱が現はれた、梅印だの松印だのと、いろ〳〵の印がついてゐた、何にするのか、繪を描くに用ゐたとすれば、あまりに量が多過ぎる、一體何に用ゐたのであらう、かうした疑問は誰もの胸に描いた處であつた。

すると間もなく、その朱が何人の手からか、繪の具屋の手に入つて、諸々の畫家の家へ持ち廻はられた、中には安いので、非常に澤山買ひ込んだ人もあつた。その朱を買つてといふ交渉を受けた一人に故人の石井林響氏があつた。

繪の具屋さんは、その朱の包を並べていろ〳〵と色のよい所以を並べ立てた、默つて聞いてゐた林響氏は突然

『でも君、朱はあかい色さへ出ればよいのだらう……』

繪の具屋さんは默つてしまつた。

その後、件の朱は棺に詰める爲めに大名華族の家へ貯へられたものといふ噂が立つた。

それから間もなく、此の朱の行商は影を潜めてしまつた。

漁樵問答　春日光親筆

（謎の畫家春日光親參照）

謎の畫家春日光親

一

春日光親といふ名は、まだほんの一部にしか知られてゐない、併しこれを知つてゐる人は、いま非常な熱心と努力とを費して、その作を蒐集しやうとして居る、處が光親の傳記とかいふものは殆んど知られて居ない、全く謎の人である。

はじめて光親といふものを世に紹介したのは、東京では故吉川靈華氏であると覺えて居る、靈華氏は光親の遺作蒐集家であり、且つ研究家であつた、光親の作が急に市場で高價になつたのもこの爲めだと傳へられてゐる、靈華氏の外には日本南畫院同人だつた、故湯田玉水氏であり、氏は盛に光親の作を集めたものである。

併し大正十二年の大震火災では、東京にあつた光親の作も大部烏有に歸してしまつたらしく、新橋の花月樓には「三十六歌仙」の大作があつて、恐らく光親の作中でも優れたものであつたが、惜しいかな燒けてしま

ひ、神田の末廣町邊では、光親專門の畫商がゐて、これも隨分努力して集めてゐたのであつたが大抵烏有に歸せしめてしまつた、今では牛込の井上文藏博士のコレクションを見るより外はあるまいと思ふ。

あとは光親がその半生を送つた福島縣下の須賀川、郡山、二本松、矢吹附近に散在してゐるもの位である、かうした頼りない光親の研究を、それでも丹念に取纒めたのが此の篇で、大正十三年二月から十日間に亘つて都新聞に連載したものである、いま當時ものに多少、あとから手に入れた材料を加へて、此の謎の畫人を改めて世に紹介しやうと思ふ。

二

春日光親は名古屋の人といふ丈けで、當時は名古屋の誰の子であるかを知るものもなければ、何時生れたかも知られて居なかつた、名古屋史の學藝篇にも春日派の人二三を載せてゐるが光親のことは載せてゐない。

經濟雜誌の大日本人名辭書には、春日光親といふ名があるが、これは基光の男で、右兵衞尉と稱し長久頃の人とある、然も『土佐や住吉の諸系圖に漏る疑ふべし』とあるから光親は光親でも、まるで人が違ふ。

その本名や、生家が判明したのは、此の稿を發表してから數年の後で、名古屋の人、長岡可造といふ人が

筆者に報ぜられたのである、それに依ると、光親の本名は野田三郎と呼び、愛知縣西春日井郡杉村柳原といふ處の人で、父を野田清藏と呼び、光親はその三男で、天保二年の生れとある。

さて光親が、如何なる經路で畫家となり、如何なる人に學んだか、それは未だに杳としてわからない、唯光親が盛に作を出したのは明治十二三年頃からで、その生れ故郷の名古屋附近には作が殘つて居らず、皆福島縣の須賀川附近に殘つてゐる處を見ると、餘程早く名古屋を出奔したものらしい、面白いのは、いま福島縣に遺つてゐる作品の中で、明治に於ける最も古い政治漫畫とも見るべきものが光親の筆で存在してゐることである、これは元代議士市原氏の所藏にかゝるもので、繪は帝國議會開院式の光景である。

それは憲法發布の少し前明治十八九年頃、光親が酒に浸りながら、須賀川へ來て放浪生活を送る中、戯れに今度國會といふものが開ける、それは全國から國會議員といふものを選擧し、それが議事堂に集まる、そしてこんな風に並ぶのだと、議長席や議員席を描き、多くの頭顱を並べ議長らしいのが大口を開いて喋つて居る。

議員さんが草稿を手にしながら何かいつてゐる、守衞や書記が慌しさうに駈けずり廻る光景で、それが如何にも勢ひのよい、自由な筆で描かれて居るといふ、恐らく日本に於けるカリカチュアとしての元祖か知れない。

三

光親の出奔に就いては、こんな異說がある、それは維新當時、光親が名古屋の城中で朋輩を斬殺し捕はれやうとしたので、直ちに姿をかへて落延びたが、その中に明治維新のゴタ〳〵になり、再び名古屋へ戻る機會もなく、放浪生活を續けたものであるといふ、兎も角も青年時代には、多くの志士と交つて國事に奔走したらしく武術にも相應に達して居り、坂本龍馬などゝも交際があつたやうである。

磐代へ來て第一の足溜りは矢吹である、その放浪生活は隨分思ひ切つたもので、繪筆を執るより酒に親しむ方が多かつた、そして少しでも畫料が入ればそれを持つて遊廓へ出かけてしまう、矢吹では殊にそれが烈しかつた。

ある時、例により少しばかりの畫料の入つたのを機會に、馴染の遊女屋へ登樓した、するとどうした事か敵娼が非常に光親を嫌つた、そこで光親は大に憤慨し、遊女屋の褞袍を引かけ、便所の下駄を突かけたまゝでその家を出て、四里の道を須賀川へ辿りついたのであると、光親はそれつきり矢吹へは歸らなかつたといふ、須賀川ではかなり長い間筆を執つてゐたらしく、明治十年前後盛んに作を出した。

四

光親が須賀川の次ぎに足を停めたのは郡山で、それから越後路をさまよひ、常陸邊で行倒れになつたと傳へられてゐたが、これも近頃になつて明治二十一年九月二十六日、下總の松戸町で、五十八歳で歿したといふことがわかつた。

郡山を出る時も、かなり奇拔な出方をしてゐる、元來須賀川、郡山の邊りには書畫好きの人が多いので、光親も相當に仕事はあつたらしい、併し毎日の酒浸りは少しも變ることなく、宿屋の一室に朝から晩まで床も敷き放しで、その中にもぐり込んでゐて、氣が向かなければ筆を執らず、宿屋の主人が如何に骨を折つて勵ましても、その癖は直らなかつた。

ある日、主人が頼まれた繪の催促をした、すると光親俄かに顏色をかへ、寢そべつた儘半折一枚に南畫風の山水を畫き、それを主人の前へ投り出した、それから間もなく主人が再びその部屋をのぞいて見ると、布團が藻脫けの殼となつて光親の姿は見えない、一日二日、三日四日、遂に郡山から姿を搔き消したが、それ以來全く此の世に消息を絶つてしまつた、その最後の作といふものを湯田玉水氏が祕藏して居られたが、いま何人の手に渡つてゐることであらう。

これは須賀川での話である光親がフラフラと外出すると、三日や四日消息を絶つことは珍らしくなかつたある時、一寸繪の具を買ひに行つて來るというて、宿屋を出たら十日も歸つて來なかつた、あとで聞くと、

その金を握つたまゝ宇都宮まで飛んでゆき、そこの遊女屋で、流連して居た、勿論金が無くなると繪を畫いては賣つたので、こんな關係から、宇都宮には多少光親のものが殘つて居り、然もそれには妙な因緣さへつき纏つてゐる。

五

光親が宇都宮に於ける因緣話といふのは、光親に取つては、かなり迷惑な濡衣である、それは光親が高久隆古の僞物を畫いたといふのである、處がその眞相はかうである、光親が漂浪時代に宇都宮に足を停めてゐた時は、恰も隆古が靄崖のあとを承けて飛ぶ鳥も落す勢ひであつた、だから名も知れぬ光親のものなどは見向きもしなかつたのである。

處が光親のものにも流石に優れたものがあつた、そこで狡猾な畫商が光親の名を消して隆古の落款に替へてしまつた、これが妙な處から發見されて、光親が隆古の名を嫉んでその僞物を畫いたといふ訛傳を生んだのである、だから光親の此の濡衣は宇都宮に限られてゐる。

光親の作の一番多い須賀川で、いまも噂に殘つてゐるのは、文晁の『西園雅集』の模しである、これは須賀川の安藤安篤氏の所藏で、文晁が奥州に浪人生活を送つてゐる頃、安藤家の世話になり、其恩返しに、畫

いた三尺三寸幅六尺の大幅である、金碧青綠の素晴しい力作なので、明治の初年安藤家では、これは民間に置いては惜しいと宮內省を經て畏きあたりに献上の手續きに及んだ、宮內省でも大に喜び直ちに御嘉納になり、そのお返しといふ意味か五百二十圓御下賜になつた、其の後、明治天皇が此の畫を御覽あらせられ、畫中に日本の僧一人居るは何人かと、御下問があり下條桂谷翁がそれは圓通和尙で、和尙が留學中此の雅集に參加した由來を奏上したといふ歷史ある作である。

六

安藤家では、此の『西園雅集』献上に際し、切めて模しだけでも取つて置かうと、丁度來遊中であつた光親に依囑した、光親も安藤家の厚意に與る所多かつたので、喜んでこれに應じ、光親としては非常な努力を以てこれを完成したが、出來榮は原作の壘を壓すとさへいはれてゐる。

光親の作品は大別すると二種類ある、一つは春日派の流れを汲んだ作品で、大和繪がかつた取材のもの、一つは南畫風の花鳥と山水である、春日派風の作品には多く光親といふ落款を用ゐ、山水や花鳥には銕山といふ號を以てし、印は『日本銕山』と刻してゐる、銕の字はわざ〳〵金扁に夷の字である。

印の如きも多く自刻のもので、奔放不羈、刀にも非常な力があり、よくその作に調和して居る、山水はそ

の雄勁な筆致、放膽な構圖これに淡彩を施してゐるが、技巧の如きも千變萬化を極め、殆んど端睨すべからざるものがある、春日派風のやうに見る人物の如き、その筆の躍動せる筆致は、伴大納言繪卷の應天門外の群衆それを髣髴せしめるかと見れば、峯山の一掃百態をも偲ばしめる。

山水に至つては全く日本銕山獨自の境地にあつて一本の木、一莖の草と雖も他の追從を許さない、人物畫には漁樵問答の如き傑作があり、その落款を見ぬ時は恐らく峯山というても疑ふものは多くあるまいと思はれる。

七

醫學博士井上文藏氏は熱心な、光親の作品蒐集家の一人で、少からず所藏されてゐるが、氏が長野方面から手に入れたといふ六曲一双の捲りは珍らしいものであつた。

聖賢と、漁夫と、牧童とは、光親の最も好んで畫いたもので、これを三幅對風に畫いたものをよく見る、筆力極めて雄勁、然もその中にえもいはれぬ線の妙味を湛へ、牧童の圖の牛や、野草の線は一見直ちに一種の懷かしさをも感ぜしめるものである。

珍らしいのは花鳥である、花鳥というても、光親は鳥はあまり畫かなかつたやうである、井上博士蒐集品

の中では、木蘭、蓮、梅、芭蕉を畫いた一幅が最も活氣に滿ちてゐた、渡邊晨畝氏も、「幽谷遺聲」の一幅を所藏されてゐる、雅致のあるものである、

春日派風の作では、湯田玉水氏の遺愛品中に「紅葉の賀」があつた、ゴチ〳〵した線であつたが中々に雅致があり、荻生天泉氏の所には「菊の使」がある、餘程よく見ないと菊だか何だかわからない、井上博士の所藏に「佐野の宿り」がある、最明寺時賴も、普通の大和繪畫家が描けば、立流な僧形に畫かれるが、光親の時賴はどう見ても田舍坊主である、そこに赤裸々な光親が躍り出して來る、此作は銕山といふ落款で、「黃中子」といふ印を用ゐて居た、「黃中子」といふ印を使つたのは、信州滯在中の作が多いとの事である、落款などは隨分いろ〳〵で、銕山と書いて光親の印を捺してゐるのもあれば、光親と書いて日本銕山の印を捺したのもあり、銕山の書體もいろ〳〵である。

八

光親の作には時々美事な讃を見る、その書風は多く行書であるが、繪の奔放なのに似ず、書は非常に肅しまやかであり、墨の如きも無關心であるが如くにして實は然らず、筆墨には相應に心を用ゐた形跡が十分であり、山水や花卉を畫いたものには、木炭で豫め下描きをしてその構圖をつけたものもある、これを見ると、

決して酒浸りにばかりなつてゐたとは思はれない。

渴筆を使ふことゝ、點苔の打ち方には、光親は殆んど意想外の技巧を有つてゐた、岩壁の如き此の點苔で、どの位面白味を加へてゐるか知れない、渴筆の用ひ方は、例へば梅の古幹といふやうなものに、無雜作に用ゐて居るが、それが決して全體の調子を傷つけて居ない。

春日派風の作に於て、特に注目すべきは彩色である、殿上の風俗を多く畫いた關係上、華美な色も使つてゐるが、唯にそればかりではない、能樂の如きものにも相應に精通してゐたらしく、この方面の取材の作もあり、その衣裳などには他の種の作に見るやうな奔放な處もなく、かなり纖細な技巧の働きを見ることが出來るのである。

詩作も相應に達して居たらしい、それに山水や花卉の讃にその俤が見られるが、それも杜甫や東坡などゝいふ方面ではなく、高青邱あたりに私淑してゐたのではあるまいかと思はれる節がある、それは文字に現はれた一つの味からであるが、その果して如何なる程度までやつてゐたか、よく判らない。

それから、光親が、如何なる風手の人であつたか、郡山、須賀川邊には、まだ顏を見知つてゐる人もあるが、東京にはあまり無いやうである。

九

埼玉縣熊谷の人、鈴木東作氏が筆者に寄せられた中に、光親の風手の一端を傳へてゐる曰く

小生の光親先生を見たるは、明治十二三年頃、祖父歿後一年一回若しくは二回位、明治二十年頃一二泊位來泊しつゝ有之候へども其頃に知己たる祖父を失ひし上は長居の必要なしとて一二泊にして歸らるゝを常とし、其頃は錢山と號し、盛に亂暴なる南畫を描き居られ候

大抵醉ひ來り、醉つて歸るの有樣にて、多くは醉中の戲畫に等しく、興來ればよく唐詩を吟じ、古今の畫伯を罵倒するを快とせられ、中背の細面、やせぎすの坊主頭にて一見武士的體格に有之、氣骨稜々として阿世的又は權門に媚ぶる等の俗氣は微塵も無之、確かに一見識を有する風格の人と若年ながら記憶に存じ居候

なほ、鈴木氏の來信中には、光親が同家に滯在中、近隣の兒童を集めては、劍道を指南し、附近では之を光親流と稱へたといふ新しい事實が記されてゐた、これを見ると光親の武術に達してゐたことがよくわかる。

こんな武人氣質でありながら日本文學にも精通して居り、殊に『源氏物語』は愛讀書の一であつたらしくそれは作品によく現はれて居り、『紅葉の賀』が既に筆者の見たばかりでも三四ある外、現に信州上諏訪には五十四帖を畫いた大作のある由も、上諏訪の人小松六也氏から報ぜられて來たし、鈴木氏の手にも『夕顏』があつたといふ。

十

光親の人物、光親の作品、それらに對しては、貧弱ながら大體は紹介し得たことゝ思ふ、殘るは光親の作品分布狀態である、新しい說としては、鈴木東作氏の熊谷說で、これは矢張り明治八九年頃から、二十年前後であるらしい、名古屋から木曾路を經て長野に足を停め、途中松本にも足を停めたらしい、但し井上博士は松本滯在說を否認してゐる。

それから下諏訪から上諏訪に居り、上諏訪では牡丹屋に滯在して相當に作品を殘した、現に上諏訪の敎念寺には大作があるといふ。

岡待里庵氏の著者への通信によると、光親は南信州の佐久郡臼田町附近の漫遊を終へて北信州に來り、善光寺平を放浪した樣にも思はれるが或は越後路より入信して中野町にて揮毫した事は確かである、多くの畫幅に揮毫の千支なき爲め、上州より來たか越後より來たか明瞭でない、尙確かに滯留したのは、更級郡鹽崎村の某寺院で、その滯留中醉餘二階より—或は崖ともいふ—墜落して負傷し、出立もならず臥床月餘、辭去するに先だつて謝禮の爲め絹本密畫の双幅を揮毫し、住職に贈つたと云ふが此の幅は今他に轉出せりとの噂あつて、私は未だ之を見るの機會に接しないのを遺憾に思ふと

かうして信州を去つてからは、仲仙道を通り熊谷町邊に足を留め、宇都宮を經て磐代に入り、矢吹を始めとして須賀川、郡山邊に留まつたらしく、越後路放浪は郡山出奔以前であるか、その邊まで判然しない、或は此の回遊を二三回したのではあるまいかともいふ、現に『野崎の客舍にて寫す』と書いたものあるを見れば、越後路は宇都宮時代から日もないことで、野崎から更に北に入つたとも見られる。

光親平常豪語して曰く。『いまの繪は眞の繪でない 氣魄がない、三十年經てば自分の作が持て囃さるゝ時代があらう』と三十年は夢と過ぎて、光親は果して世に出たのである。（終）

行者普寛

一

日本アルプスの南の一角、木曾の御嶽山を王瀧口から登つた人々は、一合目の附近に天そゝりつ行者普寛の大記念碑を見るであらう、高さ一丈二尺有餘、まことに全山稀に見るの壯觀である、普寛行者は實に此の登路の開祖、黒澤口の開基覺明行者と共に、御嶽を中心とする行者や信徒達の尊崇の的となつてゐるのである、處がこれほど有名である普寛行者も、その生涯は殆んど知られてゐない、記錄すらも遺されて居ない、人名辭書もその傳記を載せて居らぬのである、然も此の行者普寛を祖とする御嶽講といふものは、東京丈けでも一萬數千の多きに達してゐる、全國を通じたら少からぬ數に上るであらう、それは毎年の夏、木曾福島驛を上下する白衣の登山團體の數を見ても略想像がつくのである。

御嶽山は此の普寛行者や、覺明行者のあとに、一心一山の二道者があつて、共に此の山の開發に努め、つひに今日のやうな盛況を見るに至つたのである、埼玉縣本庄町は、此の普寛行者の入寂の地である、その臨

終前に、幾度か奇蹟を示したといふ行場は、現にその一角に存して年々全國から數萬の賽者參詣人を算へて居る、私はある年、御嶽山に登つて普寛行者の事蹟に興味をもち始め、何時かその生涯を調べて見やうと種々材料を漁つて見たが、中々思ふやうに集らず、僅かに木曾の故老から聞きえた材料や、行者に緣ある土地の人々の間を探し得た處を綴り合せて、朧氣ながら此の神祕的な生涯の一端を知ることが出來たのである。

行者普寛は武藏國秩父郡大瀧村落合の人で、本名を淺見好入と呼び、享保十六年の生れである、生れて五つ六つ頃までは別に記すべき材料もない、長ずるに從つて、父が劍道の嗜み深かつたので、自然に竹刀を取るやうになり、人知れず村から程遠からぬ三峰山の森林中に入つて、立樹を師として劍道を學んだ、或る日例の如く木劍を手にして、山奥深く分け入り、武術を勵んでゐる中、不圖兜巾篠懸の姿嚴めしい修驗の姿が眼に入つた、これは三峰登りの行者である、十二因緣の襞取る兜巾、九會曼荼羅の柿の篠懸、法螺貝を手にし、錫杖を手にした異樣の姿は、此の少年の眼に不思議な印象をとゞめた、これから山へ分へ入る毎に山の修驗者の一擧一動にわき眼を觸らず見つめて居たのである、それからといふものは、好入の性質がまるで生れ變つたやうなものとなつた、徒らに口を開かず、絶えず何か考へてゐる、父も母も、打つて變つて來た性格に注意せぬでもなかつたが、さて年の故位にしか考へて居なかつた、併し此の一事こそ實に行者となつて世を送るといふ不思議な生涯の芽生であつたのである。

好八は程なく江戸へ出た、東八丁堀の法性院といふのが、三峰の金剛院と關係があつたので、傳手を求め此處に寄寓し、一心に武藝の修業を積み、三十歳までは一個の武術家として世に立ち、後、酒井樂雅頭に仕へる身となり、二十五人扶持を食み、家には五十餘人の門弟を養ふ身とつた。

二

明和元年の春、好八の普寛行者は所用あつて上野の寛永寺に赴き、その歸り途に不圖山下の古本屋から法華經一卷を買ひ求め、道々これを讀みながら家路に就いた、丁度神田の柳原邊に差かゝつた頃は、日は暮れて月の光も無い、讀みさしの法華經を懷にして歩いてゐると、不思議な幻覺で、幼い時に三峰の山奥で逢つた修驗山伏の姿をあり〳〵と見た、そして修驗者から竹刀を棄てゝ珠數を取れと啓示を聞いた、好八は夢見心持になつて東八丁堀の道場に歸り、門弟への指南も中止し一心になつて法華經を讀み耽つた、同じ年の八月、つひに意を決して、妻とき、門弟の一人増田一郎を呼び、それとなく發心の覺悟を語り、髪を切て法衣姿となり、後事を托して一先づ郷里の秩父に歸り、直ちに三峰山觀音院住職日照の室に入つて法を修し天台眞言兩宗の奥儀を究め、名を正本山本明院普寛と改め、愈々天台の修驗となり先づ六十餘州の靈場遍歴を思ひ立つた、時に年三十四、身の丈六尺に達し、臂力飽くまで人に優れ三尺大の笈を背にして立つた姿は

天晴れの大修驗、昔の淺見好八ではなかつた。そして俗塵を離れて世外の境地を拓き靈地を求め、人跡到らぬ山なれば、悉くこれを踏破して法の力と威嚴を示さうとした。

振り出しは三峰の奥の院、それから同同秩父の意波羅山、武甲山にも足跡を停め、更に山越えに上州に入り、藤岡の宿に錫をとゞめ天台の教へを說いて數多の信徒を得、居ること數ケ月、再び發足して利根郡に入り、武尊山を開き、更に北上して越後路に分け入り、八海山に錫杖の跡を印し、此の間權大僧都となり、更に天明二年十月には、傳燈太阿闍梨に上り、聖護院派の修驗長となつた、越えて寛政四年六月十日には、木曾の御嶽に登り、遂に王瀧口も開くに至つた、王瀧は實にその生地、秩父の大瀧の文字から思ひついてつけた地名であるといふ。

木曾の御嶽を開くまでには、奥州路を隅なく巡錫し、更に九州に一回、四國には三回に及んで巡錫、病者を救ひ、貧者を惠み、法の道を說き示したこと枚擧に遑ないのであるが、これも唯行者や修驗の口傳に依つて遺されてゐるばかりである。

普寛が斯く六十餘州の靈山幽境を跋渉して居る間には、實に周到なる用意があつた、先づ役の優婆塞の事蹟を慕つてその舊蹟を訪ひ、木の實を常食として一切の不淨を避け、寛政四年六月十日年六十一の時、靈夢に感じて木曾の御嶽に登り、その登路を拓いたのであるといふ。

三

普寛行者が高山踏破に就いては、幾多の傳説がある、面白いのは普寛が終生身を離さなかつたといふ三箇の寶物で、これは悉くその山嶽開發の時携へたもの、第一は椰子の水呑第二は福田石、第三は雷鳥の羽一番ひである。

椰子の水呑は、水無き山嶽の上にどの位役に立つたか知れない、これは普寛が四國を巡錫中、土佐國香美郡田村（或は東海道ともいふ）を過ぎるとき、不思議な老僧に遭ひ、これは常世の國から傳はつた稀代の水呑であるが、卿は山嶽開基の大任ある身故、山の頂上にて飲み水に事缺かぬやう、この水呑に水を滿たして携へ給へというた、普寛は快くこれを受けて終世携へたのである、此の水呑の名に就いては、御嶽山縁起、に、『八鹽の水呑』と記されてある、八鹽は汲めど盡せぬの意であるが、いろ〳〵綜合すると、椰子の實を水呑としたらしく。椰子を八鹽にもじつたのである、土佐の海岸には、潮流に乘じて遠い南洋からよく椰子の實が、漂着することがあり、里人これを得て珍重したこと屢々耳にする處、此の水汲もそれであつたのである、かうして遠い八重の潮路を漂流して來た椰子の實は水呑となつて、不思議にも普寛行者の腰につくやうになつたのである、福田石は木傳石ともいふ、矢張此の旅僧から傳へられたもので、草根木皮も食む身には空腹の時も多からうと此の石を與へた、此石を携へる時は、更に空腹を覺えぬといふ。

木曾御嶽開發の示現を得た普寛は、飛び立つばかりに喜び、更に靈覺に依つて山開きの日を定め、江戸靈岸島和田孫八、住吉町の三河屋庄八、本材木町の村田善右衞門、京橋竹川町の山城屋清七、屋張町の京屋金七の五人が普寛に從つて山に向ふことゝなつた、處がこゝにまた木曾の御嶽村木屋吉右衞門といふもの、江戸靈岸島の材木問屋桝屋庄三郎方の手代となつて居たが不思議の御告に依つて一行の東道者となつた、かくて寛政二年二月二十一日七人は旅姿甲斐々々しく、殊に普寛は三尺大の笈を背に、錫杖を手にして、江戸八丁堀を發足し、三月には木曾に入つた。

時は三月の末であるが木曾路はまだ雪も深く、嶺は雲に閉されて道も分らず、七人は唯木曾川の流れを逆りつゝ道なき道を分け入つたのである、漸くにしてやゝ平な土地に出たので　こゝを故郷大瀧に因んで王瀧と名付けた、一合目を過ぎると今までの雲は名殘なく霽れて、頂上は手に取るやうに仰がれた、一行はこれに勇氣百倍し、金剛童子を過ぎ、頂上に至るまで千辛萬苦、七人は各々口々に經文を誦しつゝ登つたのである、一行が八合目に辿りついた時、何處ともなく不思議の靈鳥現はれ一行を迎へるやうである、頭の毛やゝ赤く全身白色を呈してゐる、一行はこれを文珠薩菩の化身として、そのあとに從ひ扇一本を目印として鳥の